

さよなら三角また来て四角

平 龍生

【純な目をした少年少女たちの哀歓溢れる感涙・感動の物語！

六甲山麓の小さな街鈴蘭台で、敗戦後最初で最後の卒業生となった「小部小学校六年生」に忍び寄った戦争の影…。縁故疎開と神戸大空襲、そして終戦、飢えと物資不足の窮乏の苦難の時代、それでも、平和日本の夢を育てるべく、彼らは明るく次の時代へと巣立って行った！】

目次

プロローグ

第一章 夕陽ヶ丘の少年たち

第二章 ある夏の終わり

第三章 鈴蘭台の夕焼け小焼け

第四章 向こう三軒両隣り

第五章 埋もれ火の影

第六章 再度山の安全神話

第七章 烈日夏が過ぎて

第八章 さよなら三角のた来て四角

エピローグ

さよなら三角また来て四角

平 龍生

プロローグ

六甲の山麓を分けて、山の奥地へと走る高山電車の線路道はかなり険しかった。急勾度（きゅうこうど）千分比五〇パーミル、この尺度は登山電車の数値でも二五程度、箱根鉄道などとも匹敵されるほどの急勾配となるので、別名、この神戸電鉄は高山電車などとも呼ばれていた。

神戸の市街地、湊川駅を起点にして北の方角になる三田、（さんだ）有馬粟生（あおう）方面へ、ローカル味たっぷりの路線道をこの電車は走っていた。どこまで行っても、山また山で、途中、角度のついたカーブの箇所なども多くて、行く手の山々を分けて進むには、かなりのエネルギーを要した。平均時速三十キロの運行速度だから、この高山電車ののろのろ振りも分ろうというものであった。

山の尾根道を縫ってひた走る、その懸命振りが好きで羽鳥宏志はこの高

山電車にわざわざ乗った。何しろ、この電車に乗るのは六十数年振り、少年時代の思いも重ねながらのことで、やはり、ことごとく、ごっつんと、大儀そうに、昔のままの、のろのろ運転のままに走って欲しかった。

勝手なもの思いであった。

湊川から四つ目の駅、鈴蘭台駅を彼は目指していた。七、五キロの行程となる。鈴蘭台地区は山麓にある小さな街で、羽鳥宏志が少年時代を過ごした思い出の地であった。湊川のトンネルを抜けると、目の前の視界が急に開けた。電車は市街地を外れていた。山の稜線を列ねた六甲山系の山々が、ゆつくりとはあつたが、視野の先で動いていた。どこまで行っても山が重なる風景で、空の向こうまでも塞がっているようにも見えた。

五月の季節のことで、新緑の柔らかさが目に沁みだ。車窓の外の景色は見た目にも清々しくて、羽鳥宏志は爽やかな気分にも浸れた。

こっつんと、こっつんと、レールの軌轍音が絶え間なく響いていた。

山道を懸命に分けていると言う実感もそこに耳には伝わって来た。

羽鳥宏志はその音感のほども楽しんだ。崖地なども、窓の直ぐ際まで迫ってくるので、かなりのスリル感も羽鳥宏志は味合った。

窓の外の風景にばかり気を取られている羽鳥宏志だったが、この地に舞い戻って来たのは、「同窓生たちとの約束事」を、実行に移すためであった。

ニューヨーク在で、世界でも知られるサクソフォン奏者と言うのが、羽鳥宏志のこれまでの人生経歴。もう、高齢者となっていたが、羽鳥宏志は

現役のジャズマンでもあった。

二重襟の付いたライブ・グリーン系のラフ・ジャケットにインディゴブルーのジーンズ、さり気なく着こなしていたがよく似合った。

ロマンスグレイの髪も見様によってはカッコいい。何よりこの男、この年代にしては足が長かった。Tシャツの胸のロゴには、「SUIT YOU RSELF!」のプリント文字が打たれていた。「勝手にしろ!」そんな意味の込められたパロディシャツのようだった。

「同窓生たちとの約束事」だが、こちらは、少年時代の友、藤王勇輝と亀福権太との三人の少年たちによって交わされたものであった。

話を、往時に戻せば、三人は「小部（おぶ）国民学校」を、敗戦の翌年、昭和二十一年春に卒業した仲間同士だった。

国家総動員法での国民学校制度下、太平洋戦争終結後、最初で最後の「国民学校」の卒業生と言う稀有な体験を持つ者同士となった。

混乱期なのに、「小部国民学校の六年生」たちは、再度山（ふたたびさん）の麓の地、修法ヶ原池（しおがはら）までの修学旅行の夢を叶えることが出来た。これからの平和日本を背負って立つはずの少年や少女たち、その旅立ちを祝つてのことで教師らの善意が実を結んでこれは実現した。

「食べ物が無い窮乏の時代」なのに、卒業生たちには「心からの弁当」までも用意された。

これはこれで、一つの物語になりそうな話、心和むストーリーがここに

は秘められていた。

その時、サクソフォンの演奏者になる夢を抱いていた羽鳥宏志は、親友の二人を前にわが夢を語った。こちらは夢物語の序章編。

藤王勇輝と亀福権太の前で、関西弁そのものの台詞を披露してしまったのだった。

『わいな。この再度山の向こうに向けてや。思いつ切り、一曲、吹いてこましたるよつてにな。その日まで待つてんか。ほんまもん、ほんまもんのサクソフォンの奏でる曲や』

十二歳の少年の約束事だが、やっと日本が復興の兆しを見せ始めた昭和四十年に、「卒業生一同」が集まり二十年振りの同窓会は開かれたのだが、当時、ジャズの本場ニューヨークのジャズバンドに在籍し、日々多忙を極めていた羽鳥宏志は参加出来ず、その機会を逸した。

その前年には日本で初めてのオリンピックピックが開催され、また、東海道新幹線の東京―大阪間が開通したりで、戦後の復興が顕著になり、また、人心も平穏さを見せるようになっていた頃のことであった。

その後、藤王勇輝とは、手紙でのやりとりもあり、お互いの消息は確かめ合っていたのだが、肝心の「約束事」は果たせぬままに、今日まで長い歳月が経過してしまった。

それだけに、今回の来日、羽鳥宏志には大いに心に期するものがあつた。いや、特に、藤王勇輝からは、語り明かせぬその物語の総てを、改めて訊

(き) いて見たかった。

何の遊びもない荒んだ軍国時代だったのに、羽鳥宏志のみならず同窓生のみんなは藤王勇輝少年の言葉遊びの才、その機知(ウィット)精神のお陰で楽しい日々を過ごせた。

何より、藤王少年が得意とした『替え歌遊び』に、今も、羽鳥宏志などは大関心ありで、その続きの話にも尽きせぬ興味があった。

藤王少年は、『さよなら三角また来て四角…』の数え歌、この歌の替え歌の名人で仲間たちに人気があった。それに級長なので、まとめ役もこなしていて何かと気の利く少年でもあった。宏志少年自身は、「疎開児童」の一人だったので、転校早々でいい友も得た。

その後、フリージャーナリストとして、確実な一步を印して来た藤王勇輝自身の生き方の原点のほどは、案外とこう言うところにあったのかなどと、羽鳥宏志は考えてもいた。ともかく、藤王勇輝が機知に富んだ少年であつたことは間違いはなかった。

機知を発揮するには、それなりの批判精神も必要だから、適性ありの仕事に、藤王勇輝は就いたと言うことも言えそうだった。

「待てよ。待て、待てえ。さすがに忘れたようだな。さよなら三角、また来て四角、四角は豆腐、豆腐は白い、白いは、えーと……」

思いを巡らせては見たが、羽鳥宏志は口ごもった。何しろ昔のこと、やはり、この続きは、藤王勇輝から直接に訊くしかないようだった。いや、

場面場面での言葉遊び、あの頭の回転の速さは、彼から言わせると“天賦の才”、いまもって敬服に値いするものだった。

あくまでも、どこまでも、六甲の山脈（やまなみ）は羽鳥宏志の行く手を遮っていた。やがて、源平合戦の戦場、鴨越（ひよどりごえ）の逆落としで知られる急峻の崖地近くの鴨越駅を電車は風を切って通過した。

行く手の覆いかぶさる峻しい山容に見惚れているうちに、羽鳥宏志の気持ちも、いつか昂揚して行った。一曲、奏でたくなった。

「こいつは、おいらジャズマンがよく口にして来た“ジャズを放つ”ってやつだな。言うなれば、おいらは終生、チンドン屋稼業だが、お好きなスタイルで、この戦後、即興演奏（ジャム・セッション）に心意気を感じながら、その一刻、一刻の生きる場を楽しんで来た。アーティストなんかじゃないさ。おいらは人を楽しませるエンターテナー。そう、ジャズマンとか言ってもだ。この半生、音を奏でるチンドン屋そのものだったよ」

さらに、行く手の山々の壁は高くなった。

青い空を突き破って佇（た）つ山の頂き、急なスロープを下る尾根、やっぱり、どこまで行っても山が立ち塞がっていた。

ところで、一曲を奏でるために目的地に向かっているはずなのに、羽鳥宏志は手ぶらのままで、楽器など、所持してはいなかった。

「何事も仕掛けありよ。人生は総てドラマチックじゃなくちやな」と言うのが羽鳥宏志の持論の一つであった。童心に返った少年そのものの顔にな

り、その時、羽鳥宏志はにやっと笑った。

起点の湊川駅を出発して十数分、やがて、山麓に広がる小さな街鈴蘭台の街並みが、窓外の行く手のあちこちに顔を出し始めた。

もつと時間を要すると思っていたが、時間を計ると十七分、やはり、のろのろ電車の運行速度は、この時代、大幅に、改善されているようであった。抑圧ブレーキの音を、ききつ、きーつと、立てながら、高山電車は鈴蘭台駅に到着した。改札口を出て、羽鳥宏志は駅頭に立った。

往時を懐かしむ顔になり、改めて、羽鳥宏志は駅前通りを見回した。ごちゃごちゃした狭い街並みで、いくつかの小さな商店が、今も駅前通りには張り付いていた。この印象ばかりは昔と余り変わらない。

以前よりは人口も増えて、バス停などもあり、駅前通りは雑然としていて狭くも見えたが、鈴蘭台地区が六甲の山懐に抱かれた街であることは、今も変わりはなかった。

「さてきてえ。“お帰りなさい。羽鳥宏志さん”と、その辺から、ふいっと知っている誰かが現れて、そう、歓迎の言葉を掛けてくれるような気がするな」

あたりをひとわたり、彼は見回した。

撫でるようにしてやって来る山嵐（おまおろし）の風も、体に溶け込むように、どこかからか、ふーと、この時、吹き寄せて来た。

山に囲まれたこの街には、『安全神話』のようなものが戦時下では存在し

た。山しかない地域なので、敵機の空襲もないと思われて来たのだった。事実、山に守られて、この街は空襲にも晒されることなく終戦を迎えていた。天賦の地の利に恵まれた地なのでもあった。

「さよなら三角、また来て四角…」か。無邪気にも思えるこの替え歌だが、あの戦時下の時代、楽しいことばかりってわけではなかった。この替え歌には、色々と、その時々の人々の思いなども込められている。特に藤王勇輝にとっては、人の生死とも関わっている歌でもあったのだから、別の側面もありだった」

今更のように羽鳥宏志がそんな思いを抱いたのには、相応の理由があったことだった。

藤王少年に取っては、“さよなら三角…”の歌には、哀しい物語があり、そのことを思うと、今でも羽鳥宏志の胸は痛むのであった。

「だからこそ、あいつの数え歌、あの替え歌の続きや、その物語とやらも、今一度、初めから尋ねてみたい気がする。この世が平和であればあるほどだ。あの少年の日々、あれは何だったのかと自問自答をしてみる価値は大（おお）ありだ。そうでなければ、我々の同窓生物語、完結しないって話になっちまう」

そんな感慨を込めて羽鳥宏志は改めて呟いた。大きく頷いた。いつとき、真顔になった彼だったが、それでも、直ぐに相好が崩れた。

この時、一台の車がすと、駅前通りにと近づいて来た。そちらに顔は

向いた。合図のために羽鳥宏志は手を振った。

車を運転し、迎えに来たのは、これから会うはずの同窓生の二人ではなく、若い女性であった。向こうからも手を振った。

「おーい。こっちだ。はは、サプライズありだぞ。よもや、お二人さんはこのことはご存知あるまい。こう言う最終章の幕開け、いちばん、みんなに思い出のある鈴蘭台駅発ってところも、こりや、なかなかのものだ」

一人、羽鳥宏志は悦に入った。これから親友たちに会う期待感のほどが顔に表れていた。

彼の笑みを浮かべたその横顔に、溢れるばかりの眩い五月の陽光が降り注いで来た。そして、飛ぶようにして、光も撥ねた。

これからの大舞台、スタンバイOKの段取りだけは、ひとまずは整ったようだった。

第一章 夕陽丘の少年たち

第一章 夕陽ヶ丘の少年たち

1

鈴蘭台夕陽ヶ丘、本当の地名ではなく、この名は藤王勇輝少年が自分の
思いを込めて付けた名であった。夕陽が美しいから、この名を少年は冠し
たのだが、低く連なる山々の端に懸かる夕陽は季節ごとの色合いをそれぞ
れに映じてくれて、いつも美しかった。

昭和十七年の秋のある日のことだった。

遠くには六甲の山々が重なって見える地形で、秋も終わりの季節、折し
も夕陽が山の端に懸って西の空は茜の色に染められていた。

地名としては、一つ鍬山の名がある丘陵地で、賑わいのある鈴蘭台の駅
前の街合いからは少し離れた場所にあった。

街からは、いくつかの曲がりくねった急坂を上ることになる。

丘の一角には住宅が一塊りになってあり、視線の先には低い山々が望め
た。それに、畑地や、雑木林などもまわりにはあって、この辺一帯は自然
の環境にも恵まれていた。

この地帯一帯の通称の呼び名は、“けんぺいたい”で、そう呼ばれていた

由来は、この辺に、軍隊の憲兵用の公舎があったからであった。

戦時中ならではの呼び方だった。勇輝が名付けた夕陽ヶ丘の丘陵地と、この憲兵隊の長屋風の公舎は四、五十メートルほど下った至近の距離にあった。他にも、あちらこちらにいくつかの住宅が散在していたが、当時は、まだ開発が進んでいないので、この時代ではまだまだ山間の地の趣が残されていた。その分、このあたりは静かな佇まいなので見る角度によっては、朝日も夕陽も美しい。

「なあ、権太、もうそろそろ、カラスがやって来るんやないかと思うて、わいは、気が気やないんや」

と、勇輝が権太に言い、西の空の方角を指さした。西陽が落ちるのは早かった。ひゅつと風が鳴った。二人の吐く息も白くなった。

何しろ、神戸の市街地とは三、四度は気温が違うことがある山の台地、秋から冬へと、季節が移り変わるのも早かった。二人とも小部国民学校の三年生、九歳の少年、着古した浅黄色の国民服を着ていた。どちらの服の袖も鼻汁が白くこびり付いていた。ハンカチやティッシュなんてどこにもない時代だから、鼻汁を拭うには、この法しかない。

それに二人とも裸足で、履いている磨り減った運動靴はもうとっくに廃棄処分にしてもいいような磨り減りようだった。

小さな台地の突端に一本の柿の木があった。早生(わせ)種の富有柿で、

熟した柿の実が一つだけ取り残されて細い枝に懸っていた。今にも落ちそうなの、そんな危うさの感じと共に一つだけの柿の実を残した小枝も心なしに揺（しな）るように揺れ動いていた。今にも熟果は落ちそうにも見えなかった。二人が屯（たむ）ろしている畑地の道からは十メートルほどの距離があった。その台地の向こう側は石垣で畑地の視界の端はそこまで、それで、柿の木は一本だけ大地に立っているかのようにも見えていた。

「なあ、喰いたいなら、おまえ取って喰えばええと、いつも、わいは言うてるやろ。どうせ、ぺっちゃんど地べたに落ちるんやし、そいで一卷の終わりやんか。そないに勇輝、こだわることはないて」

柿の木の様子を窺いながら、藤王勇輝と亀福権太の二人の少年が会話を交わしていた。

「そもならんて。うちのおかん、一個だけ柿の実が残ったんは、隣保長のおっさん、落合の奴が貧乏一家を試そうと思うて、仕掛けた罠やと、ずっと、信じてるさかいにな。なんや、芋を二個盗んで、ほいで、懲役二年になったんがおるんやと、落合の奴、そないなことまで言いよるねんて。嫌がらせや。“渴しても次景の水は吞まず”とおかんは言うてる。わいもそう思うてるっ」

この話の、かくかくしかじかは、要約すると次のようになる。

戦時の体制下に敷かれたのが隣保長制度、いわゆる、向こう三軒両隣の掛け声の下に生まれた国の組織の一つ。

何軒か単位の隣組をまとめる長が隣保長、応召を受けて戦地に赴かなくとも済む年配者が多く、大抵は、頑固一徹の愛国者顔の男たちで隣保長は占められていた。ご多聞に洩れず、落合満次もその一人、勇輝一家の住む鈴蘭台駅前近くの四件長屋の一軒の主で、評判の悪い六十年配の男だった。

この台地の一角に、この男のたどん作りの工場があり、勇輝のお母（か）ん、菊江は安い金でこき使われていた。当時は、たどんは貴重な物資で、分りやすく言えば、炭の粉を練り固めてだんご状に丸めた燃料のこと。

炭の粉にまみれて真っ黒になって働かないとこの仕事は勤まらなかつた。その小さな工場の外れにあるのが、今、二人の少年が向かい合っている台地の丘、柿の木が一本植わっていたのだが、毎年、誰かが柿の実を夜になると盗んでいくと、落合は吹聴していたので、勇輝のおかんも気を揉んでいたのだった。特に、今年の秋は、わざとらしくかどうか、実を収穫したあと、これ見よがしに一個だけ柿の実を残されたので、おかんならずとも疑心暗鬼、手の込んだ犯人探しのからくりが仕組まれているようで、勇輝一家は過剰反応をしていたのだった。

それもこれも食糧事情の悪さと、戦時下の荒んだ心のゆえ、特に勇輝の一家は父親のいない女手の家族構成なので、問題の隣保長にはこっぴどくやられている口、その延長戦上での事情もこれは多少は絡んでいた。

「いや、やっぱり泥棒はやらん。わい、腹が減っても我慢するで。なんや、柿一個や。そないなもん、腹の足しにはならんて」

「腹が減っては戦さにならんやんか。わいなら柿は搦いで喰ってカラスが喰うたんとかやうかと腹をくくって、知らんぷりしてるで」

「かぼちや頭の禿頭。わいが付けた名が、“さよなら三角禿おやじ”や。ほんま、あいつ、替え歌の通りやで」

かぼちや頭と言うのはやたらと顔が大きかったからだが、“三角禿おやじ”と言うのは、前額部が逆V字型に禿げ上がっていたからで、その頃に流行っていた数え歌の、尻取り遊びの歌の一節から取ったものであった。

その元の歌詞は『さよなら三角また来て四角』から始まり、最後は『長い廊下 廊下はすべる すべるは親父の禿頭 ぴかぴか』となる。色々な替え歌があり、この尻取り歌は、この戦時中では何の娯楽もないので子供たちの楽しみの一つ、各地で盛んだった。

こんなあだ名を付けての憂さ晴らし、少国民などと、ガキ扱いされていた当時の子供たちが、よく口にしたこれは遊びの知恵の一つ。

やがて、夕陽は落ちる際(きわ)の眩い光芒を山の端に広げ始めていた。ちかっと、一瞬に輝いた光の矢が山頂のあたりに刺さった。

山の端には大きな鈍色の光輪が落ちようとしており、その背景の茜空も急に光を失った。その間際の瞬光が矢せるに連れ、夕陽全体が飾り絵のように夕空に張り付いた。こうなると落ちるのは早く、夕陽は更に光を失い、山の端の稜線も暗く塗り込められた。

「なあ、そないなことに氣い張ってるのん、しんどいで。そないに勇輝が

柿が喰いたいんやったら、わいがなんとかしたるう。な、亀福権太にまかせとけって」

「喰いたいとか、そんなこととはちゃうんや。こないなったら意地張り合戦や。初めはおかんも、もろうて来て柿を喰わせたるて言うてたんや。あいつ、工場長やからな。安い工賃で働かせているんやから、働かせているもんに柿の一つや二つはくれるやろうと思うてたのに、ケチんぼうおやじ、そのやり方が、おかんも、この、わいもえらい気に入らんのか」

「それは分ったけど、柿の見張り番、これで、もう何日目や。なんや、やり過ぎやで」

「そやかて誰かが盗んでみる。どうせな。うちのおかんが疑われるに決まತ್ತるやんか。わいらの一家、柿泥棒にされてしまうねん」

これで五日目、柿の木には先日までは数葉の枯れ葉がついていたのだが、風に巻かれてはらはらと散り落ちた。柿の実も初めはうまさうに見えたのだが、熟し色が更に増して今はぶよぶよ皮の柿の実、味のほども格段と落ちてきているに違いなかった。“触れなば落ちん”の柿の実、見た目にも半分は腐っているように見えた。「早う、食べてくれんと、ほんまに腐って落ちるで」と、柿の実も、勇輝に語り掛けているようでもあった。

「ほんまのこと言えて。ほんまは勇輝、盗ってでも柿が喰いたいんやろ。勇輝のお腹（なか）ぐうぐうーと、さつきから鳴ってるで」

「くくく」

と、勇輝が凶星を指されて小さく笑った。

「何や、欲しがりません、勝つまでは」かいな。そないなん、あほらしいこつちやで」

「ええ、ええ、痩せ我慢でもここは我慢せんならん。わいの意地ちゆうもんや」

丸坊主のいがぐり頭が二つ、低い山の方角に向けられていた。今しも、夕陽が一日の終わりの光芒を山の端に収めようとしている時のことであった。権太は夕焼け空に顔を向けたまま、この時、ずるずるっと鼻を啜った。

二人の肩先を不意に風が掠めて舞った。ひゅうと鳴る。

「うわっ、勇輝、カラスや」

突然、権太が大声を上げた。ぐわーっ、ぐわーと、だみ声を発しながら三羽のカラスが西の空にやって来て、これ見よがしに空を舞った。

暗くなった空なので、余計に黒いカラスは黒く見えた。

「あかん、あかんて。あいつら柿の実を突つ突きよるで。権太、カラスの奴を追っばらわんと、おい、力を貸してくれや」

「よっしや」

柿の木のあるところまで二人は走った。

「あいつら、村のカラスかいな。それとも町のカラスかいな。なっ、どつちや」

柿の木の下に到着した時、権太が勇輝に訊(き)いた。カラスは獲物を

狙っているふうだったが、ここまではやって来ず、山の端の夕空をぐるぐるとまだ旋回中だった。

「悪い奴は村のカラスに決まっとるやんか。町のカラスやったら、勇輝を困らせるようなことはやらんて」

「そやけど、町のカラスのほうが腹を空かしているんや。これは、わからんて」

したり顔になり、勇輝が解説してみせた。

「村のカラスと町のカラス」。

これにもそれなりの曰（いわ）くありだった。

鈴蘭台区の住宅地に住む新参の者たちが町のカラスで、鈴蘭台駅から外れた田や畑の農地や山林の地に住む元々の住人たちが村のカラス。この言い分けも、勇輝が付けたものだったが、まるで田舎者と都会者の違いのようにも聞こえるが、どちらも山間に位置する田舎の地、神戸市街地に住む者から言わせれば、鈴蘭台と言えは“ドイナカモン”となるのだったが、それでも、この時代、大いなる違いはあった。「村のカラス」が住む一帯は農作地で食べ物には比較的恵まれており、それに比べると、食糧難の時節のこと、「町のカラス」たちはみんな腹へコで元気がなかった。

勇輝が命名した「村のカラス」たちは、食べ物の質量の違いの分だけ「町のカラス」たちよりも優位に立っていたのだった。

カラスの一群を「村のカラス」などと、ついつい、勇輝が口にしたのも、

言うなれば、喰い物の恨みのせい、“喰い物の恨みは恐ろしい”と言うのはいつの時代でも口にされる文句だったが、殊（こと）の外（ほか）、骨身に沁みる今日この頃であった。

「そら、ないて。あいつら銀シヤリかて喰えるんやろ。柿の実を狙って飛んで来るんやったら、それは町のカラスに決まってるやんか」

至極もつともな説を権太が口にした。

その時、案じた通り、一羽のカラスが柿の木を目掛けて飛んで来た。

人間の気配などまるで気にしていず、ばたばたと羽音を立てた後、ひよいと、厚かましいカラスが一羽、柿の木の細い枝に止まった。

カラスは柿の実を狙っているに違いなかった。

尖った嘴の先が勇輝には凶器そのものに見えた。

「おい、泥棒カラス、ええ加減にせえんかい」

権太は怒ると鼻の穴を膨らませる癖があった。

棒切れを振り回した権太の鼻の穴が大きく開いた。ひゅひゅと、二、三度、棒切れが風を切った。小気味のいい音が空を切り裂く。

「ぎやぎや、くわーっ」

と、人間を小馬鹿にしたような訳の分らない鳴き声を上げ、そのカラスは柿の枝から飛び立った。黒い羽が夕空を叩いた。

やっと、手にしていた棒切れを権太が傍らに投げ捨てた。二人は顔を見合わせ、「ぶー」と肩で息を吐いた。急に夕焼け空は暗い空の色を含み、山々

の稜線を昏（くら）く染めた。すっと、夕陽は落ちた。

夕陽ヶ丘の一日の終わりの時刻となっていた。二人の少年は肩を寄せ合った。その二人をも忍び寄ってきた来た夕闇が更に包み込んだ。

「ほな。勇輝、新作のさよなら三角、また来て四角や。あれ聞かんと、わいらの一日は終わらんよってにな。今日も一丁、頼むわ…」

と、いつものように権太が勇輝をけしかけた。

これは二人がさよならする時の合図、この遊びをやらないと、一日が終わったような気には二人はなれないのだった。

「ホイ、来た。ほな、行くで」

♪さよなら三角 また来て四角 四角は硯（すずり） 硯は黒い 黒いは

カラス カラスは帰る 帰るはお山 お山は赤い 赤いは夕陽♪

「そういうことや。夕陽は赤い、赤いは夕陽…で尻取りも終わりで、一日の終わりや」

遠くの遠くの空で、カラスが「かあかあ」と、喧しく、啼くのが聞こえた。

二階もありの造作の四軒長屋。一、二階、二間ずつはあったが、それでも勇輝の住む家は狭く感じられた。六畳間が一つだけ、あとは、三畳に四畳半の間取りの縦長の長屋、もちろん、庭なども猫の額ほどで、今で言うところのアパート風の棟割り長屋だった。

鈴蘭台駅から線路下の道に沿って歩くと徒歩三分、四軒長屋は駅とは至近距離にあった。高い石垣の上に神有電鉄の線路道は敷かれていたが、勇輝の家の二階の物干し場からは、電車の行き来が見えた。

それほどに勇輝の住む長屋は駅に近い至近の場所にあった。

石垣の直ぐ下には線路道に沿うようにして、南谷（みなみだに）の池の方面から流れて来る小川が流れていた。水は清くハヤなどの小魚もいた。

この川の流れば、やがて、六甲山系に抱かれる大きな川にとつながるのだが、この地で見ている限りは、まだまだ小さな川で水の流れもそれほど勢いはなかった。

母の菊江に兄の勇、姉の登美子、勇輝。一家四人の構成だったが、いつもは、女二人に勇輝の家族の三人暮らしだった。

外国航路の船員をしていた父親が病死し、そのあと、生計を立てていくために、十九才になる兄の勇が大商船舶の乗組員になり、常時、家を明けていたので、勇輝の一家は母子家庭を余儀なくされていたのだった。

姉の登美子は勇輝よりは二歳上で、国民学校の五年生、母の菊江は四十一歳となる。外国航路の船員だった父親広治は勇輝が五歳の時に病死をし

ていたので、勇輝は余り父親との思い出がない。ブラジル航路などに出たら、航路は二、三ヶ月を要し、普段から父親は家にはいない身であったせいもあつた。その父親の跡を継ぎ勇は船員となったのだが、菊江の近頃の心配事は兄の勇のことだつた。兄の勇は軍に徴用された軍用船の乗組員で台湾近海の航路に軍用船は就いていた。

いつなんどき、敵の潜水艦の標的となり、軍用船は沈没させられるか分らないので、危険な海域に身を置いている兄の身の上を、いつも、菊江は案じていたのだつた。

昭和十六年十二月八日の開戦時、日本軍は真珠湾奇襲攻撃では大いに戦果が上がリ、この後、南方に戦線を拡大、勝利に続く勝利で国民は誰しもが意気軒昂だつたのだが、やがて、昭和十七年六月五日に、死命を制する南方地域のミッドウェー海戦で、主力空母四隻と艦載機を一挙に失い、日本軍は戦いの主導権を敵国に奪われる羽目となつた。

アメリカを主力とした連合軍の圧倒的な軍事力の前に、その後、各地で、負け戦さを強いられることとなるのであつた。

壊れ掛けで、時々、ぼんぼんと叩かなければ音を出さないわが家のラジオ放送で国が発表する大本営発表の戦果のニュースは耳にすることがあつたが、大方は、大人たちからの口移しで得られる話だけが伝わっていて、戦果の有り様も正確な情報は、勇輝など少年たちの耳には届いてはいなかつた。それでも、国民学校の日々にも戦意高揚のための諸策が持ち込まれ

ていて、否応なく、勇輝たち少年も戦争というものを肌身に感じるようになって行った。

そんな日のこと、転校生が一人あった。

羽鳥宏志と初めて勇輝らが出会った日ともなった。

その名を名乗った少年はこの頃には珍しくなっていた学帽を着用し、国民服を着ていたが、その仕立ても一見都会ふうで、近頃のお仕着せの国民服とは一味違っていた。何より、その装いの様には清潔感があった。

（あいつ、金持ちのボンボンやな。今時、ええかっこしてからに。そやけど、男前やな。頭もよさそうやし、これや、かなわんで）

とても、町のカラス程度の勇輝には太刀打ち出来ない相手、勇輝はそう決めて掛かった。

昭和十七年六月には敵機による東京空爆があり、学童疎開の必要性が巷間では口にされ始めていた時期で、その先駆けとして、縁故疎開が一部では自発的に実施されていた。

民間人への空襲被害を避けるための安全な場所として、山間の街、鈴蘭台地域などもその対象地の一つとなった。正確には、縁故疎開、集団疎開などの施策が発表されたのは昭和十八年三月で、実行に移されるのは昭和十九年からとなるが、一部では、縁故者を頼つての早々の疎開も行われるようになっており、その一人目が、この少年と言うわけだった。

辺見先生が級長の勇輝と副級長の加賀美理紗に、転校生の面倒を見るよ

う指示した。勇輝の斜め前の席に転校生のこの生徒は座った。場に慣れず、終止、羽鳥宏志は一日の授業が終わるまで身を固くしていた。

この日、教室ではもう一つ異変が起きた。

一週間に一度、教壇の上の花瓶には季節、季節のきれいな花が活けられていたのだが、とつぜん、学校側の判断で中止となった。

同級生の「花屋のハナコ」こと、寺山花菜子がさつきから涙顔になりずっと俯いていた。

その横顔を見ながら勇輝は胸を痛くした。許せない事が起きていた。

花菜子の家はこの時代には珍しく花の栽培をしていた。高級花のバラなどは神戸に外国人居留地もあったことで戦前から需要があった。さすがに、戦時下、そんな贅沢な花は「花屋のハナコ」のところでも一部しか栽培していなかったが、それでも草花程度の花は栽培していて、いつも、花菜子の父親は学校に季節の花々を持参してくれていたのだった。

鈴蘭台地区の名にちなんで、毎年五月、鈴蘭の白い花が咲く季節になると、鈴蘭台駅構内などに、可憐な白い花が飾られた。それに、開花期の五月の季節になると、学校の校庭の隅に植えられている鈴蘭も、釣鐘型の白い花を咲かせて、生徒の目を楽しませてくれた。

戦争により教師の多くは狩り出されていたので、先生不足の時代だったが担任の辺見先生は師範学校出で三十六歳の熟練教師、代用教員の多い中では指導的役割を果たしていた。「花を活けるなんてこの軍国時代に軟弱そ

のもの。きつぱりと校長先生が花の持ち込みをお断りになったので、花活けの花瓶も、もう、今日からは教壇の上にはありません」

と言う話が教室の学童たちに伝えられた。

辺見先生の口調はきつぱりとしていた。

(なんや。ハナちゃんが悪いみたいな話やんか。そいで、ハナちゃんが泣いているなんて、こんなん、わいは許せんで)

一人呟き、勇輝は胸を痛くしていた。

もつとも、辺見先生に抗議が出来るような教室の雰囲気ではなく、結局は、終日、勇輝は黙ったままの時間を過ごすこととなった。

「これからは食糧増産です。花作りではなく、みんなが食べられる物を、これから花畑では作るようになります。そのための土地を与えてくれるのは、寺山さんのお父さん、花ではなく、南瓜、サツマイモ、野菜、今、必要とされているのは銃後を守るための食糧です」

どう言う事情なのか飲み込めず、転校生の羽鳥宏志は辺見先生がもつともらしい説明をしている最中、ただ、戸惑い顔を先生に向けていた。

下校時間、やっと勇輝は宏志に声を掛けることが出来た。下校の道筋が同じで肩を並べて家に帰った。権太もその一人だった。

「あのな。寺山花菜子んこのお花畑をつぶしてしまうなんて、無茶やで。

そやろ。あいつんとこのお父さんて、えらい働き者で、研究熱心、昔、聞いたことがあるんやけど、新種のバラの花をいくつも作り出してな。そ

いで、国から表彰されたこともあるんやて」

「それって、白君影やろ。白色系の新種のバラなんや。去年、やつとうちでも咲いたんや」

「えっ、そんなん、お前、知ってるんかいな」

「神戸の須磨のな。うちの庭には、バラの花も咲いてたさかいにな。よう、知ってんねん」

何事もないような顔をして宏志が答えたので勇輝はびつくりし、思わず宏志の顔を見返した。細面の宏志がどこかの貴公子のように勇輝には見えただ。やっぱり宏志は都会者、こいつには適わないと改めて勇輝は思った。

「お前んとこ、遊びに行ってもええか」

宏志に興味を示した権太が宏志に訊いた。

「ええよ。うちは婆ちゃんと二人だけやけど、そうやな。うちの婆ちゃん、話がおもしろいから、その話を聞きにくるだけでも値打ちがあるかも知れんで」

「なんや、お前、ごつつう大人やな。わいら、喰い物の話しか出来へんのに、婆ちゃんの自慢話かいな。まいったあ、まいったや」

敵を前に降参、ほんとうに勇輝は白旗を掲げていた。その分、好奇心も湧き、早速に、宏志の家に行く約束を取り付けた。

神有電鉄の鈴蘭台駅から一つ先の駅の近くに、宏志の住む家はあった。

道筋につながる途中、電車の踏切の所で、宏志とはこの日は別れた。

「おい、あいつ、わいは気にいらん。田舎もんのわいらを馬鹿にしてるとちやうか」

別れるなり、権太が息巻いた。

鼻の頭がいつものように膨らみ立っていた。

「なあ、わいら町のカラスやったら、羽鳥宏志は都会のカラスやな。なんや、町のカラスよりはあれは上やで」

「それに、村のカラスや。えらいカラスの種類が増えてしまっやんか」と、権太が答えた。

「賑やかでええわ。そんなことよりな。わいは、あのあと、ハナちゃんになんも声が掛けられんで、えらい後悔してるんや」

「わいも、花より団子の口や。腹いっぱい食べられるんやったら、別に文句はあらへん」

「あほらし、わいだけやな。ハナちゃんのこと心配してるんわ」

「なんや。そないに気にするところを見ると、ハナちゃんに、勇輝は気いあるみたいやで」

「なに言うてるんや。わいは級長やからみんなのこと心配してるのやないか」

思わず知らず勇輝は大きな声を出していた。

「ええ、ええ」

そんな勇輝を権太が制した。

分ったような分らないような、二人の少年はお互いの心の裡がなんでも分っているような口を利き合った。それだけに仲がよかった。

“花より団子でなく、団子よりハナちゃん”。そうとも受け取られかねない話の結末は、二人の曖昧なやり取りの末に終わっていた。

3

「そんなん、おかしいわ。うちはハナちゃんとは大の仲良しやからな。学校では花なんて禁止で、それ、何（なん）よ。食べ物なくても女の子は花の好きな子、多いのにな。よっしゃ、うちら花の仲良し三人組、理紗ちゃんを誘おうて、姉ちゃん、慰めに行ってくるわ」

五年生になると、もう口の利き方も大人だった。姉の登美子が下校して来るなり、勇輝をつかまえた。副級長の加賀美理紗は近所に住んでいたこともあり、登美子らは、子供の頃から遊び仲間、花好きであることから、“花の三人組”と、名乗っていたのだった。

背は低いがぼつちやりした丸顔で色白、目もぼつちりとしていておっぱ頭、登美子は可愛い顔をしていた。二つ違いの登美子はお姉さん役、花菜子と理紗には大いに頼りにされていた。

「ハナちゃん、怒られたみたい泣いとった。わいも、アホな話やと思ったんやけんど、なんや、しゃーない話や」

「この秋はコスモスやった。赤と白、それに桃色、みんな可憐な花やった」
「あんな、姉ちゃん、コスモスなんて言うたら非国民やで、学校ではコスモスは敵性言葉の一つなんや。“秋桜”って先生は言うったで。ヒヤシンスは風信子やろ。なんや、女の子の名前みたいで、わいもいややけんどな」
「うちらはコスモスはコスモス、ヒヤシンスはヒヤシンスや。そのほうがええ」

登美子はつんとしたふうの口を利き、勇輝相手に不満をぶつけた。

“敵性言葉を使うな”のキャンペーンは、すでに、軍国主義台頭の昭和十五年頃から日本にはびこり始めていた風潮だった。横文字の英米の言葉が日本古来の文化や、思想を変えるものになると一部の国粹主義者たちが唱え始めた。特に、音楽や芸術分野での西洋用語は軽佻浮薄と見做され、統制される傾向が強かった。戦時下になると、一層に、この機運は高まり、強制ではなかったが、敵性言葉を使う者は非国民とされたのだった。

ちなみに、コロッケは油揚げ肉饅頭、フライは洋天、カレーライスには辛味入り汁掛けご飯、キャラメルは軍狼精（ぐんろうせい）で、サイダーに至っては噴出水と相成った。

「うちら女の子は、季節、季節の飾り花の名前を覚えるのんも楽しみで、ハナちゃんにはな。いっぱい飾り花の名、教えてもろうたよ」

「食糧増産、そいで、ハナちゃんこの花畑も、勤労奉仕で、みんなで耕して、これから冬ねぎでも植えるんちゃう？そないな話やで。どうせ、わ

いらの口には入らへんけんどな」

「あほらし。うち、今から、ハナちゃんところに行ってくるわ。女の子は女の子同士、話が合うさかいにな。それに、ハナちゃんのお父さん、うちは大好きなんや。ハナちゃんのお父さん、花は食べられんけんどきれいな花を見てたら、お腹が減ってるのも忘れるでって、いつもうちら女の子には声を掛けてくれるし、きれいな花かてくれはるんや。ほんまに、お花畑がなくなってしまうんやったら、うちらがみんな花はもろうたる。花が可哀想や」

「なんや、今日はいなご捕りに行くのとちゃうんか。明後日が学校への供出日やで」

「そやな。いなご捕りもせなならんな。うち、友達と約束してん。しゃーないわ。ハナちゃんところに行ってから、ほなら、うち、東小部まで行くことにするわ」

「なんや。また、姉ちゃん、村のカラスの奴に手伝わせるんかいな」

東小部あたりは田園地帯で、ひとまずは村のカラスの領域、いなご捕りを手伝うのは村のカラスたちと言う構図がここでは成り立つ。

「なに言うてん。女の子が、いなごを串刺しにするなんて、あないな、むごいこと、出来るわけがないやろ」

「そやけんど、村のカラスはやな。そないなことして、わいら町のカラスにやで。貸しを作ってるんや、そいで…」

「勇輝、あんたが姉ちゃんの代わりしてくれるんやったら、止めてもええけどんな。なあ、アレはあれ、ソレはそれで、コレはこれや。いつも言うてるやろ」

これは姉の得意の話術で、話がややこしくなると、いつも姉は「アレはあれソレはそれでコレはこれ」とうまく話を誤魔化してしまった。勇輝と同じように言葉遊びをするのが得意で、これも姉の慣用句の一つだった。

「いやや、わいはわいの分があるよってにな」

「ハナちゃんと理紗ちゃんのいなご、二人分はな。ハナちゃんのお父さんが、取ってくれはる。ほんま、ええ、お父さんや。うちも、あんなお父さんが欲しいわ」

結局、姉の登美子は寺山花菜子の家に加賀美理紗と出向き、勇輝たちの少年グループは誘い合っていないが狩りに中山たんぼに赴くことになった。

これも食糧調達の一環で、秋の実りの季節、稲穂に群れているいなごを採集して熱湯を掛けて熱処理し、乾燥させてから学校に持って行くのが学童たちの義務となっていた。

鈴蘭台駅の直ぐ横に高架トンネルがあり、そこを潜ると通称登り坂の急な坂道となり、どこまでも歩いて行くと、水田ばかりの稲作地となる。

それほど駅とは離れていないがこの辺一带は稲作地だから村のカラスたちの親たちの領域、町と村の領域は仕分けがされているわけではなかったが、勇輝ら町のカラスたちにとっては町外れの地ではあった。

稲穂はもう刈り入れ時が近くなっていて、たわわな稲穂を重そうに垂れていた。風が吹き渡ると黄金の波がさざなみ打って、どこまでも続いて行く。その稲穂に喰らいつくようにしていなごがぴよんぴよんと飛び跳ねていた。もう、水田は乾いていたので、イナゴを捕まえるのは簡単だった。一匹、一匹、手で掴んでおき、用意した竹笹の茎に二人はいなごを刺した。一本の竹笹でおよそ十数匹、胴体あたりを突き刺すので、その度に黄色い汁が滲み出て、手が汚れた。

姉の登美子が嫌悪感を露わにしたように、串刺しになったいなごは竹笹に刺されたあとも、むごむごこと動いた。

このあと、家に持ち帰り、熱湯を掛けて供出用の食糧とする。勇輝たちが聞いている話では、供出されたいなごは乾燥されて粉末にされ、他の栄養分のあるものと混ぜ合わせて丸薬にされると言うことだった。この錠剤様のものは飛行兵たちの食糧になると聞かされており、ぽいぽいと戦闘中に丸薬状の簡易食を口に放り込んで、「撃ちてし止まん」の心意気で飛行兵たちは敵機を撃ち落とすと、その成果のほどが国民の間には伝わっていた。

秋晴れの青い空には雲一つなかった。

どこを見ても、戦意高揚の標語もなく、戦いの場の緊張感もここにはなかった。ひたすらに黄金の波だけが地を渡って行く。今日は秋風も吹いていて心地が良い。それに少年たちの高い声も空に跳ね返っていて、ここだ

けは別空間の趣があった。

やがて、少年たちの周囲にも戦争の暗い影が忍び寄って来るのだが、嵐の前の静けさのような平和な時が、いつときだが流れていた。

「なあ、勇輝の姉ちゃん、村の大將、門倉伸太郎の手下になっとるんちゃうか。いなご捕り、手を貸してもらうことがやな。あいつらにゴマを擦っていることになるんや」

事の次第を知っている権太の言分だった。

「門倉伸太郎は村ではいちばんの百姓家、昔は庄屋やった言うから、いまも家来のもんがいっぱいおつて、どもならんで。まあ、いなごぐらい、ええわ。あいつんとこのたんぼで親が使われているさかいに、村のカラスの半端もん、そら、文句も言えへんし、門倉伸太郎、あいつ、えろう貫禄もあるし、親分顔をするのもしやーないことやけんどな。それに、あいつ、学級も上で、いっぱいめしを食っている分だけ、体もごっついしな。まとも当たったら、わいらの負けや」

さらに、権太が胸の内を明かした。

当時は、まだ小作制度と言うのがあって、大地主の者は賃貸しのようなかたちで土地を貸し、そこから年貢とも言える収穫物を得ていた。戦後に農地解放が為されて、これらの土地は細分化されるのだが、戦前は、農家にも歴然とした貧富の格差があり、門倉伸太郎に限れば、小作人の学童の家の者は、何かにつけて、門倉家の跡継ぎである伸太郎の顔色を窺う癖が

色濃く残されていたのだった。

中山たんぼから、元来た道に戻って来ると、神有電鉄の高架のあたりが見えた。今しも、神戸の起点駅湊川駅からの二両連結の電車が鈴蘭台駅に到着するところであった。

やっと、自分たちの住む街に足を踏み入れた気に二人はなれた。

4

鈴蘭台駅とは支線になる粟生（あおう）線の最初の踏み切りを越え、急な坂を上った林間地帯の一角に、羽鳥宏志の家はあった。

もう少しその坂を上がると、鈴蘭台駅から一つ目の駅に、鈴蘭ダンスホール前と言う当時としては、珍しい横文字の名の駅があった。

この戦時下、遊興ごとはまかりならぬの当局の通達でダンスホールそのものは閉鎖状態にあり、この年の十一月には、小部西口と駅名は変更になるのだが、水色の板壁造りのモダンな洋館風の建物だけはまだあった。

何しろ、鈴蘭台地区は戦前に西の軽井沢の売り名の元、分譲されて広がった地。高級住宅、別荘などが多くあり、当時としてはハイカラな街とされていた。昭和九年に誕生したダンスホールの客を当て込んで、鈴蘭台駅からはタクシーも発着。神戸の市街地からやって来る新しもの好きの客や、それに、神戸港を訪れる高級外国船員なども遊興目的で訪れて、このあた

りはそれなりに繁盛したと言う。

他にも神有電鉄沿線の神戸寄りの地、小部尻の地名のところにある旅館内にも、もう一つダンスホールなるものがあつた。

もちろん、勇輝と権太の二人は、ダンスホールが男女遊興の場であることなどまるで分つてはいず、その存在も知らずにいた。

ここらあたりは別荘の分譲地で、周りには何軒かの大きな家が散在していた。雑木林と、荒れた草っ原、その一角に、ぽつんと建っているのが宏志の家で、どこか、別荘風に見えた。

庭もたつぷりありで、勇輝には大きな家に見えた。

「みんなよう来てくれたね。狭いところやけど、まあ、入んなされ」

勇輝と権太の二人は宏志のお婆ちゃんに迎えられた。白髪が少し混じっていたが、まだ、六十に手が届くかどうかの年恰好、上品な顔立ちのお婆ちゃんだった。

「藤王勇輝です。よろしゅうお願いします」

「級長さんらしいご挨拶やな。お二人とも、うちの孫、よろしゅう頼みます。宏志は小ちやい時にお母さんを亡くしてな。それで、婆ちゃん子で、まあ、甘えん坊やけど、ええ子やから、よろしゅう、付き合つてやつてんか。お頼み申しますで」

「は、はい」

こんな丁寧に語り掛けられたことはこれまでにないので、緊張をし、勇

輝は畏（かしこ）まったふうの返事をした。草っ原に家が建っている分だけ、たつぷりと家の間取りは取ってあった。応接間のような大きな畳部屋に通された時、勇輝は心が休まりほっとした。

勇輝の家のように、ごちゃごちゃと室内に物を置いていないので、部屋の間取りは、勇輝にはとても広く感じ取れたのだった。

「なんにもないご時世でうちにはなんにもないけど、金平糖（こんぺいとう）ぐらならあったんで、みんなでお上がりなさいな」

通されたのは和室で畳部屋、卓袱台（ちゃぶだい）の上には、小皿に乗せられた金平糖が用意されていた。小さく尖った星型のかたちをした金平糖は砂糖をまぶして固められた菓子で、元々は、ポルトガルから南蛮文化の伝来とともに日本に持ち込まれたもの。

こんな贅沢なものは勇輝たちは久しく口にしていなかった。大事なものを掴み取るように二人は手を出し、金平糖を口の中に入れた。

「あまーい」

「こんなん、もう、手に入らへんもんな」

顔を見合わせ、勇輝と権太の二人は口々に、感激の文句を発した。宏志も一個、口に放り込んだ。何でもないような顔をしている。

「なあ、婆ちゃんのおもしろい話を聞かせてもらおう前にな。とっておきの、おもしろいもん、二人に見せたるわ。わいの部屋に来（き）いな」

二人はおっかなびっくり口に入れたのに、まとめて五、六個、宏志は金

平糖をぽいぽいと口に放り込み、次の段取りを口にした。

「なんや。自分用の部屋ありか。それかて凄いいことやな」と、これは権太の言。

「はてはて、今度はなんやろう？」

勇輝としては、大いに好奇心にも駆られた。二人は感心しきり、勇輝と権太は宏志に案内されて、宏志の勉強部屋に入った。

洋机があるのにも驚いたが、宏志が取り出した物を見て二人は更に目を丸くした。大きな楽器入れの容器の蓋を開けたら、金色に輝いた見たこともない管楽器が現れた。

「開けてびっくり玉手箱や」

勇輝が口にしようと思った台詞を宏志が先に口にしていた。

得意げな口調だった。

「これはな。サクソフオーンと言うて、そのなんや。敵性用語では使うてはならん名前の楽器なんやでえ」

「サクソフオーン？そんなん、わい、聞いたことない」と、権太。

「ほんまはな。金属製曲がり尺八と今は言うんやて。そない言わんと非国民になるんや」

「なんや。もう一回、言うてくれへんか。よう、わいにはわからん」

権太が改めて問い質（ただ）した。

「金属製のな。曲がった尺八つうんや」

「一丁、吹いてえな。どんな音がするのん？」

「よっしゃ。息を吹き込むだけしか出来へんけど、ちよつとだけ、音を出したるか」

宏志はサクソフォーンのマウスピース部分に平べったい竹べらのような小片（ネック）を挿し込むとそのラッパロに口を付けた。

それらしく、管楽器の鍵管に手指を掛けた。少し上方に向けて掲げ、かつこを付けてから、ラッパロから一気に息を吹き込んだ。

「ふぁ、ふぁ、ぴぴーっ、ふーっ」

と、ひとまずのところ音だけは出た。

それでも、管楽器特有の高い吹奏音は響いた。

「まあ、この程度や。曲なんか。弾けへん。金属製曲がり尺八と言うけど、ほんまは、これは木管楽器の種類なんや」

ラッパロから口を離れた宏志が解説をした。

「へえー、なんで、そないなもん、宏志は持ってるのん？いや、なんや、

それに、音楽のこと、いろんなこと知ってるんやな」

今度は勇輝が事の仔細を問い質し、かつ、感心して見せた。

目を丸くもしていた。

「そんなら、婆ちゃんの部屋に行こか。あっちの方が、玉手箱だらけ。それこそ、開けてびっくり、撃ちてし止まんや」

「お前、ごごっつう、おもしろいやっちゃやな」

親愛の情を寄せ、権太が言った。

お婆ちゃんの居室は一階の一番奥の洋間部屋、高い屋根裏もあって、何か曰く有りげに二人には思えた。

板床の造り、二人は出された座布団の上にちよこんと座った。

「わたしの部屋にようこそやね。うちは戦前まではの上海帰り、あんまし、関西には住んでなかったんで、神戸弁はあんまりうまくないけど、いっぱいわたしの話を聞いてくれたら、もう、それだけで満足満足なんや。おもしろいとか言う話、いっぱい有り過ぎて、一度では話は出来んけど、精々、遊びに来てや。わたしの名前は羽鳥マリと申します。マリは片仮名、覚えやすい名やけど、近頃は、ぶっそうな世の中やから、マリなんて敵性言葉やと、よう言われて困っているのや」

標準語と関西弁を一緒に混ぜ合わせてマリ婆さんはしゃべった。よくよく見たら、紺色の裾長のワンピースのいでたち、それに、首には小さな真珠の首飾りも付けていて、マリ婆さんはかなりのおしゃれ者だった。

ふんと香水の薰りもした。

もちろん、少年たちにそんな奥ゆかしい薰りのことは分からない。

ハイカラなお婆さんが一人そこには居ただけのことであった。

マリ婆さんの言う上海帰りの一節だが、それらの仔細は少年たちは知らなかったが、戦前から戦中に掛けて、中国・上海の地に“上海租界”と言う特別の区界・領域があり、欧米の列強諸国などが一時期、治外法権の地

を樹(う)ち立てていて、日本国もそれに倣(なら)って、特別の租界地を有していた。その是非はともかく、上海租界では特に戦前などは自由が謳歌されて、いわゆる自由人が多く誕生し、踊りや音楽、それに芸術の各分野でも、目覚しい各人の活躍の足跡が残されという経緯があった。

マリ婆さんの上海帰りと言うのは、この戦時の時代では禁句だったが、あくまでもマリ婆さんは自由人のようだった。

「ほんまに、敵性用語には困ったもんやな。な、サクソフオーン、宏志に見せてもらうたんか。あの変な日本語訳、ほんまになんとならんもんやろか」

「はい、変な名で、曲がり、なんとか…」

「そうや。それからな。ついでに教えて上げるけど、楽団演奏に欠かさない楽器、トロンボーンは抜き差し曲がり真鍮喇叭(らっぱ)。コントラバスなんかはもっとおもしろいで。妖怪的(やかい)四弦(よっせん)って言うのや。なあ、なんのこっちゃ、さっぱりワカランわ」

もちろん、この話を聞かされている少年たちにも、さっぱり話は伝わって来なかった。

「学校でも、ドレミファソラシドではのうて、ハニホヘトイロハなんやつて? なんや、こっちは分かり易いけど、わたしなんか、もう、今の世の中、ついていけへんわ。ついでに言わせてもらおうと、バスは乗合自動車で、女の車掌さんなんて、バックは“背々(はいはい)”で、オーライは発車、

ストップは停車、あれも大変やで。“背々、発車・停車”。なんや、いそがしゅう聞こえるわ」

ついつい、マリ婆さんの話は横道に脱線してしまった。

「わいの父ちゃんはな。上海の楽団でサクソフオン、吹いてたんやけど、現地の言葉が話せるからて、なんや、軍属にされてもって、それで今はおらへんのや」

宏志が話を元に戻した。狐に抓（つま）まれたような顔をして話を聞いている二人に、宏志がそれらしい説明を加えてみせた。

後は、マリ婆さんが引き継いで、その間の事情を告げた。

「神戸の須磨に家があつて、そいで、昔は上海と我が家を行ったり来たり。宏志は小さかったから日本育ちやけど、日中戦争が五年前に始まって、そいで、わたしと宏志は本土に定住することになったんやけど、宏志の父ちゃんは軍属で通訳の仕事で現地召集されてな。そいで、日本にはそうそうは帰ってこられんようになって。さっきのサクソフオンはな。まあ、父ちゃんが吹いていて大事にしたもんなんや。なあ、宏志、よう磨いて、いつも、ぴかぴかにしときなはれや」

「うん、分ってる。大（おお）きゅうなつたらわい、サクソフオンを吹くんや。いつも、ぴかぴか、これ、わいの宝もんやさかいにな」

「そや、その心意気を忘れんといてや。あいな。ここの先の鈴蘭ダンスホール前駅やけんどな。なんや、敵性用語なのに、これだけはまだ残ったる

けんど、宏志の父ちゃん、ここの鈴蘭ダンスホールの演奏楽団で、ちよこつとの間やけんど、サクソフオンを吹いていたこともあったんやで。それで、まあ、そないな縁もあつてな。わたしら、この鈴蘭台にな。引越して来たちゆうことや」

と、これは、勇輝と権太にともなく、マリ婆ちゃんは言つて聞かせた。ダンスホールの件は二人にはよくは呑みこめてはいなかったが、分つたような顔をして二人とも頷いた。

「大きゆうなつて、わい、サクソフオンを吹けるようになったら、婆ちやんの好きな、なんや、ジャズとか言う曲、吹いて聞かせたるわ。それまで待つときいな」

「違う、違う、ジャズ言うのんは今は敵国のアメリカで生まれた庶民出の音楽のことで曲の名とは違うんよ。音楽の分野のこと。口で言つてもわからんて。そやな、うちには蓄音機もあり、レコードも何枚か持って帰つたから聴けるようになったら聞き。そうか。レコードも音盤とか言うんやな。まあ、そんな時はみんなを呼んでな。そうや、こう言うことは、ゆっくりした気持ちにならんとレコード聴くなんて無理やけんどな。そうや、もう一つ、付け加えておくわ。婆ちやんの好きなジャズの曲は、『聖者の行進』なんやけんど、あの曲はもう最高やなあ。ルイ・アームストロングで名前の、ああ、そつかあ。人の名前、口にしても敵性でことになるんかいな。まあ、ええわ。そのなんや。この黒人歌手の人の歌入りで、サクソフオンの演奏

を聞いてるのん、あれはもういちばんやな」

真面目に話す時は標準語も飛び出すようで、マリ婆さんは関西弁も交えながら、そう、みんなに言って聞かせた。宏志も含めて、マリ婆さんの独演ぶりに、みんなぼかんとした顔になった。このご時勢とは別世界の話、横文字もみんなはちゃんと聞き取っていなかった。何しろ、人名まで交えての講釈で一度聞いただけでは、耳には止まらなかった。

ともかく、勇輝らにとつてはこの出会いの場は、驚き驚きの連続、こんな人種に出会うなんて思いもしないことだった。

それに、どこか秘密めいていて、胸がときめきもした。

「あのな。敵性用語やけど、うちの髪の毛、少しパーマメントが掛かっているやろ。パーマメントは電髪と言うんやて。なんや、お化けみたいやけんどな。うちは、ご時勢には合わん電髪婆さん、これや、えらいこつちやぞ」

最後に、マリ婆さんはみんなの笑いを取った。

余りの駄目押しぶりに、宏志も勇輝も権太も腹を抱えて笑った。

帰り道、勇輝と権太は、久し振りに、“こんぺいとう”の尻取り歌の遊びをした。

宏志のところには長居をしていたので、西の空には夕焼け雲が懸かり始めていた。歌い出したのは勇輝の方だった。

♪いろはにこんぺいとう　こんぺいとうはあまい　あまいはさとう　さ
とうはしろい　しろいはうさぎ　うさぎははねる　はねるはのみ　のみは
あかい　あかいはゆうひ♪

「なんや、のみを一匹捕ったら、もう、赤いは夕陽で、これにて、もう、
一日の終わりや」

宏志の家から帰る時、勇輝と権太はマリ婆さんに約束をさせられた。

時勢が時勢、今日の話は世間に知られては困るから、宏志を含めて三人、
他言しないように申し付けられたのであった。

マリ婆さんの話は秘密めいていて、特別の世界を覗き見たような思いを
勇輝は抱き、もっと、この家に勇輝は遊びに行きたくなった。

5

鈴蘭台夕陽ヶ丘の高台に一つだけ残されていた柿の実は地べたに落ち、
柿の木は尖った枝先だけを秋空に掲げていた。

急に秋も深まり、鈴蘭台の地にも冷たい風が吹くようになった。この山
間地でも六甲嵐しの風が舐めるように大地を掠めて過ぎた。

そんな或る日、少年たちの耳に、とんでもない悲報が飛び込んできた。

副級長の加賀美理紗の父親は地元新聞、神楽新聞のカメラマンで、やや

こしい敵性言葉に直せばこちらは報道写真部員と言うことになる。

市内の取材に駆けずり回っている毎日だったが、神戸東部・丘陵地帯に位置する諏訪山動物園の動物たちが、飼料調達の困難さ、また、空襲も心配される状況下、往く往くは殺処分の対象とされることになり、今回はこの記事の報道写真員の責を負うことになった。

すでに、首都にある東京上野動物園では、戦争が始まる前から飼料の統制が厳しくなり、動物たちの餌の確保が困難なことから、前年、昭和十六年二月には、ヒマラヤクマ三頭、ニホンツキノワグマ一頭が軍の命令を受けて、銃殺により殺処分の対象となっていた。

この話に一役買った加賀美理紗は、実は父親の求めで諏訪山動物園に行をし、動物たちと最後の記念写真を撮って欲しいと頼まれていた。

あくまでも報道写真員としての父親の決断で、戦時下の動物たちの有り様を歴史の一齣（ひとコマ）に止どめたいと言う思いからこの話は端を発していた。

話は、そこから始まり、勇輝たち少年らにも同行可能ならば協力してもらいたいと、理紗を通して姉の登美子に連絡があった。

「うちは理紗ちゃんに同行するで。ハナちゃんもや。女仲良し三人組やもん。写真員で仕事はな。いろんな写真を撮っておかんとあかんのやて。動物だけ撮った写真はいっぱいあるんやけど、これまで人間と一緒に仲よう過ごして来たんやから人間と一緒に居た証明にもなる記念写真もな。ど

うしても、理紗ちゃんのお父さんは残しておきたいんやて」

そう、登美子が勇輝に訴えた。

「そんなら、花の仲良し三人組が行くんやったら、わいら、男代表で行ってもええで」

「学校の先生にはな。防空写真の撮影に協力してもらいたいて、理紗ちゃんのお父さんは話をすると言うとった」

「なんや。防空写真て？」

「チンパンジーにな。防毒面を着けさせて写真を撮るんやて。新聞に載せたら、みんなおもしろいから見るやろ。宣伝効果があるんやて」

結局、時局に対応した方策との判断が為されて学校側の許可も下り、小部国民学校の学童代表は諏訪山動物園を他日訪れることとなった。

実際は、猛獣類の殺処分の実行は翌々年の夏の初め頃以降となるのだが、ともかくも、男女六人の学童たちは諏訪山動物園に赴くこととなった。

神戸市街地の東部の高台に位置していたので、終戦となるまで諏訪山動物園は空襲の被害を受けることもなく無事だったのだが、軍部が決めた猛獣類の殺処分命令そのものは覆ることはなかった。

動物園に足を運ぶなど、勇輝たちにとっては久し振りのことだった。

暗いニュースを胸に秘めて訪れているのに、そこは子供心、みんなは嬉々と声を弾ませることが多かった。

象舎では、すでに、この年の秋にオスの「ダンチ」が栄養失当で死亡し

ていたのでメスの象が一頭いるだけだった。大食漢なので食糧不足の折から、生かしておくだけの食糧の調達が難しく大往生させてしまったと、案内役の園長はみんなに悲しそうな顔で説明をした。

園長が案内役を務めてくれたお陰で、ここに収容されている動物たちの悲喜こもごもの暮らしぶりをみんなは知らされた。

どの動物も腹へこ、自分の食べる物まで節約して係員は動物たちに餌を与えており、動物が痩せる前に、人間様が痩せてしまうと、その苦勞ぶりを園長は語った。

「わたしらの諏訪山動物園は、ここは山側の地で、空襲には遇わないで済むのではないかとも考えているんですがね。何しろ、国としては都会地は全国一律での処置、やはり、命令には従うしかないのでしょうか。まあ、今日、明日と言うことはないと思いますが」

自問自答をしながら、園長は「ふー」と息を吐いた。五十年配、動物飼育に一生を捧げて来た真面目さがみんなには感じ取れた。

報道写真家の理紗のお父さんも、写真道具一式を背負い、みんなに同行していた。

虎の檻の前では「うおーっ」と唸られて、思わず、みんなの腰は引けた。ベンガル虎でオスメスの番（つが）いで二頭いた。

次々と、猛獣舎を巡ることになったが、その度に、理紗の父親はドイツ製ライカの写真機を構え、代わる代わるに、同行した者たちを檻の前に立

たせるとシャッターを切った。

シャッターの音がする度に、被写体になったみんなは切ない思いをした。もう間もなく、猛獣たちは命を奪われる運命下に置かれていたのだった。

この場で、はしゃぐ者はいなくなり、みんな、神妙な顔になり、身を固くしたが、理紗のお父さんがみんなを勇気付けた。

「ええか。みんなは猛獣クンとは仲良しなんや。仲良しやったら、そないな怖い顔はせえへんで。動物かて、親愛の情を送ってくれてるんや。そや、動物の名前を教えてもらうから、一人一人、その名前を呼んでやって、うちら、あんたのお友達やでてえ、そうやな。心の中で声を掛けて上げてや」それで、真っ白の毛をしたホッキョグマは、「しろろくん」。ライオンは敵性用語になるので、この場合は獅子で、「野獣丸くん」。虎は、「虎太くん」と、教えられた通りにみんなは呼んだ。

笑顔でみんなが檻舎の前に立ち、理紗の父親に促されて被写体になった。チンパンジーは、実際に、防毒面を着用させられた上、写真に撮られた。

この時だけは、チンパンジーの仕草が面白かったので、みんな、笑いこけた。

この日は、学童たちは記念写真だけで、諏訪山動物園をあとにしたのだが、直ぐには、殺処分処置は取られなかった。

何度も、園長は軍の命令に背いた。「動物を育てるために仕事をしているのであって、殺すための仕事を私たちはしていないではありません」と、

嘆願し、一日一日と、殺処分の日を伸ばしに伸ばしていたのだった。

命令を下した憲兵が「お前たちがやれないなら、我々が直接に手を下す」と強硬な態度にも出た。この後、全国の動物園でも同じ措置が取られて行くことになるのだが、これらの、一つ一つの事実については、戦後にしか明らかにはなっていないので、勇輝ら少年、少女たちはこれらの仔細については知らなかった。せめてもの救いだった。

防毒面を着けたチンパンジーの写真だけは空襲に備えての啓蒙の一環として、神撰新聞には後日掲載された。

加賀美写真部員の撮影した幾葉もの動物との記念撮影写真も、神撰新聞の資料室には残されることとなった。

これから先、なおも、戦局は苛烈さを増して来るのだったが、何よりも先に、これらの猛獣類は犠牲の対象とされる運命にあったのであった。

6

ハイカラの街として戦前は知らただけあって、明るい話も身近にはいくつもあった。戦前にと遡（さかのぼ）れば、鈴蘭台の街には、ハイカラ風のいろんな人種も住んでいたと言うことで、勇輝たち少年や仲良し花の三人組の少女たちも、この戦時には似つかわしくない人たちとも、出会うことが出来た。

その伝で言えば、宏志の所のマリ婆さんも、そのうちの変り種の一人だとは言えた。

夕陽ヶ丘の、あの柿の実が落ちて二週間ほどが経過していた。

権太が言い出した柿泥棒の話、権太が中心になり、あちこちの家の庭や、持ち主のいる山の端の柿の木などを物色している内に、凶らずも、勇輝の耳に、柿の実が手に入る話が舞い込んだ。

夕陽ヶ丘を目標に鈴蘭台の駅から真っ直ぐ進み、二つ目の急な坂道を上がると、通称、三川屋坂の急坂に至る。

その途中の高い石垣の上に大きな洋館があり、その庭では、今、実る時期がやや遅い種の大きな富有柿が一杯に実っていた。

イヌマキの生垣で回りは取り囲まれているので、生垣が目隠し役を果たし、庭内はよくは見えないのだが、姉の登美子とその家の女主人に偶々に声を掛けられ、柿の実狩りの相談をされたのが、そのきっかけとなった。天から降って湧いたような話だった。

この三川屋坂の近くに寺山花園はあり、ハナちゃんを訪ねて花園から帰る途中、登美子はこの家の女主人に声を掛けられて、この柿挽ぎ話が持ち上がったのであった。

食糧難の時代、少年たちは目を輝かせた。

男女三歳にして席を同じゅうせず、そんな、風潮もある時代だったが、宏志を加えて、男組は二人、女組は登美子と、理紗と花菜子の女三人組が、

この家を訪れることとなった。

少年二人は柿の実を収穫する役目、そして、招待され少女たちは、この家に住む青砥（あおと）百合香に迎えられることとなった。

そもそも、こんな大事になったのは、この家の女主人が余りに美しく、坂道で出会った時、ついつい、登美子が「宝塚の女性（ひと）ですか」と、問い質したことから始まった。

「わたし大きゆうなったら宝塚の音楽学校に入るんや」と姉の登美子は普段からそんなことを言っていたので、ついつい、美しい女性を見ると、自分の願望の分も含めて、そんな質問をしてしまったのだった。

神戸近辺に生まれ育った女の子なら、誰もが“宝ジエンヌ”に憧れるもので、ご多聞に洩れず姉の登美子もまたその一人なのであった。ジエンヌは、フランス語だと、“パリの小娘”のこと。フランスのシャンゼリーゼ通りを闊歩する粋な小娘たちを称して、この呼び名が生まれた。

ジエンヌに宝塚の宝を冠しての宝ジエンヌ。その宝ジエンヌふうの女性は人目を奪うほど美しく、背筋が真っ直ぐ通っていてほっそりした体型。言うなれば、一目見た時から、二十そこそこのこの若さの女性は後光が射して見え、登美子はうっとりで見惚れてしまったのだった。

「柿取り物語。なんや。竹取物語と似てへんか。竹の中から美しいお姫様が出てきました」

「勇輝、ええこと言うやんか。ほんま、この世の事とは思えんくらいきれ

いな人なんや」

かくて、登美子が勇輝に説明した通りのそのうつとり美人に、少年少女たちは出会う段取りが出来上がったのであった。お屋敷内に招じ入れられて、改めて、みんなはこの家に住む麗人に目を見張った。

「男の子はさっさと、柿取り作業、うちら女の子は女同士、楽しいおしゃべり。な、勇輝、分ってるやろ」

「ああ、アレはあれ、ソレはそれで、コレはこれやろ」

「よう、分ってるやん」

ぴったり、二人の息は合ったようだった。

姉から言われたら勇輝は逆らうことなどは出来はしない。

早速、男連中は大きな柿の木に取り付くことになった。権太が真っ先に木に上がり、これに勇輝が続く。宏志は木の下で籠持ち役、富有柿は食べ頃で枝がしなるほどにたわわに実っていた。

柿の実が実っている木の枝あたりからは洋館の二階の広い板敷きの間が見えた。丁度、目線の先にあり、木に登っている二人は、ちらちらと、応接間に通された女の子たちを覗き見ていた。

まだ、女主人の青砥百合花の姿はない。加賀美理紗が観音式扉の窓を開けて顔を出すと、得意げに男どもにも説明をした。

「ねえ、ここはバレエのレッスン場。きみたちにい、バレエとか、レッスンなんて言うてもわからへんやろけんどね。それからねえ。横文字の敵性

言葉なんて、ここでは関係あらへん。そないなこと気にしてたら、なんもしゃべれんでえ」

「ここに來れたお礼や、しっかり、柿は挽ぎや。そいから、調子に乗って落ちんといてや」

これは、姉の登美子で年長者らしい物言いだった。秋の風が心地よげに登美子の頬を撫でて過ぎた。その横には花菜子も顔を出した。

青砥百合花がレッスン場に現れた。

「わたしたち、お茶の時間をしますけど、男の子はあとでね。柿挽ぎのお礼もするわよ」

関西訛りの抑揚の低いアクセントだったが、青砥百合花はきれいなしゃべり方をした。二階部屋とは、それほど離れていず、それに、女たちの声は高いので、柿の木の上の少年たちにも話の内容は大方は聞き取れた。

「わー、もー、青砥百合花は宝塚少女歌劇の花組のスターだったんや。もっ、うちら、こんなん、も、も、もおっ、大感激やわ」

身分の紹介をされたらしく、登美子が歓喜の声を上げた。

理紗も花菜子も大感激で、女の子三人は手に手を取り合って、二階部屋で小躍りしているふうだった。

「うちらも、仲良し花の三人組で名を付けてるん。寺山花菜子ちゃんは家がお花作りしてるから、ほんまの花娘、言ったら、そや、うちの花組のスターやねん」

おしゃべりの登美子らしい解説だった。

「みんな、宝塚ファンでこんなに嬉しいことないわ。うち、青砥百合花は女役で、そないには有名やないけど、花組をこれから背負って立つ研究科の一年生、これからの有望劇団員ゆうとこやね。いま、ちよつと、肋骨を痛めて青砥百合花は無念の療養中なん。劇団員の人たちは、いま、満州の外地に出掛けて兵隊さんを励ますために慰問公演しているのに、わたしは残留組。あと、三、四ヶ月もしたら現役復帰できるとお医者さんは言うてくれてるんやけどね。そやから、このレッスン場で、毎日、体だけは鍛えてるんよ」

やはり、戦時中、宝塚歌劇団の一員である以上、自分が置かれている立場を青砥百合花も意識せずにはいられないのであった。

昭和十七年からは、満州各州、新京、大連、奉天、樺太などでも戦地慰問の名目で公演は実施されており、これらの演目では、敵性音楽のジャズは全面禁止となっていた。

敵性用語排斥のために、公演題目もすべて日本語になり、例えばグラシィン「レッドアンドブルー」も、『光と影』に改名させられていた。また、軍国の世、スターの名も、不敬になると言うので、神代錦は嘉美代錦に、神風五十鈴は朝風いすゞに、それに、宮家の久邇、秩父などを芸名で名乗ることも禁じられた。そんな世の中だったが、少女たちはどこまでも明るかった。板敷き床のレッスン場の隅に小さな木製テーブルがあり、紅

茶茶碗が四つ、女たちはお茶の時間を楽しんでた。

笑い声が混じり、青砥百合花の話に聞き入りながら、女たちは無邪気に歓声も上げた。

「いまは、戦争やから宝塚にも行けんようになってしまった。女の子には哀しいことやわ。うち、お父さんに連れられて、本公演は二回も見てるう」

加賀美理紗がみんなを引き立てようとしてか、自慢話をした。

三人の中では、理紗がいちばんの宝塚ファン、写真家の父親に連れられて何回か劇場には通っていたのだった。

「モン・パリ、あの作品に惹かれて、わたしなんか、宝ジエンヌになろうと思うたんよ」

青砥百合花が理紗に答えた。地元芦屋の生まれだと言う青砥百合花は関西訛りでしゃべったが、よく透き通る声なので聞いていて心地よかった。

十九歳、宝塚音楽学校予科の研究生で、来年には本科生になる資格が出来ると言う。歌と踊りで磨きを掛けられている最中だったが、いまは戦争の影響で劇団そのものも活動停滞の状況に置かれていた。

この屋敷で一人住まいをしているのは、この屋敷の坂の直ぐ前にある三川屋旅館の経営者が宝塚歌劇出身者の妻を娶っていて、その関係で宝塚とは縁が深く、療養を必要とする研究生たちに空家になっているこの別宅を提供していると言う事情があつてのことだった。

「もちろん、大先輩やからね。元は、ここの鈴蘭台の名前を貰って、鈴代

蘭香（すずしろらんか）って名前の男役のスターだったのよ」

「へえーっ、三川屋さんの奥さんは凄いい別嬪（べっぴん）さんやて、みんなが噂したけどほんまやったんや。鈴蘭台に、そないな大スターがいてはったんやな」

もう、加賀美理紗には副級長の資格はないのではないかと思われるほどに、すっかり、この時、理紗はヅカファンに成り切っていた。

柿の実を挽ぎ取った男連は、やっと、一階の居間先の縁に呼ばれた。大きな竹籠が一杯になるほどに柿の実は穫れた。

早速、青砥百八豆花が果物ナイフを手に持ち、柿の皮を剥きに掛かったが、権太と勇輝は待ち切れずに、挽いだけかりの柿にそのままかぶり付いた。一個を半分ほども食って、一息吐いてから権太が言った。

「ワーツ、もう辛抱たまらんかってん。柿を挽ぎながらむしやぶりついたる思うたんやけど、ドロボー柿やないもんな。そないに慌てることないと思うて、この時を待っててん」

更に、権太は柿の実にかぶり付いた。

柿に飢えていた勇輝とて同じようなものだった。制限なしの挑戦で、果汁を口元から垂らしながら、もう四つ目の柿にかぶり付いていた。宏志もこの時ばかりは都会のクラスのお面を外した。柿挽ぎに、柿喰い競争、無邪気そのものの少年になっていた。

女の子たちは、少しお上品に柿を口にした。丸ごとではなく皮が剥かれ

て、四片に切られて皿の上に盛られた。柿を楊枝の先でつまんで食べた。みんなの家への土産用として宝ジエンヌはそれぞれに柿の実を五つずつ分け与えてくれた。みんな本日は大収穫であった。

(こいで、おかんにも柿の実、食べさせられるで。おかん、喜ぶやろな) これも親孝行の一つ、何より勇輝はおかんのことを思いやっている少年だった。

「あのな。男の子はもう帰りに。うちら花の女の子仲良し三人組、花組の青砥百合花さんと、フアンの会をやってるねん。あの、大スター、鈴代蘭香さんも、ここに呼んでくれはるんやて。そいでな。“すみれの花咲く頃”の歌をみんなで歌うんや」

みんなうつとり顔で、特に加賀美理紗などは、嬉々としていて、少々羽目さえ外していた。仕切り役の姉の登美子にケリを付けられて、男どもは早々に、この屋敷から退散した。

「なんや。柿獲りはおもしろかったけど、女ばかりのお屋敷、わいら、用なしで追っばらわれてもうたな」

柿の包みを抱えながら権太が言った。

「そうやな。そつか。あのお屋敷はやな。“鈴蘭台花屋敷花番地”ちゅうことにしよ」

「ええ、それ、ええわ。花組ジエンヌと、花の三人組の花合わせや。ほんまもんの花組の星も花屋さんもいてるさかい、ほんまもんのほんまもんの

花屋敷やで。鈴蘭台花屋敷花番地、その番地の付け方。文句ないでえ」

珍しく、宏志が相槌を打った。どこか、宏志も自分の言葉に酔っているかのようだった。

「みんな、うまいうまい。柿もうまかったで。ほなら、勇輝、たのんまっさ。ここで、わいら三人組、別れて三角また来て四角にしよや」

例によって、“さよなら遊びの時間”がやって来た。新作なのかどうか、うーんと、少しだけ、勇輝が間を取り、頭を捻った。

「ほなら、同じ替え歌でも、今日はいつもとちやうやつでいくで」

♪お前の母さん 出べそ 車にひかれて。ぺっちゃんこ。ぺっちゃんこは
せんべい せんべいはしよっぱい しよっぱいは涙 涙はすみれの 花咲
く頃お♪

「ええ、よう分からん？なんで、すみれの花が涙なんや？」

すかさず、権太が勇輝に訊き返した。

「あのな。すみれの花の咲く頃てな。あの歌を聞くとな。女はみんな泣くねん。うちのお婆ちゃんかて泣くんやから大したもんやで」

こう、解説を入れたのは宏志だった。

「なんや、なんや、そないなこと言われても、わいには分からんて」

改めて、宏志に権太が問うた。

そこで、したり顔をして勇輝が口を挟んだ。

「ほな。歌おうたるか。ちよつとだけやけんどな。姉ちゃんがな。時々、歌おうとつたんや。そやな。終わりのとこだけやったら、わいも知ってるで。ほな、その一節や」

「終わりのとこが、ごつつうええんや」

と、宏志が同調をした。勇輝が歌い出す。

「♪すみれえーの花あ咲くう頃おう♪…や」

「よっしや、この後は、わいに任せときい。なんや、照れてまうけんど、初めからやで」

そう、前置きしてから宏志が歌を続けた。

♪春すみれ 咲き 春を告げる

春なにゆえ人は 汝（なれ）を待つ 楽しく 悩ましき 春の夢

甘き恋 人の心 酔わす すみれの花咲く頃♪」

「うわー、そんなん、なんや甘ったれてるな」

男らしさを主張したつもりの権太であったが、その権太の声調も鼻に掛かった声だった。

「うちの婆あちゃん、二番目の歌詞もみんな歌えるんや。今度、うちに来

た時に聞きいな」

「よっしゃ。そないするわ」

みんなは顔を見合わせたが、少年三人、誰の顔も照れを含んでいるかのようだった。

春の風こそ吹いてはいなかったが、春風駘蕩（しゅんぷうたいとう）、どこからともなく、温かな春風が吹き寄せて来るような和やかさに、この時、少年たちは包み込まれていた。

第二章 ある夏の終わり

第二章 ある夏の終わり

1

昭和十八年の夏盛（ぎか）りの日のことだった。俄かに空の雲が黒くなり、雷鳴も聞こえて、夕立ちとなった。激しい雨が一気に降った。

この日、兄の勇が思いがけず、この夕立ちの最中に家に帰って来た。

鈴蘭台駅の改札口から二、三分で家には着けるのだが、余りの雨の激しさ、小走りに駅から兄は駆けて来たのだが、夕立ちの雨を全身に被ってびしょ濡れになっていた。

兄は息急ぎ切っていたが、額に白い包帯を巻いた痛々しい姿だったので、迎えた母の菊江は一瞬言葉を呑んだ。

台湾沖で軍用輸送船が敵の魚雷を受けて沈没遭難、兄は九死に一生を得てこの日生還したのだった。額の傷は、その時、台湾沖の海中に放り出された時に負った傷であった。戦争の被害は日増しに増大していて、とうとう勇輝もその実態を知ることになった。

すでに、日本の周辺の海には敵の潜水艦が多数配備されていて、この昭和十八年の時期だけでも、日本近辺では九州男女群島女島を初めにし、南洋諸島に至るまで、徴用された輸送船は敵潜水艦の標的となり何隻も沈没

させられていた。

久方ぶりに会った兄に声を掛けたいのだが、今度ばかりは無理だった。

どこか、兄の表情は硬く、人を寄せ付けないふうがあった。

いつもは、おしゃべりなおかんの菊江も、今日ばかりは言葉数が少なかった。気配を察して、姉の登美子もよそよそしく、この日は勇輝とも余計な軽口は利かなかった。

この日の夜、勇輝は、兄の勇の口から恐ろしい物語を聞かされることとなった。一階の間には、台所につながる部屋が二部屋あり、部屋と部屋はふすまで仕切られていた。台所側の居間で卓袱台（ちゃぶだい）を前におかんと、額に白い包帯を巻いた兄が向かい合って座っていて、兄の遭難話をおかんはさつきから聞かされていた。

姉と勇輝はふすま一つ隔てた六畳間に布団を二つ並べて敷き寝ていた。

夏のことで六畳間の天井には蚊帳（かや）が吊ってあった。

蚊帳の内と外には何匹ものホタルが止まっていた。

息を吸い、吐くように、明滅しながらホタルは青白い光を放っていた。

ふすまの隙間から、隣室の電灯の明かりが僅かに洩れていたが、二人が寝ている部屋の明かりは消されており、ホタルの発する青白い光は、この暗闇の中、どこか、幻想的でもあった。

時には、近くの山や林から、迷い迷ったのか、カブト虫やクワガタ、夏ゼミ、時には、どこから入り込んだかカマキリなども蚊帳にくっついてい

たりで、夏の季節は蚊帳を吊るだけで、虫取りが容易になるので蚊帳を吊る夏は勇輝は好きな方だった。

ところが、この日ばかりは様子が違った。

兄の声には元気がなく、話に応じているおかんの声も低かった。

ぼそぼそと、語尾の聞き取れない会話が続いていた。

寝ようと思っているのだが、勇輝の耳には嫌でも、母と兄の声は届いた。

「あのな。船では、わしは責任の重い、船倉の荷物の鍵番で、船が沈没しそうになったら、船倉に収められている物資は、みんな鍵を開けて、海上に浮き出るようにせならんのだ。それかて、海の上に浮き出たら貴重な物資や。回収出来たらの話やけん。それに、事と場合によっては、浮き出た荷物は浮き輪代わりにもなって、人命を救けることにもなるし、これ、大事な仕事や」

「そんなん、えらい仕事やんか。そないなことしてたら、あんた、逃げ遅れるんとちゃうか。船倉って、船の底の底にあるんやろ」

「そや。みんな、甲板目指して逃げよるやろ。そら、必死やもんな。みんなが逃げてる最中に、こっちは船底に入って、鍵開け作業せなあかんわけやから、えらいこつちや。明かりもなんもない真っ暗闇やから懐中電灯をかざしながら、手探りでな、こっちは船底を這っているようなもんや」

「なんで、あんたがそないな、危ないことせなあかんの。止めときい。お国の物資かなんか知らんけん、そんな荷物、浮いて出るかどうかもわか

らんやないの」

「そうやな。荷物が浮いて出るかどうかはなんとも言えんな。そいで、わしが甲板に出た時はもう手遅れやった。船はもう斜めに傾き始めていて、海の水は手が届くところまで押し寄せとった。こら、もうあかんと思うて、わし、度胸を据えてな。甲板の端に腰掛けて、一服、たばこを吸うてから死んだろうと思うた。そいで、わし、たばこに火をつけたんや。真夜中のことやから、海は見渡す限りの真っ暗闇、そんなん、怖いことなかあらへんかった。度胸が据わるってああ言うことを言うんやな。一服吸うたら、赤い火がたばこの先っぽに灯って点滅した。ああ、これが生きていることなんやと思った」

「…そんなん、むちやくちやや」

おかんは口ごもってから、そのあと、黙り込んだ。

しばし、兄も言葉を吞んだ。

「そやけんど、それがわしの命を救ってくれたんや。暗い海に放り出されてた誰かが、わしの吸ったたばこの赤い火を見て怒鳴ったんや。こらっ、早（はよ）う飛び込めってな。ほいで、わしは、はっとわれに返って、慌てて、海に飛び込んだんや。飛び込んだ言うても、舷側にはもう波がひたひたと寄せていて、海の水の中に足を突っ込んだようなものやったんやけんどな」

「ふうむ。よう、そないなこと…」

おかんはまた口ごもった。

この時、勇輝は耳をそばだて、一連の兄の勇の話を聞いていた。瞼を固く閉じ、身も固くしていた。姉の登美子もそうで、息を呑んでいる様が勇輝にも手に取るように分った。

兄の遭難話はまだまだ続いた。

「なにがどうなったんかは、わしにもようは分らんのやけん、海に飛び込んだ途端にな。船が急に傾いて沈没したんや。それで、渦巻き状になつたらしゅうて、わし、その渦に巻き込まれたらしいんや。あとのことはなんも覚えてないんや。船乗りはな。“船柱は天の柱”と言うててな。これ天の救けなんや。船が沈没の時に巻き起こす渦、船柱に巻き込まれるとな、一旦は、海の底まで体を持って行かれるけん、その間はな。気を失おうててなんもでけん。わしみたいに、息も止まったまんまで余計な動きをせえへんから、その渦巻きに乗ってな。ぽこつと体が海の上に出ることがあるんや。気がついたら、わし、海の上や。海神さまにな、これは救けてもろうたと言ふことや。それで、わし、そんな時にな。デッキかなんかに頭をぶつけたらしゅうて、おでこに傷を負うたんや」

「ふーっ。そないなことやったんか」

おかんは一息吐いた。やっと、卓袱台の上に、おかんの手は伸びたようだった。おかんが番茶を一口飲むぐくりと言ふ嚙下の音を、この時、勇輝は聞き取った。勇輝も姉の登美子もほっとした思いになった。

「あのな。わし、真っ暗闇の海で、妙なもん、見たで。ネズミの奴がな。うじゃうじゃ、仰山、海には浮いとった。こいつら、わしらの船におったネズミどもでな。船が潜水艦の魚雷の直撃を受ける半日前ぐらいに大挙して船から逃げ出しよった。危険を察知したら逃げ出すこれは動物の本能、勘ってやつや。わしら船乗りは知つとる不吉な報せなんや、これは。それで、この船は危ないなと言うて船に乗っているみんなは浮き足立った」

「ほなら、危ないなと思うた時、みんなで避難したらええやないの」

「その通りやけど、そもならんで。今は戦争中や。それにな。物資を運ぶと言うても、外地に送る兵隊さんも船には便乗してて、見張りの上官もいてるさかいに、そんなん、適わんこつちや。可哀想なんは、新兵さんや。

船が沈んだら、早（は）よ逃げようと危険を察して上官は甲板で寝てるのに、階級が下の新兵さんは、みんな船のいちばん底でしか眠らせてもらえへん。そいでも、夜中、様子を見に甲板が上がって来る新兵さんもいたけど、みんな、上官が怒鳴り散らして追い返しよった。ひどいこつちやで」

「将校さんなら戦争に行っても、要領よう振る舞えば、生きて帰れる言うもんな。この鈴蘭台でもそうやで。応召されるんかて、街の有力者の息子は免除されてて、お金次第でそんなんやってんやないのん。貧乏人はいつも貧乏くじを引かされるってことや。技師でもないのに技師や言うて軍需工場行きの便宜を図ってもろうて、召集令状の赤紙がくるのん、逃れているもんもおる。不公平な話や」

勇輝などは知らない話をおかんが口にした。

たぶん、隣保組織の町内会に関係する者や警防団などの国の組織に組んでいる者たちのことを言ってるのだと、勇輝は考えた。

軍需工場云々の話は、勇輝には思いつかないことだったが息子を戦地に行かせたくない親たちが、軍需工場など軍の施設などに雇ってもらい兵役を免除してもらおう手段のことで、現に、このような不公正な策は横行していた。

また、地方の地名人と言われた地方の公職に就いている市町村の長や、それに関係した者、金持ちの連中は、実際に不正を働いていた。在郷軍人会と言う一大組織があつて、徴兵検査を受け合格した者の名簿を所有していて、彼らの一存で、その応召される者の順番が決められる傾向があつた。

いわゆる袖の下、賄賂金を貰い、その名簿から該当者の名前を消去したり、破り捨てた者もいたことが、戦後になって明らかになっているほどで、おかんが口にしたことには、それなりの事実があつたと言つことだった。

「そいで、その兵隊さんたちはどないなつたん？みんな、親や、奥さんや、子供がいてる身やもんな」

「海に飛ぶ込む前の話やけんどな。船底に取り残されてる兵隊さんを救出しようと思つて、わしは必死になつてたあ。そやけんど、穴の開けられた船体からは、いくつも水柱が立つてて、もう、船体は傾いとつた。わしが船底から甲板に上がった時、丁度、艙口（ハッチ）の鉄蓋をどんとたた

いている者（もん）がおってな。上から蓋されて、閉じ込められ、逃げ出せんようになった連中や。わし、なんとか、救出してやろうと思つて、その重い蓋をやつとこき開けてやつたんや」

「新兵さんなんや、みんな…」

「そうやな。ほとんどはそうやろ。それに、いつも船底にへばりついてる機関員もおつたと思うけんどな。そいで、わし、暗い穴の中に懐中電灯を照らしてやった。そしたらな。甲板に上がる鉄梯子が衝撃で外れてしもうてて、甲板に上がる手立てがのうなつてしもうてんのが分つた。絶体絶命や」

「みんな、あかんかつたんか？」

「それがな。人間て、いざとなつたら、凄い力が出るもんやで。鉄梯子はあらへんのに、すべすべのな。鉄の壁を這い昇つて来よつた」

「どないしてや」

「わからん。爪を立ててと言つても、そんなん、無理や。あとからあとから、ぞろぞろ、甲板に出て来た。もしかしたら、船体が傾いとつたんで、船の壁が斜めになつてたんかも知れんけんど、みんなの必死の思いが神様に届いたんとちやうか」

「よかつたな。人助けが出来（け）て。かあちゃんかて、勇が船の航海に出る時はいつも心配で心配でならんや。どこの親御さんも家族の人も、みんな、心配でたまらんや」

母と子は水入らず、ひとまずの無事を祝って一夜を過ごしているところであった。それでも、何やら、切なくなるのか、時折り、母と兄は口を噤（つぶ）んだ。

実は、このあとの兄が口にした物語を、勇輝は終生、忘れることが出来なくなるのだったが、この話も、兄の勇は、淡々と語り継いだ。

夜は更けて、刻一刻、時が過ぎて行った。

2

「あのな。真っ暗の海は怖い。底無しやし、台湾の沖にはサメも、うようよおるからな。一人やったら、とてもやないけど精神がもたんやろうけど、近くには僚友たちも泳いでおって、みんな、声を掛けおっていた。どれぐらい海を漂ってたんか、わからんけど、なんや、暗い海を泳いでる変なもんを、誰かが見付けよった。あの、わしらの船から逃げ出しおったネズミどもの群れや。ざわざわざわとな。何万匹とまでは言えんけど、どこまでも、見えない海の涯まで、白い、あぶくのような波が立つとって、わしらに負けんように、一生懸命に泳いどるのや」

兄の勇の話をふすま越しに聞いている勇輝の耳にもこの兄が語るネズミの話は届いていた。どこまでも暗い大海原の様子が、勇輝の脳裏にも、話のままに写し取られていた。

吊られた蚊帳に、何匹かのホタルが止まっていた。

蚊帳の中に放たれたホタルもいて、ふあーふあーと、蚊帳の中をホタルは飛んでもいたが、勇輝の臉の裏には映じてはいなかった。

この時、臉の裡で、勇輝は青白い波間に浮かぶネズミの群れを捉えていた。勇輝は息を潜めた。身を固くした。隣で寝ている姉の登美子の息遣いも、いつか、密やかなものになっていた。

「ネズミも生き物やから、自分らが生きられる方角に向けて泳いでいるわけや。そやから、溺れているもんは誰でもそうするんやけんど、ネズミどもの向かう先の海を目指すんや。わしもそないにした」

「そいで、みんな、救かったんか？」

「それがなんとも言えん。そのうちな。月明かりもない真っ暗闇の海やのに、水平線のようなもんが見えて来た。そやけんど、それが青白い海の涯でな。ぼあーと、青白く光ったるう。なんや、幻の国がその海の涯にはあるように思えた。やっと、気が付いたんやけんど、青白い一面の海はこの海の領域に漂ってる、ウミホタルの群れやと、わし、気付いた」

「なんや。ウミホタルなん？」

「そや、発光性の虫や。夜行性やから、夜の海では、わしらもこれまでに何度も見掛けたことありや。そいで、直ぐに、ウミホタルと知れたんやけんど、真っ暗闇の海やから、そいでも、道標（みちしるべ）みたいに思えて、海に放り出されてるもんにはありがたかった。ネズミどもが向かって

いるのも、その、青白い水平線の向こうやった。そいで、自力で泳いでいるもんも、物に掴まって泳いでいるもんも、みんな、その青白い光と、ネズミの勘とかを頼りにしてな。海の涯にと最後の力を絞って泳いだのや」

そこで、一旦、兄の勇は黙った。母もお茶を飲むでもなかったの、二人の間には妙な沈黙の間が存在していた。

「そやけど、勇はこうして無事帰って来たんやから、みんな、良かったと言うことやな」

「それがな。泳げば泳ぐほど、わしら、ネズミが邪魔になるようになった。あんまり、いっぱい泳いでいるやろ。抜き手を切って、水を掻いている内に、ネズミの海ん中を、わしら、泳いでいることに気付かされたんや。それだけやないで。わしの手足にもネズミがしがみついたり泳ぐのも大変になってしまった。ほいで、気が付いた。ネズミどもがな。その、なんや、海の上で一休みしているみたいにな。一塊りになって、あっちこっちに浮いてるのんに気付かされたんや」

「なにい？それえ？」

「ネズミの島や。ネズミの島があちこちに出来とった」

「ネズミの島？よう分らん」

「あのな。死体の上に来た島や。もはや息絶えてもうて浮かんで漂ってるものの上に乗って、ネズミどもが一休止してる島やったんや。つまり、なんや。その、わしらの船に乗ってた同僚や、兵隊さんの死体をやな。」

島代わりにして、あいつら、生き残ってたんや。その、島にな、あとからあとから、食欲な、ネズミどもがよじ昇ってはな、振り落されて、あいつらも必死やった」

「…なに言うてんの。そないな酷いことがあって、ええわけはないで」

もう、おかんは絶句した。

「そやけど、わしはこうやって生きて帰って来たんや。えらい、これは運があることやで。船乗りの言い伝えでな。先輩たちが残している教えにな。“ねずみの島は幻の島”と言うのがあったんを、わし、こん時に思い出したんや。あのまんまやったら、ネズミどもの餌になってまうでえ。それで、ネズミどもの群れてる海からな。無我夢中でわしは泳いで逃げた。ウミホタルの青白い海はどこまでも続いていて、もう、ネズミどものおらんところまで、わしは辿り着いた。なんや、青白いウミホタルにも、わしは救けられたようなもんやな。唯一の、生きるための光明、そうや。船乗りやった亡くなった親父に、わし、この、ウミホタルの話、聞いたことがあるような気がするな。そうや。思い出した。“ウミホタルは命の灯火（ともしび）”と何かとか、わし、小さい時やったから、詳しくは、覚えてへえけど、そないなこと聞かされたな」

「ああ、船が遭難したらな。ウミホタルのいる方に向こうたら、陸地が近くにあつて救かる率が高いんやと言うことやろ。母ちゃんも、そないな話、聞かされたような気がするな。なあ、亡くなった父ちゃんが、勇を救けよ

うと、今度ばかりは導いてくれたんとちやうか」

「そやな。おんなし、船乗り同士やもんな。それで、氣い付いたら、夜が明けて来て、それで、わしは僚船に救出されたちゆうことや」

長い長い、母子の話が終わった時、すっかり夜は更けていた。

やっと、隣の居間の電灯も消された。

兄と母は、まだまだ語り明かす気なのか、二人して、二階部屋の寢室にと向かった。

一階に取り残された登美子と勇輝も寝る時間となったが、勇輝はなかなか寝付けなかった。何度か、登美子も寝返りを打った。青白い夜光虫がどこまでも漂う夜の海の光景が思い浮かび、勇輝は眠れずにいた。

どこか、幻想的だったが、恐ろしい話ではあった。夜の海を泳ぐこと自体、勇輝には果たせるわけもなかった。恐怖に足が竦み、もうそれだけで、気が動転してしまうに違いなかった。ましてや、気味の悪いねずみどもの群れ、とてもものごと、そんなねずみが群れる海など泳げるわけもなかった。

いちばん、怖ろしかったのは、兄は詳しくは語らなかったが、ねずみの島にされた人間がねずみの餌にされてしまうと言う話だった。

つまりは、ねずみたちは自分たちが生き残るために、海の上を漂流しながら人間の死体を蚕食（さんしょく）し、そして、本当の陸地の島に辿り着くまで、遭難者たちの肉体を貪り喰らうと言うこれは話なのであった。

(…と、言うことは、そうなんや。喰い尽くされたもの達は骨だけになり

…そして波の上を漂った末に、海の底にと沈んで行くのや…)

そこまで、考えた時、思わずに勇輝は「ううっ、おっ」と声を上げた。

「なんや、勇輝、悪い夢でも見とるんか？」

姉の登美子が問い質した。素知らぬ顔を決め込んだ丸坊主頭の勇輝の頭を、この時、登美子がやさしく撫でさすつてくれていた。

人の気配を察したのか蚊帳の中のホタルが数匹、また青白い光を放ちながら、この時、ふわふわと浮くように飛んだ。

3

一週間の特別休暇を貰って、久し振りに兄の勇は家で過ごしていた。

一日は、亀福散髪店で散髪してもらい、すっきりとした顔付きになり少しは元気を取り戻した。

学校に行く妹と弟を笑顔で送り出してもくれた。勇輝も笑顔を返した。

おかんも、いつもより甲斐甲斐しく働き、また、物々交換で手に入れて来たのか、翌日の夜は栗飯のご馳走が用意された。

この辺では、丹波栗なども採れるのだが、飯の具になった栗は、小さな芝栗で、これは一つ一つ、固い皮を剥き渋皮を除くのは手間暇の掛かることで、この栗飯、七分三分で麦も混じった飯だったが、おかんの愛情がいっぱいに込められていた。

その翌日の日曜日、珍しく兄の勇が勇輝を山行きに誘った。

こんなことは初めてだった。

姉の登美子は戦地の兵隊さんに送る慰問袋の詰め物などをする作業で学校に行かねばらず、この山行きには参加出来なかった。

「なあ、兄ちゃん、忙しそうにしてて、勇輝とは男同士の話をしたことないな。どや、わし、前にもな。再度山(ふたたびさん)の頂上まで一人で登ったことがあるんやけど、麓の再度公園の修法ヶ原(しおがはら)あたりまでやったら、まあまあ、平坦道やから、勇輝と二人で行ってみいへんか」「うん、行く、行くで。お兄ちゃんに付き合ってもええ」

「はは、お付き合いしてくれるんや。ほな、よろしゅうたのんまっさ」二人の山行きをおかんも歓び、二人には昨夜の栗飯の残りで握り飯を作って持たせてくれた。竹皮に包んだ握り飯を渡す時、

「なんや、握ったらぼろぼろや。お握りやのうて、“もつとちゃんとお握りいなあ”になつてしもうたわ」

と、おかんは下手な冗談を言った。

暗い毎日でも明るいおかん、そのお陰で、勇輝一家は力を合わせて毎日を過ごすことが出来ていたのだった。

鈴蘭台から、再度山方面に行くのには、結構な時間を要した。駅前の街並みを抜けて、水呑の地名のあるところに出、山コースの起点になる有馬街道沿いの道に出るのに三十分ほどは掛かった。更に、南下して、その途

次、再度山への入山口辺りから山へと向かって約一時間ほどは要するので、子供の脚ではかなりの強行軍ではあった。上級生になると、再度山の麓の地、再度公園、修法ヶ原の池までは、遠足で行くこともあったので、無理をすれば、勇輝も四年生、行けないこともなかった。

道々、兄の勇は明るく振舞ってくれた。

「あのな。船に乗ってるとな。イルカがいっぱい寄って来て、あれはな。なかなか見ものやで。波の上をびよんびよん跳ぶから勇壮そのものや。船の後を付けるようなところがあつてな。なんでやと思っ？」

「そんなん、わからん」

兄は小柄だったが、それでも、勇輝には兄の勇はとても大きく見えた。その兄の横にびったりと寄り添いながら、勇輝は兄の顔を下から仰ぎ見返事をした。

「船には人間がいっぱい乗ってるやろ。毎日、食べるもん食べてるのやから、出すもんは出す。それをよう知ってるのや」

「なんや？それって？」

「はは、食べ物残飯物をな。海に捨てるやろ。それを狙って待つとるわけや。そいからな。あいつら、糞も味噌も一緒や。人間様の排出物も、喜んで喰いよるで」

さもおかしそうに勇輝は笑った。

やっと、再度山に登る脇道から再度公園、修法ヶ原池付近に辿り着いた

時には、午後一時過ぎになっていた。およそ、家を出発してから二時間ほどが経過していた。再度公園、修法ヶ原に至るまでにはいくつかの入り組んだ川や、それに、あちこちに滝などもあり、小鳥たちも囀っていて、山中に分け入ったと言う実感を持つことが出来た。

大方は木陰の山道を進んだが、それでも、夏も終わりの季節、まだまだ暑くて、二人とも結構な汗を掻いた。兄の言葉によれば「久し振りにええ汗を掻いたでえ」と言うことになる。勇輝も何度も汗を拭った。

修法ヶ原池の畔（ほと）りの一郭に、二人は座った。

砂地の場所を確保した。満々と水を湛えた池の面（おもて）を、山風しの風が静かに渡り、漣（さざなみ）が立ち、走った。

視線を移すと、楓や松の木などが池畔に沿って広がっており、その遙かな南東の方角の向こうに、修法ヶ原池に添うようにして再度山が控えている。小さな山で標高四六八メートル、頂上と言うほどの頂上はなく、そのなだらかな山の形から再度山は別名三角山、それに形が美しいので、地元では神戸富士とも言われていた。三角山は逆さ富士のようなかたちで、すっぽりと、山頂全体が修法ヶ原の池の中に沈んでいるようにも見えた。

「再度山や。また、来れたな。いつやったかな。こっちの鈴蘭台に来た四年前にな。山間の街に住むんやから山とも仲ようならうと思うて、一人でひよっこり来たことがあるんや。そや、そや、めしやめしい、めしの時間やったな。ほな、弁当方（かた）開始といこか」

二人は竹皮包みを開き、おかんの愛情の籠もった握り飯を取り出し、口に入れた。口に頬張ると、おかんが言った通り、栗入り、麦入りの握り飯はぼろぼろと手の内から崩れた。それでも、勇輝は兄と肩を並べて食べる握り飯がうまかった。夢中で頬張った。

水筒の水を飲み、そのあと勇輝にも一口薦めてから、兄は勇輝に感慨深げに語り掛けて来た。その視線の先には秀麗な再度山の姿かたちを兄は捉えていた。夏の空は高く晴れていて、どこまでも山々は青く光輝いて見えていた。今は、嵐しの風が心地良かった。

「なんや、海の男が山の男になってもうたな。そやけど、山は気持ちがあえなあ。大地にしっかり足を付けてるもんな。毎日、船で海の上にいるとな。陸地なんか見えて来ると、みんな、うれしゅうなるねん。ほっとするんや。土の上に足を置いている言うんは、これはな、勇輝、幸せなことなんやで。ここの山からはいまは海は見えんけど、わしにはこの方がええな。山はみんなを守ってくれてるう。それに鈴蘭台は山の中やろ。もつと安全や。他の港なんか行ったら、もう、敵の爆撃機に爆弾落とされて、壊されて燃えてるところもありや。この辺はええ。山がみんなを救ってくれてるのや。どこをも見ても山、山、山、これは、山に感謝やな」

しみじみとした口調で兄の勇は勇輝に語り掛けた。

改めて、勇輝は兄の顔を見た。

「わいも山は好きや。おおけえもんな」

「そや、握り飯、わしの分、あと一個ありや。育ち盛りの勇輝にやるでえ。しつかり食うもんは食うとかんとな。ほれ、やるわ」

竹包みごと勇輝に渡しながら、兄はにこにここと笑っていた。

水筒の水だけを飲み干した。

「遠慮は損気い。わい、もろうてでも食うで」

「元気があつてええ。ええこつちや」

どこか、兄は嬉しそうにも見えた。

その間、勇輝は手指に付いた飯粒をしゃぶり、そして、下に落ちた栗のかけらを拾い、口に入れた。幸せの時間には違いなかった。

一段落ついた時、兄が改めて言った。

「なあ、この六甲の山々は、みんなを守ってくれるやろうけんど、かあちやんやねえちやんを守って上げられるんは、勇輝、お前やで。男の子なんやからしつかりとやってもらわんと。それにな。お兄ちゃんと同じ勇の字を一字もろうてるんやから、兄ちゃんと勇輝は一心同体や。そやろ。これから応召されたら戦地にかてわしは行かならん。ええか、親孝行に姉ちやん孝行や。わしの分もな。勇輝にはよう頼んどくでえ」

「うん、わいは男や。そないなこと分かつたるう。わいらのために兄ちやんは船に乗ってくれてるんやもんな。あとは任しとけて」

「そつか。よろし、元気があつてええな。そや、わし、好きなハーモニカ、もう、長いこと、吹いてなかったな。船で吹くんは敵の潜水艦に音を聞き

取られる言うて禁じられてるのや。そいで家に置いたまんまでな。ほこりをかぶってたんや。ここは山ん中、ここやったら遠慮のう吹けるわ。一杯、吹きたい曲があるから、兄ちゃん、ちよつとだけ時間をもらうで。わしのは大人の曲やからおもうはないやろから、勇輝、何でも好きなことしときい。わしは思いつ切り、自分の時間や」

そう断りを入れてから、兄はズボンのポケットからハーモニカを取り出した。兄の吹くハーモニカの曲は何度か勇輝は耳にしていた。

どれがどの曲と言うのまでは勇輝は知らなかったが、うつとりと聞き入ったこともあった。

前奏を奏でたあと本曲に入った。一気に何曲も演奏して見せた。

吸う音と吐く息、そして、舌先だけで吹き鳴らしたり、口全体を被せ塞ぎながら吹く高度な演奏法なども、兄は駆使して見せた。

澄んだ山の空気に沁み渡るように、ハーモニカの曲が何曲か流れた。

三十分ほどの小休止、その間、勇輝はハーモニカの曲を耳にしながら、修法ヶ原池の畔りまで行き、小石を池の面に投げてちよんなげを楽しんだ。ぴよんぴよん、ぴよんと、小石は身軽く水面を走り、色んな軌跡を描きながら遠くまで、何段も跳んだ。

鬼ヤンマも水面を掠めてすいすいと飛んだ。

ちよんなげの小石を餌と間違えているのかも知れなかった。

兄と二人だけの時が勇輝にはとても楽しかった。

勇輝自身の心も飛び跳ねていた。ハーモニカの演奏を終えた時、兄の勇が勇輝を呼び寄せた。こっちへ来いと招いた。

「お待たせえ。山懐に抱かれてるとな。ハーモニカの音が反響してええ気分になれるわ。次は勇輝の番にしようか。そや、お前は尻取り歌がうまいんやて。それも新作が多いと聞いてるで。どや、わしにも聞かせてくれへんか。兄ちゃんのために得意の新作とか頼むわ」

ハーモニカをズボンのポケットに入れながら兄は言い、勇輝の顔を見てにっと悪戯っぽく笑った。無邪気な笑みが口元にあった。

「ほな。一発、咬ませたるか」

「威勢がええな」

「そやかて、兄ちゃんを元気付けなあかんからな。わいは兄ちゃん大好きや。今度はわいの番やもん。ハーモニカを聞かせてくれたお礼、まだしてえへんしな」

「そーかあ、ほな、頼むで。おもろいのを」

しばし、考えたあと、勇輝が替え歌を口にした。

思いつ切り、大きな声を出した。

♪さよなら三角やま再度山 また来て四角う 四角は切符で 切符は切ー
るう 切るはヤクソクゲンマン 約束ゲンマン 切ーるうは約束 約束ゲ
ンマン また来て四角う また来て四角うまた四角う♪

「そつか。また来て四角、約束切符でまた来て四角やな。その名もまた来る再度山、ゲンのええ名前やから、わし、またこの山には来るで。よっしや、指切りゲンマンしよつか。指切りゲンマンや」

兄の勇はそう言い、小指と小指をからませて勇輝と指切りゲンマンをした。兄は童心に返ったのか、とても嬉しそうだった。

「指切りゲンマン、嘘ついたら針千本飲うくますやで」

「ほい、分った。針千本やな」

冷たくなった空気と共に、あたりの山間（あ）いも、やがての夕暮れを思わせて、陽が翳り始めていた。再度山の日暮れ時が来た。

山の野辺にも、一日の終わりが訪れようかと言う時刻になっていた。

午後の五時頃、二人はまた肩を並べて山を下った。

帰りの道々の二人の会話も弾んだ。

いつになく、兄は饒舌で、気分がいいのか、その分、早足にもなった。

遅れないように勇輝は一生懸命に兄の背を見ながら後を追った。やがて、山裾野の台地に広がった鈴蘭台の街並みが二人を迎えてくれた。

そろそろ街の明かりが灯る頃であった。

食糧増産の掛け声の下、寺山花園の花畑と同じように、藤王家の隣の植木屋の土地も町内会の意向で一部が接收された。

この戦時下、盆栽や庭木などの観賞物は用なしとされ、駅にも近いことから空襲があつた場合、避難場所としても最適と看做（みな）され、防空壕を掘る話も持ち上がっていた。

植木屋の土地を再開発するために、先日、勤労働員を掛けられた時も、勇輝のおかんは女手のこと、男たちのように力仕事がこなせなく隣保長には役立たずと罵倒された。その話を、おかんから聞かされて、尚更に、勇輝は隣保長が嫌いになっていた。

「勇かて、徴用船に乗って命を掛けてるやんか。次の船に乗るよう言われている言うて、勇はまた航海に出て行ってしまつた。うちかて大変な思いをしてんのや。それなのに、あいつ、威張りくさつて、植木屋のおっちゃんもそうや。土地取り上げられて、長年掛けて大事に育てた盆栽やのに、ぼろかすに言われて、こんなんは、世の中の役に立たんようになった年寄り共の悪趣味を適えるためにあるようなもんや。ほんま、食糧難の時代、こなんん、煮ても焼いて喰えんでつて。なあ、植木屋のおっちゃんは、耳が少し不自由やから、一生懸命、黙々とな。植木を育てる仕事をして来た人や。その天命の仕事を奪うようなことしといて、あんたは戦地にも行けんのやから、これぐらいして当たり前やろて、ほんま、ひどい男やで」

「うちなんか、ちっちゃい頃、いろんな花も、植木屋のおっちゃんにはも

ろうたしな」

「登美子の花好きは、隣のおっちゃんに植え付けられたようなもんかも知れんな」

おかんが登美子に同意して見せた。

サツマイモの蔓（つる）の皮むき作業を揃って家族三人はやっていた。貴重な野菜の一つ、収穫期には少し早いのだがサツマイモの葉のついた蔓を農家からもらって来た。

どうせ、捨てるものだったが、それでも、勇輝のおかんは、割り当て制の衣料切符と交換で、イモの蔓をもらうことが出来た。着る物も、物資不足の折から配給制で、切符がなければ衣料の購入は適わない。その、貴重な配給切符は、その農家の手に渡ると言うわけだった。

一週間だけは家にいた兄の勇は軍事機密とされていたが、広島の宇品（うじな）の港へと向かった。一家の家計を支えるためには軍属として自分の仕事に就くしかなかった。父親代わり、兄の勇は責任感の強い青年だった。

兄が旅立ったあとは、おかんは心配が先に立つのか元気がなかった。

そんなある日、花屋のハナちゃんの花畑でも、一騒動が持ち上がった。植木屋と同じように、食糧増産のために、花畑を提供するよう求められていたのだが、こちらは直ぐには同意しなかった。その分揉めていた。

この話を登美子がおかんに持ち出した。

「どんな花でもそうやけど、植木とおんなしで、手間暇掛けて、育てん

と、きれいな花かて咲けへん。ハナちゃんのお父さんは、バラの花に掛け
ては、ちよつと知られた者（もん）なんやろ。そいでな。バラだけは、長
年掛けて、品種改良もしてるから、そのまんまにしといてくれと頼んだや
て」

「あの新品種のバラの花、そや、白君影とか言うんや。いつか、新聞に出
てたもんな」

「そんなん、なんもかも、植えてたもんはみんな堀り起こせって、めっちゃ
言いよるわ。バラの新種は、木小屋のガラス張りの温室んところにあるか
ら、いまんところは大丈夫みたいなんやけんど、それも、どないなるか分
からんて、ハナちゃんのお父さんは言うとった」

「植木屋さんとも、やられてるんやから、どないなるか、それは、分か
らん話やな」

「ハナちゃんもどないするんやろ？場合によっては一家で、お母さんの田
舎の丹波に引越ししようかて話にもなってんねんて」

「えっ、ハナちゃんがおらんようになってまうんかいな。なんや、それえ」
慌てたふうには勇輝が姉に答えたのは、勇輝が花菜子を憎からず思ってい
たからだつた。正直、うろたえたふうの態度だつた。

「勇輝の同級生、それに、こちらは仲良し三人組や、ほんまやったら、こ
ないに哀しいことはあらへんで」

姉の大きな目に、うつすらと涙が浮いた。おかつぱ頭が心なし揺れた。

「花を生かせるんやったら、その方がええに決まってるけど、花にも、その土地土地に合う、合わんがあるんやろ。なんや、これは、人間と、おんなじような話やな」

おかんがそれなりの意見を言った。

「うち、後片付けのな。手伝いもして上げてるから、前よりな。いっぱい、花の名前、いっぱい、憶えたんや。ハナちゃんのお父さんがな。日本の花の名前は風情があつてええなと言うて、色々と教えてくれはったんや」

「どんなんがあるん？」

「みんながよう知ってる花なら、三色スミレに雛ざくらや。生き物の名前も、けっこう、あるんよ。猫柳に、狐のかみそり、雀の鉄砲もおもしろいと思う草花の名もあるん。乙女桔梗にはな。おしろいばなにくちべにすいせんがお似合いやてえ。これはな。ハナちゃんのお母さんの婦美子おばさんが言わはったことの受け売りやけんどな。そや、そや、勿忘草（わすれなぐさ）のことも忘れんといてやて、その後にな。お父んも言わはったんや」

「冗談もうまい、お父さん、お母さんやね」

母と姉の会話に勇輝が割って入った。

「そんなこと言うても、やっぱり、男はな。花より団子やで。わいはそう思うけんどな」

「あほ、また、勇輝、その話かいな。勇輝ら男の子は、寝ても覚めても食い物の話ばかりやな。もう、うんざりやで」

「そやかて、腹が減るもんは減るで。わいら、男の子は食い盛りやもん」
「ほんま、あほや。腹が減るんは、そんなん、男も女もないわ。勇輝、あんた、分かってるん？かあちゃんはな。勇輝にちよつとでも余計に食べさせたいと思つて、自分の分、減らしてな。我慢してるんやで」

「ええ、ええ、登美子、そないなこと言つてもな。勇輝の言うのが本心や。米七割、麦三割、配給があつても、どこも足りん。子供にな。食べさせた言うんは、どこの親でもおんなじ、親心と言うもんや」

(それにしてもやで。ハナちゃんとこがえらいことになつてる言うことは、わいに取つても、これは一大事や)

独り、勇輝は呟いていた。

それで、この後の母と姉の話は余り聞いてはいなかった。

5

休み時間になると木造校舎の廊下は騒々しくなる。

狭い廊下なので生徒たちが行き来するだけで、足音が板床に響き、それに、みんなも高い声を出してはしゃいだりするので、いつとき、そこは、賑やか通りとなるのであった。

小さな運動場にも、早々と、生徒たちが散り、思い思いに遊びに興じている。やはり、子供の声は高く、秋空に抜けて行く。

今年の秋は運動会は中止となった。

すでに、空襲の被害を蒙っている都会地では通例となっている上に、学校側の人手不足の事情もあって、このような措置となった。

実際は、運動会を開催しても、昼の弁当持参が無理な家庭もあって、その間の事情も斟酌されたようだった。その代わりに体力増強の掛け声と共に、木刀や、薙刀に似せた棒切れを持たされて、「突き」「面払い」などの武道が全校で多く奨励されるようになっていた。

体育の呼び名も、鍛錬の時間と称された。

昼休みの教室では、いつもの昼飯時間となり、わいわいがやがやと、みんな、この日も、騒ぎ立てながら、食事を摂った。

待ちに待った時間、勇輝もアルミ製の弁当を開くと、夢中で箸をつけた。

米飯は三分が麦、麦飯というやつだった。

おかずは、芋蔓を煮たのとタクワンが二切れ。

おかんも弁当作りには苦勞をしていて、味噌汁のだしに使った後のだしじゃこを天日で干し粉末にしたふりかけ粉を、ごはんの上には掛けてくれていた。これは、骨を丈夫にするカルシウム摂取には効果ありとされた。

昼飯らしきものがありつける分だけ、まだ、勇輝は良い方だった。働き手がない家庭では、弁当を用意するのが大変で、麦飯に菜っ葉、出し殻の茶の葉っぱを混入して量を増やすなどは極く当たり前のことであった。

もちろん、町のカラスと村のカラスに違いがあるのは当然で、銀シヤリ

と言われた白米めしを持たせる裕福と思われる農家もあった。

いわゆる日の丸弁当で、真ん中に赤い梅干あり、それに、おかずの数も比ではなかった。つまるところ、小さな食い物戦争が如実に表されるのが、この昼食時間で、生徒たちは、見ていないようでも、やはり、回りを気にしながら食事の時間を過ごしていた。

そんな日々の中、露骨な食べ物いじめが表面に出た。

勇輝や権太らがたんぼの畦道を辿って下校している時、傍らの小さな雑木林から、誰かが言い争う声が聞こえて来た。

「なんや。あいつら、村のカラスやな。なにしてるんや」

「わからんが行ってみよか」

勇輝と権太、それに、あと、二人、下級生の生徒がいた。

男は男ばかり、いつもの下校仲間の一行だった。

勇輝と権太は小走り、雑木林に向かった。その途中で、村のカラス三人に取り囲まれている山森三代次（やまもりみよじ）の姿を認めた。

「おい、お前ら、なに、やっとな？ええっ」

走りながら、権太が牽制（けんせい）の声を掛けた。

村のカラスたちがこちらを一斉に見た。同じ四年一組の連中で、先頭役に立っているのはキツネの三吉こと木村三吉だった。村のカラスの長、門倉伸太郎の威勢を肩にもの言うので虎の威を借るキツネ、それで三吉にはそんな名がついた。

ひよろりとした背恰好に、キツネ目、直ぐに、見分けが付いた。

「なにを、やっとするて？な、こいつのほんまの名前を呼んでるだけや」

「そや、こいつ、山森ミソジて言うんや」

「それにやな。ごつつう厚かましい名前やで。食糧非常時に、ヤマモリつてな。どんぶりに山盛りつてことかいな。それ、腹いっぱい喰うことやろ。そやのに、ちっこい弁当箱に、麦飯、それに、味噌がちよぼつとや」

調子に乗って、取り巻き連の少年たちが言った。

貧相な顔立ちで小柄な山森が下を向いたまま泣きべそを掻いていた。袖口がほどけたぼろぼろの国民服を着ていたので、山森は貧乏臭くもあつた。

村のカラスたちの囃子文句を耳にした時、起きていることの方の事情が勇輝には読み取れた。昼の弁当を開く時、貧乏人の子沢山で、その上に、働き手のない母子家庭、山森の家は勇輝の一家よりも極貧の状態にあつた。

それでも、母親は弁当を子供に持たせていたのだが、おかずなど買う金もなく、いつも、おかず代わりの味噌が弁当には添えられていた。

その様を、村のカラスたちは観察していて、三代治の家の貧乏振りを揶揄していたのだった。弱い者いじめであつたが、食べ物のことだけに、勇輝も権太も、村のカラスどもが許せなかつた。

「おい、お前らな。山森をどついたらんやったら、わいも、お前ら、どついたらで」

鼻の穴が異様に膨らんだ。権太が怒り狂う時のこれは徴候と言つやつで、

今まさしく、権太の怒りは頂点に達しつつあった。

「口で言うただけや。な、ミソジ、わいら、なんもやってへんよな」

「…わい、どつかれてえへん」

三吉の脅しの態度に、山森は可細い声を出した。後難を怖れてか、その場を取り繕った。

「どないでもええわ。味噌喰って悪いんかいな。わいんところのおとんなんかな。芋焼酎を飲む時なんかは、みそを舐め舐めや。味噌汁かて何かて、お前らが作って、高い金で売っているんやろ」

「そないこと言われとうないで」

「ほないこと言うなら味噌汁も飲まんて過ごしてみいや。お前ら、日本人やあらへんで」

「そや。権太の言うてる通りや。四年の組でな。こないな、あほなことがあつたら、わいも困るねん。よう、覚えときや。お前らの親が許してもわいが許せんのかや」

「なんや。級長がどないしてん？級長が怖（こお）て、戦争は出来へんで。わいら、農家のもんが飢えて死なんようにな。お国のために、米や麦を作ってるねん。なんもしてない奴らに文句を言われる話やないで」

「ほなら、言うたるわ。分っているんかいな。わいらな、喰うたもんは、ちゃんとお前らに返してるで。それも毎日や」

「なんや、いつ、返してもろうた？」

「頭の悪い奴らやな。お前らかて、喰うたもんは便所壺にぽっんぽったん落としてんやろ。わいらの出した肥料、肥えたごに、いっぱい、詰まってるやんか。お国のために、わいらかて、ふんぱつして、出すもんは出してらんや」

「…なに、糞垂れがなにぬかすねん」

「よう言うてくれた。わいの得意な奴、ほな、一発咬ましたるわ。なあ、なにをぬかすねんでひやくまんねんや。ごたごたぬかすな」

「アホに言われとうはないで。何が、ひゃまんねんや。お前え、そんなん、ひやくまんねんも、生きててから言うたらどないや」

「糞の話、続きもしたろか。それをやな、ありがたそうに汲んで行く親のこと考えたら、お前ら、ガキ、ほんま、罰が当るで」

決着は付いたと思えたが、権太が更にやり返した。今度は、親の喧嘩を子供が返す、あべこべの展開が繰り広げられた。

「おい、三吉、お前には特に文句ありや。この前な、お前んとこの親父が散髪に来よつてな。そいで、終わったら、金、払わんと、サツマイモ、二個置いてな。これでええやろて。わいのおとん、もの凄（すご）う怒つてな。お前の親父に、サツマイモ、ぶつけたつたと言うとつた。よっしや、わいも、おとんの仇を討つたる思うてたから、今な、仇、討たせてもらうで。成敗や。どついてこましたるっ」

「どつからでも来いや。町カラス、ぎゃーぎゃー、鳴いとるだけでうるそ

うてかなわん」

「なにを言うとするんや。あのな。勇輝の兄（あん）ちゃんなんか。この前、散髪に来た時なんかは、石鹼一個、持って来てくれたんやで。それで、ひげ剃りしてくれて。今時、かっこええやつちゃって、うちのおとん、えらい喜んでった」

（船に乗ってるさかい、それぐらいなもんは何とかなるんやろうけど、えらい、うちの兄ちゃん、気前ええな。石鹼一個あつたら、芋蔓、喰わんでもよかったのに）

子供は子供、損得だけで事を判断していたのだが、兄の勇は弟に対しては父親代わりの思いも持って接していたので、息子の権太が勇輝の友達の一人と知っていて兄はそれなりの心配りもしていたのだった。その兄も、また、家を留守にし徴用船に乗り危険な海にと今は出ていた。

三吉を目掛けて、権太が殴り掛かった。三発、権太の振りかざしたこぶしが三吉の頬に当たった。負けずに、三吉も権太の腰にむしゃぶり付いた。あとは取っ組み合いになり、草地の上をくんずほぐれつ、二人の少年はい勝負をした。どちらが上になっても、二転、三転、上になったり下になったりした。腕力伯仲で勝負はつきそうにない。

「もう、止めとけ。どっちも、ええ勝負や」

やっと、勇輝が声を掛けたので、町のカラスと村のカラスの小競り合いは収まった。

それでも、不承不承のことで、腹の収まらぬ両者、睨み合いだけは続いた。状況を読んでから、村のカラスたちに最後の一発を咬ませるべく、権太が勇輝を促した。

♪さよなら三角　また来て四角　四角は豆腐　豆腐は白い　白いはウサギ
ウサギは跳ねる　跳ねるはうんこ　うんこは臭い　臭いはうんこ　うーん
とお　うんこは臭い♪

と、勇輝は村のカラスたちに向けて、得意げに新作を発表して見せた。「うんこは臭いや。分ったかいな。お前ら、臭いはウンコで尻拭いの遊びは終わりや」

調子に乗って権太が後を続けた。これは言いたい放題、言葉遊びに関しては、町のカラスの一方的な勝ちとなった。

山森へのいじめも無くなるはずだったが、山森は欠席勝ちになり、その後は、今で言うところの不登校児童の一人になって行った。

弁当を持たせてやる事が出来ない日は、どうやら親も不登校を黙認してしまいう傾向が生まれたのかも知れなかった。

木村三吉の家も、父親がいるとは言え、小作農の農家、やはり、村のカラスでも、貧乏暮らしをしていることには変わりはなく、散髪代もない身であることは充分に考えられた。

昭和十八年の秋のことで、この秋の彼岸団子は、小豆や砂糖が手に入らないので、かぼちやを代用とする家庭も多く、また、かぼちやの種も栄養素の一つなので、種を割ってはぼいぼいと口に入れられ、おやつ代わりに持て囃された。窮すれば通じるであった。

それに、実際に弁当を子供に持たせられない家庭も多く、昼時間になると家に帰って食べると告げて教室を出、休憩時間の一時間が経過したら、また、授業を受けに戻って来る生徒たちもいた。

みんなは、陰では“弁当無し組”などと噂していた。家に帰って、本当に、昼飯を食っているかどうか、疑わしかったからであった。

食べられるものなら、何でも食べると言う風潮が日増しに高まって行くことになるのだが、この頃、すでに、学童疎開は一部の都会地では進められており、もう、間もなく、鈴蘭台でも急に人口が増え、尚更に、食糧事情は悪くなって行くのであった。

第三章 鈴蘭台の夕焼け小焼け

第三章 鈴蘭台の夕焼け小焼け

1

「なあ、家に帰る途中にある大（おお）けなあのお屋敷な。あれ、誰が住んでるんや」

下校の道すがら、宏志が勇輝に尋ねた。

そのお屋敷は宏志の登下校の道筋にあり、引越しをして来た当初から、宏志はどうやら気になっていたらしい。

「知らん。お屋敷と言うより、わいらの住む下界から見たらやで。ありや、お城やな」

前々から気になっていたが、誰も、その屋敷の噂をするわけでもなく、彼ら少年たちも、その屋敷に住む主のことは知らなかった。

「おとんに聞いてきたるか。そやけど、なんも知らんかもしれん」

権太も、無関心派の一人だった。神有電鉄の鈴蘭台駅からは、三田・有馬方面、栗生方面にと延びている支線が二つあって、その岐れ道の踏み切りの方こうになる高台に、そのお屋敷ふうの建物は建っていた。

いつも勇輝たちは下から仰ぎ見ていたので、余り目には止まらず、これ

まで、余り気に止めずに過ごして来たのだった。

宏志が目敏く目にした屋敷のことについては、この日は分からなかったが、散髪屋をやっているだけあって、権太の父親は街の下世話な事情には詳しく、その翌日の下校時には、その正体が権太の口から明かされた。

神戸、西海岸の重工業地帯にある白岩製鉄の創設者白岩一族の別荘で、この鈴蘭台ではいちばんの豪壮なお屋敷と言うことが知れた。

軍需関係の仕事でも、製鉄所ともなれば、その鉄を使って軍艦や潜水艦などが作られるわけだから、花形産業、その一族が別荘の一つや二つ持つていても不思議ではなかった。

もちろん、新興の街の連中も、権太の父親も、お屋敷の中の様子ことは知らなかった。

そんな一日、四年一組に、思い掛けない転校生があった。

この年も押し迫ろうとする十二月の初めの日、一人の少女が小部国民学校の古い校舎に転校の挨拶のためにやって来た。

羽鳥宏志が転校して来た時も、都会者風のかっこよさにみんなは注目したものだだったが、今度の転校生はその比ではなかった。

何しろお付きの執事らしき男を引き連れての登場で、誰しもが度肝を抜かれた。執事にしても、この時代には珍しい三つ揃えの背広、この戦時下、国民服ともんぺ姿しか見たことのない少年少女たちにとって背広を着ている男と言うだけで、特別の意味があった。

その服装だけでも値打ちものだったが、主人公の少女の方はもっとおしやれだった。絹地と思われる青いワンピースの洋服を着ていた。その洋服の丸襟は白いレースがあしらわれたもの。そして、腰部分には白い布地のベルトが施されていて、ベルトの後ろの部分には、蝶結びにした大き目の白いリボンが結び付けられていた。その風体、一見ただけで、その転校生が良家のお嬢さまと言うのが分った。みんなしーんとなった。

辺見先生を入れて三人は教壇の段の上に立った。同列になり肩を並べた。羽鳥宏志が転校して来た時にはこんな大袈裟なことはなかった。これは特別扱いの転校生紹介の仕方、みんなに緊張感が走ったのも無理はなかった。「みなさん、小部国民学校の生徒として、白岩光子をお迎えいただくことをよろしくお願い致します」

最初に口を開いたのは、執事らしい男だった。

標準語で、関西訛りなどなかった。学童の誰もが見惚れていて、転校生の名前などは聞いていなかった。紹介された白岩光子はお辞儀をしたが、鷹揚な態度で、上から下を見渡しているような視線でみんなを眺めた。

それも、掠めるようにあたりを目で舐めただけで、生徒一人一人とは視線を合わせなかった。

この組み合わせに、ちゃんと、順序があることに勇輝は気付かされた。

白岩光子がお辞儀をしたあと、間を置いて、執事らしき男が深く頭を下げた。お嬢さまに代わり、深く頭を下げたと感じた感じで、次に、辺見先

生が背を真つ直ぐに伸ばしたあと、恭々しく頭を下げた。

もう一つ違っていたのは、白岩光子はどの席にもつかずに帰宅してしまったことだった。退席の処方も作られた筋書き通りに運ばれていた。

教室の外にお嬢さまを先導したのは辺見先生、次に、お嬢さまが続き、そして、最後に執事らしき男が従った。

それだけではない。英国製らしき車が一台校庭の隅には停まっっていて、お嬢さまはその車の中に消えた。車のエンジンが紫色の煙を吐いた。

それらの一部始終を見終わったあと、勇輝はふーと息を吐いた。級のみんなもそうで、この後の授業中、誰も無駄口を利かなかった。

休み時間中に、白岩光子の噂話が出たのは当然で、わいわいがやがやと、みんな喧（かまびす）しく、口々に、新転校生の素性などを話し合った。教室全体が騒然となった。

下校の途中、勇輝に権太、宏志の三人も、お嬢さま出現の噂話の続きに花を咲かせた。三人が立ち寄ったのは、鈴蘭台道草横丁で、その名の通りの道草の地、この名も勇輝が付けた。

下校時、わざわざ遠回りをし、消防署のある横の急な細い坂を昇った。坂の頂上には末廣稻荷神社があった。

距離にして二百五十メートルほどだが、ぐねぐねした急角度の坂道なので、昇るには息が切れた。それだけに、余り人は来ない。

やっと、宏志も鈴蘭台の街暮らしに慣れて、山に入っのクリ拾いや、

探索、中山たんぼでの探検遊び、それに、川に行つての魚釣りなどにも加わるようになっていた。

寒い季節になっていたが、今日はぼかばか陽気で過ごし易かった。

坂の途中で草むらの向こうに、いたずらで投げる小石も空を裂いて気持ち良く飛んで行った。いろんな遊びが出来るから道草横丁。

頂上の小さな足場に着いた。

急な坂を昇つて来たばかり、ちよつと、みんなは息を弾ませていた。

山の上からは鈴蘭台の街の一部が望めた。

台地に張り付くように、ちまちました家々が点在して見えていた。

小さな丘や林などもあちこちにあつて、緑豊かな土地も備えた住宅街と言つた趣きも呈していた。

「なあ、あのお嬢さま、明日からわいらの教室に来るんやろ。そやけど、あないなええべべ着てたら、座るところもあらへんやんか」

「絹製の座布団持参やで。わいら下々のもんとは違うさかいにな。あの、しゃつとこ張りおっさんがやな。いつも、側には付いとお嬢さまの監視してるんとちゃうか」

勇輝と権太の会話に宏志が加わった。

「来(き) いへんで。顔をな。出ただけや」

やっぱり、大人ぶつたことを宏志は言った。

「へえ、なんでや？」と、権太。

「そんなん、勇輝が言うたみたいにな、下々とは関係あらへん。家庭教師がいてな。特別に雇った先生が教えよるに決まったるう。算数かて、ここのやったら、やつと、九九の計算を終わったところやろ。遅れてるねん」

「なんや。宏志は頭がええな思うたら、そないな家庭教師とか言うのんに世話になつとったんか」

「うん、ちょこつとだけやけんどな。前の家にいた時、女学校に通ってる隣りの人に教えてもらうたことはあるけんど、こつちに来ることになって、二ヶ月で終わりになつてもうた」

「そつか。そないなことであるんやな」

勇輝は感心をし、頷いた。

「わいら、鈴蘭台の町もんは町のカラス、そやけど、宏志はなんやな。都会のカラスなんや。そや、あのお嬢さまも都会のカラス、いや、天界から来たカラス様かいな。わいらより上なんは間違いないこつちやな」

「うまいこと、権太、名付けよるな。天界から来たカラスか。わいの専売特許、奪わんといてんか」

「へへえ、そう言うこつちやな」

得意気な顔になり、権太が勇輝に答えた。

「そんなん、上も下もないて。気にするんやないって。そんなことより、なんで小部国民学校に白岩光子が転校して来たか言うと、神戸あたりにおつたんでは空襲の心配があるさかいに、そいで、転校して来たんやと思う」

な。わいもそうなんやけど、いま、神戸や、西宮、芦屋あたりでは家の疎開と言うのんがやられ始めていて、須磨にあつたわいの家も、その内に強制立ち退きに遇（おう）やろうて、婆ちゃんがそないなこと言うてな。それにや。ここ、山一つ越えてるさかいに安全やないかて、そいで、引き越して来たんや」

「ふーむ。そないなことやったんか」

しんみりとした口調で、宏志と勇輝が会話を交し合った。

二人とも大人びた顔になった。

「うちの婆ちゃん、須磨の家では、えらい、隣組の連中に評判が悪（わる）うて、非国民扱いされててな。まあ、それも、引越しをして来た理由でもあるんやけどな」

「どないなことなんや？」

「ほら、うちの婆ちゃん、おもしろいやる。そいで、近所の人に音楽の話をしたり、そつと、夜になると、自分一人でレコード掛けて聴いてたりしたんや。そんなんがバレてもうて、そいで、非国民にされてもうた」

勇輝と権太は、宏志の話を聞かされ、二人とも黙り込んでしまった。

それで、三人とも、しばらくは、眼下の街の風景を見やっていた。

さつきまで晴れていたのに、天空には雲が掛かった。

見た限りでは空の果てなどはない。

でこぼこの形状の低い山並みがいくつか重なっていて、その山麓に、鈴

蘭台の街は広がっていた。何事も起きていず、ましてや、この街の佇（た）たずまいのどこにも戦争は起きていず、どこまでも平和そのものだった。

この時、雲が翳った分、山の端から台地に位置する街並みに向けて、鈍い太陽の光の矢がゆつくりと走った。

そして、確実に、街並みを舐めて行った。

「道草横丁、今日は宏志もちよい横道が出来（け）てよかったな。また、わいら、お婆ちゃんに会（お）おうとうなったわ。おもしろい、お婆ちゃんやもんな」

「そやろ。いつでも呼んでおいでって、婆ちゃん、お前らと会うのん楽しみにしてたで」

やっと、宏志が気を取り直した。口元に笑みが浮かんでいた。

それで、新仲良し三人組は元来た道を元気に戻った。

2

「それ、ほんまかいな」と言う。権太の口にした文句がみんなの気持ちを一歩代弁していた。数日経過した日のこと、新転校生の白岩光子のお屋敷に、勇輝、宏志、権太の三人が招待されることになった。

この話は、担任の辺見先生から直々に伝えられた。「みんな粗相のないように」と、辺見先生はみんなに忠告もした。

四年組の代表らしかったが、なぜ、この組代表の選考に、権太が指名されたのかは、級の誰もが理解出来ていなかった。

それに、宏志が言ったように白岩光子は、その後、登校しなかった。

お嬢さま育ちとしては、様子を見るためにひとまずのところ学校までやって来たのかも知れなかった。

その結果、余りにも田舎者ばかりなので登校するのを控えていると言うのが、四年一組のみんなの大方の意見となっていた。

特に、副級長の加賀美理紗は、この転校生のことが気になっていて、いちばん、熱心に、みんなと話を交わした。女の子同士のことが多かったが、何より白岩光子の服装のことが話題になっていた。

この戦時中、小部国民学校の女子児童はみんな粗末なもんぺ姿の国民服、白岩光子の真似ごとをするだけで、先生からは非難されるに違いなかった。つまりは、非国民、そこまでは、加賀美理紗は口にはしなかったが、女の子たちの間では、今の世で言うところのブーイングの嵐が吹き荒れていたものであった。

とにもかくにも、級のみんなの間では大問題、こんなことを容認した学校側にも問題ありだが、事の真相は誰にも分らなかった。

その矢先に舞い込んだ、ご招待話。招待される側の戸惑い様も、半端ではなかった。

級のみんなにもこの話は知れ渡り、その選考者を巡っても、ああのごう

のと言いつつ合った。

（権太は体もでかいし、ガキ大将で腕っぷしは強いし、頼りになるちゅうことや。宏志は都会もんやから資格はありやな）

が、級のみんなの納得の仕方となった。

辺見先生は勇輝には「級長さんやから行って貰いたい」旨のことを言ったので、その資格の意味は一応はみんなには理解出来た。

招待日を告げられてから、勇輝の家では騒動が持ち上がった。事の次第をおかんに報告したら、その名誉ある招待については喜んだものの「粗相がないように」と言う辺見先生のご託宣のことを耳にして、おかんは、勇輝に着せて行く着衣のことで頭を悩ませた。

相手は名だたるお嬢さま、今で言うフル・ファッションのいでたち、失礼でないような服装をさせるのは、これは大変なことだった。

姉の登美子は「そんな、まるで明治初めの文明開化、舞踏の社交界に勇輝が登場するような話やな」と、一連の流れを評した。

まさしく、その通りの話が起きていた。

もっと、大変なのは権太のところで、頑固者の親父は、「亀福家はな。名前は立派やが、たかが散髪屋風情、わしら、そんなご貴族様とは関係ないで」と、ご招待話には一切、耳を籍（か）さず、すったもんだの話にと、この特別のご招待話は発展していた。

着て行くものがたいへん、実状はそう言うところだったが、もったいを

付け、権太の親父は頑固者を売りものに、体よく断ろうとしていた。

どこの誰が話を付けたのか、それでも、権太の親父は息子のご招待話を最終的には受けた。事の真相はやはり知れなかったが、警防団か、隣保組織か、街の有力者とやらがどうやら声を掛けたらしかった。

問題のご招待日は、ちよつと木枯らしの風なども吹く寒い日のことで、勇輝はおかんが夜業（よなべ）をして編んでくれた黒色の毛糸のセーターを着ていた。兄のお古のセーターを解きほぐし、編み直したので、日数と時間が掛かったおかんの労作だった。

衣料の配給切符をどこかからか余分に支給され、その切符で購入したのか、権太は新品の国民服を着ていた。どこか恥ずかしそうで、いつもの権太らしくなく、借りて来た猫のように、この日はおとなしかった。

宏志は学生服姿であったが、勇輝などがこれまでに見たこともないような立派な仕立ての学生服を着ていた。

今の国民服が制定される一時期前のデザインで、折襟付きの学生服で、胸合わせは桜が刻印された五つボタン、そして、襟の両側には大きめの金色の飾りボタンがそれぞれに一つずつ付いていた。

この屋敷まで同行した時の宏志の説明によると、この学生服は父親がわざわざ上海から送って来た一品、着る機会もなかったもので、この学生服は新品同様ののだと、宏志は他の二人に気兼ねをしたのか、説明も加えた。

白岩家の屋敷の門は、高い高い階段の上であり、チャイムのボタンを押

すと、五十がらみの着物を着た女性が顔を出した。

「どうぞ、お嬢さまがお待ちでございます」

鄭重な挨拶を受けたが、ともかく、三人は型通りのお辞儀だけは返した。

一步、門の中に入ると、敷石が敷き詰められた芝庭道があつて、何歩か進むと、折からの季節、金木犀の薫り立つ匂いが三人の鼻翼を掠めた。

赤くて小さな実を付けたセンリョウやウメモドキの背の低い植木なども庭には植えられていて、晩秋の季節そのものが、この庭のそここで感じ取れた。三人はもっと、驚かされた。

この屋敷内の庭の一角には、コンクリート造りの十五メートルプールまでもが用意されていた。今は水の入っていないプールには秋の枯れ葉が降り積もっていたが、それにしても、屋敷内にプールがあるなど誰も想像もしないことだった。

(なんやこれはプールやで。こんなプールで、あのお嬢さまは夏になると、一人で水遊びをなさっているちゅうわけや)

そんな程度の感慨しか勇輝には持てなかった。何しろ、生活程度ではケタが違いすぎて、二の句が告げないでいたと言うのが、正直な気持ちだった。これはあとの二人も同じだったに違いない。都会のカラスの宏志でさえ無言、まして、権太が口を挟める場面ではなかった。

屋敷内に案内されて数分、ともかく、三人は女中頭らしい女性の背に従つて、行儀良く、前へ前へと進んだ。

最近、街ではもんぺ姿の女性しか目にしていないから、上等の着物を着たその案内役の女性でさえ、彼らの目には物珍しく写った。

本館の建物の外れに、芝庭に囲まれた二階建ての洋館が建っていた。全体がロココ風の建築物だったが、彼ら少年にはおよそ縁の無い話で、この造りの価値のほどは知れていなかった。

前庭のあたりも工夫がしてあって、アーチ風に型取られたバラの門が芝道の入り口あたりには飾られていた。季節とは外れているので、あいにくバラの花は咲いていなかったが、花が咲く季節なら、バラの花に飾られて一層に洋館が映えて見えるに違いなかった。

(えらいこつちや、こんなん、西洋やで。それも、西洋のお城や、これは、わいら、えらいところに踏み込んだと言うことや)

それでも、咄嗟(とつき)に、勇輝はこの白岩家の屋敷に、自分が得意の名付けの術を付した。感嘆の思いが込められた。

(鈴蘭台天空城第一番地やな。人間離れしてるで。普通の人間はとてものやないけど、こんな場所に住むことはでけへんもんな)

彼らは、洋館の応接間に通された。

そこで、また、びっくり、いや、窮屈な時間を過ごすことになった。

どこを見ても見たこともない家具調度品ばかり、すべてが洋式だから、椅子もテーブルもいわゆるアンチック風、座るよう薦められた椅子も背高のハイ・チェアの造り、しかも、布張りで、その背には刺繍のようなも

のが施されていた。

ちらと勇輝は見ただけだが、バラと天使が配されたその背のデザイン、とてものこと、もったいなくて、直ぐには、勇輝は椅子には座れなかった。

いや、気圧（けお）されてのことだった。

宏志も権太もみんな同じで、座るには座ったが、三人とも、腰を深くしては座れなかった。椅子の端にちよこつと腰を掛けていた。

「茶菓を用意させていただきましたので、しばらく、お待ち下さいませ」

案内役の女はていねいに頭を下げると、一旦、応接間を退いた。

「おいおい、どないなってるう」

「まあ、わいら、落ち着かんとな」

先に口を利いた権太に、勇輝が言った。

「まあ、そういうこつちやで。問題はお嬢さまがや。わいらの前に顔を出すかどうかやな」

「またあ、そないな呑気（のんき）なこと、宏志、よう、口にでけるな」

「それにしてもや。こつつい、飾りもんやな。な、あそこ、天井を見てみいな」

宏志に指を指されて勇輝と権太は天井を見上げた。

ガラス細工の施された大きな飾り物が天井からぶら下がっていた。

勇輝も権太もそんな天井の飾り物は初めて見た。

「あのな。シャンデリアや」

「えっ、なんやて？なんて言うねん？」

「天井飾りのシャンデリアや。これ、敵性用語やけんどな」

「ほならええわ。覚えたかてしようないやん。そんな横文字を使おうたら、非国民や」

と、これは宏志と権太の会話で、次に、勇輝が宏志に質問口調になり別のことを問うた。

「なあ、この机かて変ってるなあ。見たことも触ったこともないで。なんちうねん？」

「マホガニー製の上等品、よう、磨いてあるで。そいから、見てみい。このテーブルの四本の脚の先は猫足になつとるう」

「へーえ。上等品かいな。これも」

そう相槌を打ち、権太が応じた。その時、応接間の入り口がとんととノックされた。慌てて二人は口を噤んだが、宏志が勇輝の裾を引っ張った。そして耳元に口を寄せ小さな囁き声を出すと「返事せな」と言った。

級長の責任、宏志はそのことを勇輝に教えた。

「は、はい、どうぞ」

よそ行きの声を勇輝が出した。

さっきの女が顔を出した。恭々しく、お盆を掲げていて、しずしずと摺り足で臨んだ。テーブルのところまでやって来ると、足を止めた。紅茶茶碗と茶菓らしき物が乗せられた皿を、それぞれ各自に一つずつ、テーブル

の上に乗せた。粗相があつてはならないから、女中頭らしい女の仕草は慎重そのもので、ていねい過ぎるぐらいにいていねいだった。

この間合いに、三人とも息を詰めた。

この時、奥の部屋から「ぼろろん、ぼろろん」と、ショパンのピアノソナタの曲が流れて来た。優雅な調べのピアノ練習曲だった。

三人とも耳を澄ませた。

その間合いを計つてから、女がみんなに声を掛けた。

「どうぞ。粗末な物でございますが、お召し上がり下さいませえ。ああ、それから、ひかる子お嬢さまがみなさまによろしくと伝えてくれるように申しております。ただいまは、おピアノのレッスンのお時間ですので、失礼させていただきます。そのお、わたくしごときが口にするのは何でございますが、ひかる子お嬢さまとの今後のお付き合ひのほどを、皆さまには、よろしくお願いしておきます」

「は、はい、それはもう……」

やっと、勇輝が答えた。

「それから、三十分ぐらいなら結構ですから、皆さん、お茶でも召し上がりながら、ごゆっくりなさつて行って下さいませ」

と、言い置いて、女は応接間から出て行った。その気配を確かめてから、待ち切れなかったらしく、権太が初めに口を出した。

「なんやて、みつこやないのんか？ヒカル子さまて、あの女、言ったよな」

「そや、光子て、ヒカル子て読ませるんや。ひかり輝くお嬢さまってことやな。よつしや、白岩のお嬢さまを呼ぶ時は、“光り輝くヒカルコお嬢さま”や。ええか。そいからな。これは、さつき付けたんやけんど、この洋館のお屋敷は“鈴蘭台天空城第一番地”や。ただの一番地やのうて、第一と付けたところが凄いとこや」

「さすが勇輝や。第一番地も、光り輝くヒカリコお嬢さまも、どっちもええな。これからは、そないな呼び方にしよ。決まりや」

掛け合い漫才のように勇輝と権太の会話はぴったし、息が合っていた。与えられた三十分、誰にも監視されていないので話が弾んだ。

その間もヒカル子お嬢様のピアノレッスンの時間は続いていた。ハ短調の曲、よく知られた曲で、宏志だけは耳にしたことのある曲だった。それなりの説明を加えた。

「なあ、これ、なんて言うねん？」

小皿に盛られた茶菓子を口の中に入れ、口をもごもごさせながら、改めて権太が訊いた。

「それなクッキーや。日本語に直したら西洋甘焼きせんべいちゆうことになるんかいな」

と、勇輝がしたり顔で解説をした。父親が外国航路の船員だったから、銀紙に包んだチョコレートや、それにクッキーなどは、小さい頃には勇輝も口にしていた。

「クッキー？聞いたことないでえ。いやあ、ほんま、わいはおどろいてまんねん」

権太が権太節を一発咬ましたが、後の者はこの台詞は聞き飽きていたので反応しなかった。一人、権太だけは夢中で、クッキーを口に入れ、忙しそうに紅茶を飲み干していた。

鈴蘭台天空城第一番地を少年たちは三十分後には退去した。

話を付け加えれば、副級長の加賀美理紗ら少女たちも、ご招待を受けることになるのではないかと思われたのだが、男尊女卑の風潮がはびこる時代、白岩一族からは少女たちにはお呼びは掛からなかった。

外の秋風が一層に強くなっていた。

みんな、口々にわいわい言いながらの帰り道、神有電鉄のおんぼろ車両が線路際を歩く彼らの側を通り越して行った。

神戸の中心地湊川駅に向かう上り線の電車だった。

電車に乗れば市街地に近付くことになるので、戦争の実態も一層に手に取るように分るのだったが、山をいくつも隔てた地にあるこの鈴蘭台ではその様相はまるで違っていた。

ひとまずは、少年たちは安全地帯に身を置いていたことにはなるのだが、戦局が悪化しつつあったこの時期、やがて、彼らとて、その魔の手からは逃れられなくなって行く運命の下にあったー。

初冬を迎えたある日、鈴蘭台の小さな街を舞台に、戦争の縮図そのものを思わせるような事件が起きた。

高台に建つ通称ロシア人の館近くの池の周辺で、その騒ぎは発生した。

西の軽井沢とも言われて来た鈴蘭台では外国人も住んでいて、三十五年前ほどの時期に崩壊した帝政ロシアの領事館員であった亡命ロシア人一家がここには住んでいた。

北欧風の瀟洒な二階家で人目に付く大きな邸宅だった。この建物の直ぐ下にある池も、ロシア人の池として子供たちの間では知られていた。

この頃、ロシア人の館では、亡命して来た白系ロシア人だけでなく、神戸の市街地に空襲の被害が及ぶことを考慮して、各国の大使館や領事館の職員も住むようになっていた。

正式には、ドイツ、イタリアの各国の領事なども同居していたが、日独伊の三国同盟が昭和十五年に締結されて、ドイツとイタリアは同盟関係にあり問題なし。

また、旧ロシア人一家も問題外だったのだが、戦争勃発時に帰国の機会を逸して、このロシア人の館に、イギリス国の領事館家族が同居していたことが事件の発端となった。

一部にはこのロシア人の館は前々から憲兵隊の監視下に置かれていると

言う噂も、鈴蘭台ではあった。

憲兵隊職員用の官舎も近くにありで、この噂はもつともらしくもあった。直接には、実害が生じていたわけではなかったが、ある日、ひよんなことから事件は発生した。

敵国であるイギリス人の少年が、狙い撃ちに遭ったのだ。

それも、藤王勇輝と亀福権太の二人が目撃者、凶らずも、町のカラスと村のカラスをも巻き込むこととなった。

この日は日曜日、初冬なのにぽかぽか陽気で朝から小春日和の一日だった。二人はロシア人の池の畔(ほとり)りで遊んでいた。

池にはモロコなどの小魚が水面近くを泳いでいるので、小魚を目で追っているだけでも時間は過ぎせた。

天気の良い日などは、時折り、西洋人形のように可愛いナターシャと言う名の五、六歳の少女が池の周辺で散歩していたりで、勇輝も権太も、その少女との遭遇を期待している向きもあった。ともかく色が白くて可愛いので、眺めているだけでも大満足となるのであった。

池の方角から丘状の森の中腹地帯を見上げると、そのロシア人の館は松林越しではあったが建物の一部を望むことが出来た。

この時、ロシア人の館とは逆方向になる池の上方で人の気配があった。

三川屋坂を上がると、この池に到達することが出来るのだが、声のしたのはそちらの方角からだった。何か、騒がしい。

上方の、見上げた場所の坂の両側には熊笹が一杯生えていて、視界が悪かったがよく見ていると、こちらの池にと下りて来る一団がいて、何やら、助けを求める声も混じった。

びっくりして、勇輝と権太が高い視線の向こうになる笹藪のあたりを注視すると、イギリス人の少年を引き連れた少年たちの姿が見え隠れしながら望めた。所々は熊笹の藪に隠れて見えない。争う声だけは聞こえる。

「なんや。あいつら、村のカラスやないか」

彼らの姿を、権太が目敏く識別した。

ただならぬ気配を感じ取って二人は草むらに身を隠した。

池へと下る小道を分け一団は姿を現した。門倉らの上級生主体で、手下の三吉、それに、いつの間にか手下に加えられたのか山森までも顔を出した。

総勢六人の少年たちで、みんな殺気立っているかに見えた。何を企んでいるのか、池まで一行がやつ来た時、初めて事の様相が知れた。

「おりや、捕虜や、捕虜やったら、捕虜らしくせんかい」

少年たちの手にした木切れの棒で、前後から、突っ突き回されながら、イギリス人の少年はこの場に現れた。

傍らには、自転車を押し押しやって来た手下役の山森が立っていた。

「ええか。よう、見とれや。そんな、敵性のもんは血祭りにしたるさかいにな」

門倉が腕を組みながら、そう、宣告した。

“敵性のもん”とは自転車のことだった。よく磨いてあるのか、青色に赤の細い横線が入った車体のアームが光って見えた。

同じ年ぐらいの、その少年、ハリスを勇輝も一、二度は見かけがあった。外人だから色が白く背が高いので目立っていた。

何より、目立ったのは、ロシア人の館の坂を下りて鈴蘭台駅に向かう時、自転車で乗ってやって来るので、嫌が上にも、この少年はその挙動が人の目を引いた。

村のカラスの長、門倉らの一派が、このハリス少年に目を付けた。

もちろん、勇輝なども、高級自転車を乗りこなすこの少年に反感は持つてはいた。こんな戦時の時代、この田舎街をこれ見よがしに、肩で風を切って自転車で乗り、擦れ違つとちりりんと警笛のベルまで鳴らす。そんな日本人を見下ろしたような走り方自体も許せることではなかった。

余り自転車などにはお目に掛かれない時代で、自転車を乗り回せるのは駐在の巡查ぐらいのもの。値段も高く、修理するにもタイヤもチューブも何もかも代用品で、一度壊れたら使い物にならず。

自転車も容易に手に入る品でもなく、高級品で、かつ、贅沢品。

まだ、それほどに、一般に普及している物でもなかった。

それこそ、“ぜいたく品は敵”の戦時下の標語を無視したような話で、ハリス少年の一連の行動は、節度を欠いていたことなのであった。

鈴蘭台駅から、三川屋坂へ、そして、急な坂を上がり切ると、ロシア人

の池に至る地点に出る。途中、草地を分けると、下りの細い一本道がそこから通っていた。村のカラスたちは、わざわざ、この三川屋坂にまでやって来て、ハリス少年を待ち構えたらしい。

平地はすいすい走れる自転車だがこの急坂は逆に仇となる。

のろのろと自転車を押しながらやって来たハリス少年は、村のカラスたちに易々と拉致されたに違いなかった。

捕虜遊びの最初はハリス少年を木の幹に縛り付けることだった。喚(わめ)き叫ぶハリス少年をみんな裸に剥いた。その間、五、六発、腹も殴打されたりで、ハリス少年は観念した。その挙句に、素っ裸にされ、松の木

の幹に、縄でぐるぐる巻きに縛り付けられた。

まず、目障りな自転車は踏んだり蹴ったり、叩いたりの乱暴ぶり、瞬間に、ぼこぼこにされた。捕虜を打ちのめす快感にみんな酔っていた。

その間、ハリス少年は訳の分らない異国語を何度も口にした。

鳶色の目に、赤茶色の髪、色が白くて脚が長い。確かに、ここは異国

地、それも敵の一人扱い、乱暴な対応も止むを得なかった。

使用不能になった自転車は、そのまま、池の中に放り込まれて池の底に沈められた。悪がきどもは統制が取れていた。

全員で自転車を持ち上げると、何度か、祭りのお神輿のように揺すぶって見せ、高く掲げてから、一気に、池へと投げた。

水しぶきが上がり、みんなは歓声を上げた。

一度、群生している水藻のヒシの葉の上で、壊された自転車は浮いていたが、重みのためにそのまま、ずぶずぶと池の底にと沈んで行った。

この後、池を包むようにして広がるあたりの雑木林にハリス少年は連れ込まれた。これからが“捕虜遊び”の佳境に入るところで、敵国の捕虜少年は代わる代わるに、村のカラス少年団の連中に棒切れで打鄭（ちようちやくされ）、打ちのめされた。

泣き叫ぶことしか出来ないので、ハリス少年は大声を上げたが、その内、ぐったりとなった。「死んでもうたら、あかんで」と誰かが言い、池から水を汲んで来て、捕虜少年の頭から気付けの水をばしゃばしゃと被せた。

「こんなん、止められへん。わいらも見つかったらやられてまうで。逃げよ」

草むらに身を隠して一部始終を見てしまった勇輝と権太は顔を見合わせた。権太の言ったことはもつともで、村のカラスの一団は、いつ何時、味方をも襲うかも知れなかった。

それなのに、草むらを出た時、二人は発見されてしまった。

ごそごそと音を立てたのがまずかった。三吉のキツネ目が光った。

今度は、勇輝と権太が逃げる番で、退路を絶たれているので、逃げ場を失い、彼らはロシア人の館のある山坂を這うようにしてよじ登った。

その分、騒ぎが大きくなった。これが幸いしたのか、この騒ぎを聞き付けて、やっと、山の中腹の向こうから、何人かの外国人が顔を出した。

こちらにやって来た。何やら、異国語が飛び交った。

飛んで火にいる夏の虫で、みんな、敵国の領地に向かっているようなものだった。その姿を認めるなり、村のカラスの少年たちは今度はクモの子を散らすように逃げた。

もちろん、勇輝も権太も、山坂は上がらず、逆に駆け下りた。

今度は、捕まればこちらが捕虜になる立場だった。ともかく逃げた。

やっと、みんなが逃げ了せた場所までやって来た時、振り返り様に、敵将の門倉伸一郎が、勇輝らに挨拶をして寄越した。

町のカラスと村のカラス、お互いの中に、この出会いの場の決着は付いていなかった。

「お前らが騒ぎ立てるもんやから、敵性外国人に気付かれてもうたんや。お前ら、わいらのこと密告しよったら許さんへんでえ。そいからな。おい、町のカラスとか言うてる奴、この辺はな。わいらのご先祖さんがみんなで汗して開墾した土地や。後から来たお前らに大きい顔はされとうないねん。そやろ。あのハリスの奴かて、あんなもんが、ここでちゃらちゃらしてんに、お前ら黙ってられるんかいな。わいらは許さんでえ。ちゃんとな。話をつけたっただけや。わかっとなるんかいな」

そう念押しをしてから、村のカラスたちは、三川屋坂の坂を更に下った。ともかく、この場は逃げるのが先、みんな逃げ足を早めた。

改めて、村のカラスの長、門倉伸一郎のことについて、権太が感心しき

りの言を弄した。

「あいつ、やっぱり大将や。大したもんやわ。ちゃんと仕切りよった。庄屋やなんかの出なんやで。な、わいら、貫禄負けや」

その後、外人騒ぎは一件落着をした。

ハリス少年暴行事件については、外国人たちは所轄先に、人権問題でもあるので嚴重抗議したが、時局柄、不問にされた。

旬日後、権太が耳かじりした情報では、余り騒ぎ立てても、近隣関係が悪化するので、ハリス少年や、子供たちは外出を控えることをひとまずの対処法とし、当局側には再発防止を願い出て、一件決着となった。

時局に触れれば徴兵猶予停止となり、学徒出陣の名の下、大学在学中の学徒も戦場に狩り出され、この年、昭和十八年十月には東京の神宮外苑でその壮行会が催された。

同様に全国各地でも、順次、学徒壮行会が行われた。少年たちの周囲には、まだ、露わには姿を見せていなかった戦争だが、なにやら、きな臭い匂いが、勇輝ら少年たちの周辺にも漂い始めていたのであった。

「うち、ほんまは花屋さんになりたかったんやけんどな。花なんか見ても腹の足しにはならんて世の中やからな。ほんま、何になったらええんか、

わからんわ」

「女の子に花屋さんはええけど、やっぱり、おまんまが喰っていけへん。軍需工場に取られて危ない思いをするよりはええけどな」

おかんの菊江と姉の登美子がしみじみと語り合っていた。

もう直ぐ、旬日後に、登美子が国民学校を卒業するので、その進路も含めて二人は話し合っていたのだった。

「ハナちゃんかて迷ってるで。あそこかてもう立ち退きなんやろ、そんな話になってるわ」

「ハナちゃんのお父さん、頑張ったのにな。なんや、丹波の篠山（ささやま）の方でええ場所探してるて話を聞いたけど、決まったんかいな？」

「うん、鈴蘭台より山ん中なんやんて」

「そやろな。丹波と言えば、山深いところで知られてるさかいにな。ハナちゃんところの花園はどないなってしまうんやろ」

「そやから、お父さんがな。バラの種木や苗木や、それにな。いろんな花の球根とか、いま、一生懸命にあっちゃの方へ、運んだるみたいやで」

「遠いところやから大変やろな」

「不便なとこやから、お父さん一人だけで、丹波の方には行くて言うてはるみたいやけど、それもまだ分からのやて」

「そつか。登美子は国民学校の高等科に行きい。みんな行くんやろ？義務教育やのうて有料や言うけど、それぐらいのお金、お兄ちゃんも出した

るて言うてくれてるう。そやから働きに出んでもええから高等科に行きい」

「お金、取られるんやから、うちはええ」

「勇はな。途中で学業を投げ出すことになってしもうたから、妹や弟には学校は行かせてやってくれと、いつも、そない言うてるで」

「ほな、うち、行けるとこまでは行くう。このまんまやったら嫌やて思う気持ちもあるよってにな。そやけんどお金がのうなったら、うち、いつでも、高等科、止めてもええよ」

何となく、傍らで聞いていた勇輝も、少しだけ、希望を繋いだ。

一安心した。国民学校を姉みたいに卒業したら、自分はどうなるのか、それなりに、考えることもあったからだ。

戦時下の学区制では、国民学校初等科が六年間。この後、国民学校高等科が二年制、また、この過程を経ると、実業学校予科が二年制、三年制に分かれ、高等女学校でも四年制、五年生制などが敷かれていた。もつとも、進学しても、多くは、学徒動員で兵器生産などの勤労奉仕に就かされていたので、事実上は、学業目的の学区制度そのものは崩壊していた。

登美子が国民学校高等科に進学したとしても、勉強に精を出すことが出来るかどうかは、心もとない状況下に置かれていた。

そんな話よりも、今のところは、勇輝にとっては、寺山花菜子の一家が、直ぐ様にでも、遠い地に行くと言う話の方が気になった。

そう言えば、このところ、花菜子は元気がない。鈴蘭台の街では誰が流

したのか、鈴蘭の根の部分には毒があると言う話が、まことしやかに伝わっていて、その噂のことを花菜子は気にしていたのだった。

姉の話によると、実際に、鈴蘭の根の部分にはコンバラトラキシン（多糖体）と言う毒物が含まれていて、水溶液などを飲むと死に至ることもあったとされていたが、観賞用で用いられている鈴蘭に限って言えば、そのような噂が巷に流れることは心外だと、花菜子の父親は口にはしていると断言していた。

その分、悪辣な噂の類いであることは間違いなかった。

それでも、知らずに小さな子供が口にする機会があるとんでもないことになる、話には尾びれも付いて、街中に広がっていたのであった。

花菜子もあれこれ言われることで、人目を避けるようになり、近頃では学校も欠席勝ちになっていた。姉の話を書く限りでは、花園の後始末をするのも大変で、両親の手伝いを花菜子はしていると断言することはあつたが、やはり、“花より美しいハナちゃん”の顔を見れないのは寂しかった。

改めておかんに、丹波篠山（たんばささやま）という遠方の地のことを勇輝は訊いた。

「ここからやったら、神有電鉄で三田に出て、そこから福知山線に乗り継いででも行けるし、そやな。姫路の北の方角にもなるから、そっちから行く方法もあるかも知れんな。かあちゃは行ったことないからようは知らん」「なんや。遠いんやな。姉ちゃんのあの仲良し友達、おらんようになってま

うのんかいな」

「…なんや悲しゅうなるわ。ハナちゃん一年生の時から通った学校やろ。何とかな。ハナちゃんだけは鈴蘭台に残してやりたいとお父さん言うてはったのに」と、登美子が言った。

「一家がそないなことになったら、大変や。うちはなんやかやあっても、こうやって一緒に暮らしてるんやから。まあ、その、なんや。勇もほんまは家に居て欲しいけんどな」

姉と勇輝の話に割って入ったおかんが口ごもりながら言った。

勇のことを口にする時は、おかんは辛そうな顔付きになった。

この前の船の遭難に遭遇してからは、出港前に一度だけ手紙が来たが、それ以後は機密事項なのか連絡はない。便りがないのが無事の報せではあったが、召集の赤紙も、何時来てもおかしくない状況下だったので、おかんの心中は穏やかならぬものがあつたはずだった。

すでに、兄は兵隊検査に合格し、待機組に登録されている身であった。

昭和十九年春三月、桜便りもまだ届かない日、姉の登美子は国民学校初等科を卒業し、鈴蘭台から北の地になる有馬の地にある学校の高等科に進学することになった。

学費免除の特典付きで選んだのだが、軍需用の衣料品を作る工場内にある臨時の学校で、この年の一月から実施されていた女子挺身隊の応募受付のために作られた国民学校高等科生でもあつた。資格は女子のみだった。

三月二十五日、春まだきの薄ら寒い日、登美子は小部国民学校初等科を卒業した。着古したセーラー服にもんぺを履いたこの日は晴れ着姿、久し振りに登美子はセーラー服を着た。

この時代、セーラー服は女の子にとっては立派な晴れ着なのであった。

登美子が家に帰ると、仲良し仲間の加賀美理紗と寺山花菜子の二人が待ち構えていた。二人には贈り物があつたのだ。薄紫色の花弁が愛らしいカタクリの花で作つた赤いリボン付きの、花束のブーケを花菜子が登美子にそつと差し出した。一緒に理紗も手を添えた。

「藤王登美子さん、卒業おめでとうございます。このブーケはうちら二人の心の花束です」

「うわっ、ほんまあ、これ、きれいなブーケになつてるんやんか。このカタクリの花、二人でブーケにしたん？うわっ、赤いリボンも付いてるう」

薄紫色のカタクリの花は百合の花に似た上品な花のかたちで清楚、その上、華麗さも備えていた。添えた赤いリボンもよく似合う。

ブーケは高さ十センチほどの花茎に切り揃えられていた。

丸い根っ子部分は新聞紙で包まれ、ゴム輪でしっかり止められ、蝶々結びの飾り付きの赤いリボンが巻いてあつた。

「ハナちゃんが徹夜で作ってくれたん。これ、ほんまの心の花束や」

「うち、嬉しかった。生まれて初めてのうちが作つたブーケやねん。お父さんに教えてもらうての第一作や。それに、ちよつとだけ残つてた貴重品

の赤いリボンもうちにくれてな。あないしてこないして、お花のブーケを作るんがうちの夢やったんやけど、もう、うちにはお花畑ないもんな。そやから、これが初めてで、それで、終わりのブーケになってまうんやないかと、思うと、ちよつと哀しかったけど、大好きな登美子姉ちゃんに、うちの第一作を上げられて、ほんま、うち、幸せ」

「アリガト。よう、出てんやんか。こんなん。もろうたんは初めてや。ハナちゃん、大丈夫や。花屋のハナちゃんの夢が叶う日も、きつと来るで。

女の子も夢を持ってないとかんで。な、自分の夢が叶う日を待ときい」

「そうやったらええけど、うち、小部国民学校の卒業生にかてなれんへんかも知れん。丹波の方に行っても、そないに、うまいこと、寺山花園の花、ちゃんと育つかどうかわからへんしな。育たんかったら、みんなばーや」

「そないなことばかり考えたらあかんわ。花屋のハナちゃんらしゆうないで。向こう行っても、ハナちゃんはハナちゃんや。な」

「うん、そやな、わかつたるう。花屋のハナちゃんやもんな。うち、そないするう」

やつと、花菜子が気を取り直した。

「この紫色のお花のブーケ。うち、一生、忘れえへんで。このカタクリの花、山ん中に入らんとないんやろ。この辺にはないもん。理紗ちゃんと二人で採って来てくれたんや」

「ハナちゃんのお父さんが、今年は春の来るのが早かったから山に行った
ら、カタクリの花がきつと咲いてるでって教えてくれたん」

くりくりした大きな目を見開くようにし、理紗が答えた。

おかつぱ頭が揺れた。

「ほんまはな。半分以上はお父ちゃんが手伝ってくれたんやけど。藤王
登美子ちゃんのためなら、よう、うちの花畑、手伝ってもらうたからお礼
もせんとならん言うて、うちより、お父さんの方が熱心やった。赤いリボ
ンはお父さんからの登美子姉ちゃんへの贈り物やで。そいで、花屋は花屋
や、なんとかしたる言うてな。この頃、ブーケの注文なんかあらへんから
て、母ちゃんも張り切って手伝おうてくれはった。二人ともえらい張り切
りようで、うち、なんや、登美子さんのお蔭で親孝行もしてしもうた」
「そないなことやったんや。うちも、ハナちゃんのお父さんお母さん、好
きやで。ほなら、お父さんお母さんにもアリガト、言うといて」

登美子が花菜子に心からの感謝の言葉を伝えた。その胸懷にはしつかり
と花束が抱き取られていた。みんなが嬉しそうに頷き合った。

「このカタクリの花、みんなあ、花言葉は知ってるう？」

花言葉にうるさい理紗が登美子に問うた。

「いや、知らん。きれいな花やから、乙女心の純情とかあ、憧れ心とかと
ちやうど？」

「まあ、当りやな。初恋、純情、それにな。嫉妬なんて言うのもあるんや

で」

「なんや、それえ、みんな揃うてしもうたら、もう、それって、宝塚の物語やんか」

これも、登美子がうまく話をまとめて見せた。花の仲良し三人組は、意気投合し、いつまでも、女同士の話に夢中になっていた。

その数日後、女子挺身隊の服装そのものもんぺ姿で、姉の登美子は鈴蘭台駅頭から、その工場のある有馬行き of 電車に乗り仲良しの二人の仲間に見送られて目的地に向かった。春まだしの一陣の山風も、走り去って行く電車を追い駆けた。まだまだ風は冷たかった。

もっと、有馬は鈴蘭台より奥地になるから、この街よりも、更に、山は深くなる。その山向こうへと、登美子は送り出されて行った。

第四章 向かう二軒両隣り

第四章 向こう三軒両隣り

1

昭和十九年の春四月のこと。

低く連なる山々の端にも、いくつも桜の花の色が点在していて、春景色ののどかさが鈴蘭台の街全体を包んでくれていた。

新学期、勇輝らは五年生に進級した。

連日、一人、二人と転校生があった。

空襲を受ける危険性のある地帯で、家屋が密集している地区では、延焼を防ぐために、建物疎開と称して、家屋の間引き作業が行われていた。

それで、住む場所を失った住民が、安全と思われた鈴蘭台近辺に転居して来るケースも増えていたからであった。

それも、最初は、官民関係者が多く、銃後の守りを固めるために必要な人材を持つ家庭が優先されていた。前々からある一つ鍬山辺の地にある憲兵隊公舎などもその一例で、他にも、軍需関係者や電力会社などの国策に沿った者の家族などが、この鈴蘭台地区には新住民として移り住んで来ていた。今回は、その子弟が、小部国民学校に多く転入して来たと言うのが、

新学期の転校生の数が増えた理由となっていた。五年一組でも、六人の転入生があり、狭い教室に、新たに木机が持ち込まれた。

「みなさん、銃後の守りはわたくしたちの肩に掛かっています。みんなが仲良くするのんが戦地の兵隊さんに対するわたしたちの務めなんですから、銃後の守りは一人一人がちゃんとやりましょう」

標準語で話すよう辺見先生は努めているようで、関西訛りは隠せなかったが、律儀な口調でお国の言葉をしゃべった。

これは戦果などを告げるラジオ放送が標準語だったので、国家を代表する立場にもある先生たちもその例に倣ったようなところがあったのだった。

開戦記念日の十二月八日の朝礼で、校長が天皇詔勅(てんのうしようちやく)を奉唱する時はもちろんのこと、戦局の重要性を語る際にも標準語は用いられた。新転校生たちがそれぞれの席を与えられ、その席に着いた。

みんな総じておとなしい。

「なんや、ぎょうさんやな。教室だけ、これやと、腹いっぱいになりよるう」
間の抜けた神戸言葉で権太が回りの者に囁いた。

その声は、勇輝も耳にした。

折しも、国民学校の校庭の隅では桜の花が、七部咲きに咲いていた。暖かな春の風が吹き寄せて桜の小枝も揺れていた。

今日ばかりは、心を和やかにしてくれる春の陽射しが溢れていて、みんなを祝福してくれているかのようだった。美しい桜の開花だった。

この小部国民学校は、終戦に至るまで戦禍とは無縁の地でいられることになるのだが、それもこれも、六甲の山懐に抱かれた地形によるものだった。疎開児童を受け入れられるのもこの地が地形的に恵まれた地であったからだった。実際、この年の七月には政府により、国民学校初等科児童の疎開が決定されることになった。

その前の一時期ではあったが、鈴蘭台の地は山間の地なので真っ先に疎開地と看做され疎開地の一つとなった。

新転入児童には一つの傾向があった。

みんな、言うなれば、都会のカラスで、その先駆けとなった羽鳥宏志と同じように、物持ちの家庭の者が多かった。

今時、珍しい革靴を履いている児童も二、三人いた。

戦災で家を焼かれる前にと、家財道具や身の回りの必需品を持ち出したらしく、古い物だったが、ランドセルを肩に負って来た転校生もいた。

去年の秋、柿の実を獲って食べられず、指を啜えて見ていた一つ鍬山の台地の下の一郭に、憲兵隊員のための公舎があった。

五軒長屋の平屋造りで、それほど、大きい建物ではなかったが、その一軒に、守田民雄と言う名の疎開児童の一人が入居した。

同級生としても編入された。

「へえー、あいつんとこ、憲兵隊かいな」と言うのが少年たちの率直な感想だった。軍隊では”泣く子も黙る憲兵隊“などと言われて怖い存在とさ

れた。司法警察の役目も負い、軍の規律秩序を維持、情宣活動なども行い、風評や流言などによる被害の取り締まりや、また、敵地に乗り込んだ際には、現地人の事情を掌握した上で、情報操作などをすることもその任務とされていた。

これらの仔細を、勇輝ら少年が知る機会は一切なかったが、ロシア人の館のその後の監視を怠りなく遂行するのも、この憲兵隊の任務の一つとなるはずだった。もちろん、このことと、同級生となった守田民雄の一家がどのような関係なのかは委細は不明だった。

ところで、同じ級になったあの守田の憲兵隊の公舎長屋に、勇輝と権太は遊びに行く機会を得た。おかんが働いている“たどん工場”ともその公舎長屋は近いところにあり、守田の母親と、勇輝のおかんは口を利く機会があつて、同級生同士、公舎長屋に遊びに来るよう誘われた。

今度は、白岩家のお屋敷に招待されると言った大袈裟な話ではなかったので、二人とも少しは気が楽だった。

「神戸の荒田んところの荒田国民学校にいたんやけんど、空襲になったら物騒（ぶっそう）や言うのんで、ここにお世話になることになってね」

小奇麗に、ひつつめ髪に頭をまとめた守田の母親は背筋も伸びて、どこか凜としていた。ひつつめ髪にするのは、この当時の髪型の習いで、軍国時代の風潮とも関係があつた。

もんぺ姿には変わりはなかったが、さすが、憲兵さんの女房、動作その

ものがきびきびしているように見えた。それでも、気さくなところもあり、子供にも話し掛けてくれるので、初めて訪れた二人は内心ほっとしていた。「荒田やったら、直ぐが新開地やし、あそこ賑やかなところから、ええよな」

「その前はな。六甲道の高羽(たかは)国民学校にもいたことがあるんや」

「そやったら、諏訪山(すわやま)動物園、この鈴蘭台よりはうんと近いよって、行ったことあるんや」

「うん、ちっこい時に、連れてつてもろうた」

「そやけど、空襲になったら、そのお、動物園かて、たいへんや。どないなるんやろな」

話のついでに、前に、加賀美理紗の仲介で、動物園に行った時のことを、勇輝は口にしてしまった。内心、しまったと思った。

あの時の園長の話では、猛兽を殺処分にする仕事の管轄部署は、憲兵隊と聞かされていたのを思い出したのだった。

とんだところで話がつながり、戸惑ったのだが、この話題はこれ以上には発展せず、正直な気持ち勇輝は内心ほっとした。

強制的な間引き、建物疎開で前の公舎住まいから追われて、この鈴蘭台にやって来たのだとも、守田の母親は説明をした。

「なんや。鈴蘭台って名、ええ名前やなて、下の子は喜んでるんや。女の子は、やっぱり、花の名が好きなんやね」

とも、守田の母親は付け加え、言った。そばには、おかつば頭の二年生になる守田民雄の妹の香代子が控えていた。

「花が好きなんやったら、そや、鈴蘭台にある花畑に連れてつてもろうたらええわ。同級生の、寺山花菜子ところは、花を作ってるねん。副級長の加賀美理紗に、話はつけたらええと思うで。あいつ、仲良しやから」

「そやったら、香代子、一回、連れて行つてもろうたらええわ。そないし
っ」

妹思いなのか、守田民雄が妹に言った。

「そやけど、どないなんやろ？寺山ところ、いま、なんや、もめとるんちゃうか。立ち退きになるんかも知れんしな」

真面目顔になり今度は権太が勇輝に告げた。

(なんや、これも、ほい、しもうたやな。ハナちゃんのところ、あれから、えらい話になったるってことは知ってるはずやのに)

頭を巡らせた末、勇輝は独りごちた。

「なんなの？その、揉めてるて？」

「いえ、そのお、ようは知らんです。あの、花はまだあるとは思いますが
けどね」

守田の母親の質問に勇輝はしどろもどろの返事をした。それ以上は守田の母親は質問せず、台所に引き下がった。

守田民雄が前にいた六甲道は、国鉄沿線の駅の名前であったが、勇輝に

も親戚の家があり、何度か、遊びに行ったこともあったので、この後、守田民雄が通っていた高羽国民学校の近くにある神社の境内にある樹齡何百年かの大楠の木の話が出たりして、結構、勇輝とこの少年とは話が合った。

夕方近くまで、守田の公舎長屋で二人は長居したので、帰り道には夕焼け空が広がっていた。一つ鍬山の、鈴蘭台夕陽ヶ丘で見る夕陽とも、位置的には同じ場所になるので、低い山の端に懸かる夕陽はほぼ同じものに見えた。カラスこそ、空には飛んでいなかったが、茜色に染められて行く西の空の色は、いつかの光景とは余り変わってはいなかった。

いや、鈴蘭台夕陽ヶ丘の思い出には、このあと、感謝すべき美しい話が一つ加わった。

「おお、この亀福権太、こんな、うまいもん、喰うたことがないで。わおっ、うまいーっ」

「一本、かぶりつきや。わいとこも、こんな、うまいもん、出されたことないで」

勇輝と権太の二人は、この時、手で一本掴みにして持った海苔巻きを頬張っていた。守田民雄の母親が、気を利かして、「もう夕方や。あんたらお腹減ったやろ。道々食べてお帰り」と言っって、彼らに手渡してくれたのは、いわゆる、「オコーコ巻き」と、関西では言われる沢庵を具にした細巻きであった。余りのうまさに、もう夢中で、二人は、オコーコ巻きにむしゃぶり付いていた。夕方だから、ぺこぺこの腹ぺこ状態、飢えている少年たち

には、これほどの馳走はなかった。

「うまい、うまい、みんな喰うてまうのはもったいない。今時、海苔なんてもんがあつたんやな。もう、長いこと、梅干の入った海苔で巻いたあ、そのお、握り飯なんかもやで、わいら喰うてないもんな」

と権太が口をもごもごさせながら言った。

ぱりぱり、ぼりっと、沢庵を噛み砕く小気味のいい歯音も返って来た。

「麦入りで銀シヤリではないけど、これは、ほんま、文句なしにうまいわ。こここの、町のカラスには無理や。やっぱり、都会のカラスもんにはかなわんな。あいつんとこの番地やけんどな。“鈴蘭台オココ屋いの一等地”にしとこ。うまいもん、喰わせてくれる食堂の名前としては悪うはないぞ」

また、勇輝が講釈を加え、番地名を付した。

「ええな、わいが一番好きなのは、もう間違いのう、オココ屋はんや。いの一等地ちゆうのんもうまいな。うまいもん食わせる、いの一等地、決まりや、これも、ええっ」

食い物の話になると、意気投合、舌舐めずりなどもしながら、二人は坂を下った。どうして、守田の家庭には海苔があるのだろうかと言う詮索の思いもあつたが、父親のいる家庭と母子家庭、この違いも大きいのかも知れないと勇輝は思った。

この日の夕陽はいつまでも山の端に沈まなかった。

のんびりと、空の果ての雲を染めて行き、その雲の余映をも空に広げて、夕陽は一日の終わりを楽しんでいた。

鈴蘭台駅の方角に出るには近道になる通称けんぺいたい坂を二人はゆつくりと下った。その背を柔らかな夕陽がゆつくりと染めた。

小さな二つの人影が、二人の少年の足元にやっと届き始めている時刻のことであった。

2

「なんや、隣保長の奴、そないな意地悪をしよるんかいな。そんなん、どうってことないのにな」

「うちの姉ちゃんが、ハナちゃんところから貫（もろ）おうて来た鈴蘭の花をな。玄関先の盛り土んところに植えたら、こんなとこに植えるんやないて、えらい剣幕で怒りよった」

勇輝が権太に説明をした話は、寺山花園での、その後の騒動とも関係があった。食糧調達のための菜園畑にするので、花園そのものを、更地にして町内会に引き渡せと言う強制話の決着はまだ付いていなかった。

この四月には、神戸市内でも食糧不足を解消するために校庭の菜園化が進められることになり、なお、立ち退き話の事態は悪化していた。

昨年八月頃に寺山花園の菜園化話は持ち上がったことから、もう半年

以上を経過しており、猶予を許さない状況になっていた。

姉の通っていた軍需物資を作る工場は、原料不足で一時休止の状態であり、授業の方も、先生の数も不足していたりで、姉の登美子は早々に一時帰休を許されて家に帰されていた。工場の寮に置いておくと、無駄めしを食われるので、家が近い者は返して寄越した。

鈴蘭台から有馬までは電車で小一時間、自宅に待機させるには、好都合の至近距離だと思われたふしもあった。ぶらぶらしていることで、姉の登美子はみんなに遠慮していたが、花の仲良し三人組は復活していた。

当然、登美子は寺山花園にも何回か足を運んでいた。

姉の話をもとめると、寺山花園では宿根草に多年草の移植作業、花などの球根栽培にしても、気候と土壌が植生にとっての条件となるので、手順が整わず、更地にする話は事実上、頓挫(とんざ)していた。

そんなこんなで、日一日と花畑を取り壊す話は伸びに伸び、今日に至っていた。何より、寺山花菜子の父親が心血を注いでいる新種のバラの作出についてはバラは贅沢花の烙印を押されていたので、バラの花用に作られている特製のガラス張りの温室も、無駄だから撤去するよう命じられていた。こればかりはと、寺山花菜子の父親は断固として応じず、移設話はこじれにこじれていたのであった。

この移設話には、隣保長の落合満次も加わっていた。

鈴蘭台地区も幾つかの区画に分かれていたので、向こう三軒両隣の隣

保組の単位は各所にあり、何人も隣の保長がいた。その中でも落合は隣保組織の総括責任者の立場にもあったから、影響力を持っていた。

すでに、勇輝の家の隣地にある植木屋の広大な土地はほとんどが更地にされて、ほんの一隅だけに、盆栽などの植木がまとめて置かれていた。

ここにも落合の力が及んでいた。

すでに、この春先から、開墾地には、サツマイモや、かぼちや、色々な野菜類の種なども撒かれていて、畝(うね)作りの畑地の一部には、もはや、植え付けた作物の新芽がところどころ芽を出していた。

落合にすれば植木屋の土地を提供させたのは自分の力、それに比して、他の隣保組織下にある花園の方は、未だ、手付かずの状態、落合の態度が大きくなるの当然であった。

やがて、初夏になろうかと言う五月上旬の日のこと。花を巡っての諍(いさか)いごとが、隣家との間で起きた。

姉の登美子が隣家との境界線にもなる玄関口の小さな土盛りがされた場所に、鈴蘭の花を移植したことが諍いを呼ぶことになった。

そもそもの起因は、鈴蘭の花に関する悶着話にあった。

その話に登美子も巻き込まれることになったのだが、その話の伏線は、村八分とも言えるこの街の寺山花園への対応の仕方にあった。

今年も、花菜子の父親は、この地の象徴の花である鈴蘭の花を、いつもの年のように鈴蘭台駅構内の一隅に展示するべく、釣鐘型の可憐な白い花

を持ち込む用意をしていた。

ところが、この鈴蘭台の街で、また、鈴蘭の毒の問題が再燃され、一騒動が起きた。今年は駅側までもが、展示を拒否した。

花園の主、寺山実朗の善意は無視されることになった。

花の茎や葉などにも毒があり、触るだけで、手が爛（ただ）れると言うあの妙な噂話が再燃されていた。この話は、瞬く間に隣保仲間などにも伝わって、空恐ろしい風評となつて、この小さな街に伝播（でんぱ）した。

そんな知識を誰が持っていたのか、その噂の元は誰なのかも知れなかったが、まるで犯人探しのような話までもが飛び交った。

権太の父親がやっている理髪店にも、色々な噂が持ち込まれた。

何もかもが鈴蘭は毒なのだから、あそこの花園は立ち退きさせても土そのものに毒があつて使用不能の噂も飛び交った。その挙句に、立ち退き話を無為なものにするために、この噂は、寺山実朗本人が流したのではないかとと言う話までもが、巷では、まことしやかに伝えられるようになった。

つまりは、保身のために、毒の話を寺山実朗自身が持ち出したと言う穿った説までもが、この小さな街には罷り通っていたのだった。

そんな噂には関係なく、姉の登美子は花菜子のところから、鈴蘭の花を一鉢、貰つて来て、玄関脇の小さな庭先に根を下ろさせ、植えた。ユキノシタやアザミなどが生えていたが、手入れするほどのこともなく、普段は、

両家とも無関心のそこは庭地だった。

そのわずかに土の盛り上がった庭地の一部、自分の家の側に、鈴蘭の花鉢を置き、登美子は飾り立てたつもりでいたのだが、これが隣家の頑固おやじの逆鱗に触れたのだった。

初めに、ケチを付けられたのは、おかんで、「どっちの地所でもないところに、けつたいなもんを置くやない。なんや、花を飾るなんてのはな。少国民のするこっちゃ。お前ら、ええかげんにせいよ」と、怒鳴り散らされた。

何しろ、鈴蘭の花鉢を自分の家に持ち帰ったぐらいで、人一倍、鈴蘭の話には登美子は関心を持っていたから、このイチャモン話に登美子もまた大いに怒った。このあと、鈴蘭の花を巡って、藤王一家にも思わぬ災難話が降り掛かることになった。

相手は隣保長、藤王一家はこの宿怨のある男と一戦相交えることになったのであった。

3

事の発端は、鈴蘭の花を巡ってのことであったが、この問題が起きる前にも、隣家の隣保長とは揉め事続きであった。

配給物資の不公平な分配の仕方について抗議したら居直られ、逆におかんは怒鳴り散らされたとか、隣地の植木屋の地所を開墾する際も力仕事か

出来ない」と女手家族を非難し、足手まといだと嫌味たっぷりにも言われた。

その他にも、隣保会議に余り顔を出さないのは愛国心に欠けるから問題だとか、言い出したら切りがないほど、隣保長の男は、おかんを目の仇にして、横柄な口を利いた。

衣料品が不足しているので割当制の衣料切符が配布されていたが、配給切符はあっても、現金がないと欲しい物も購入出来ないので、食糧調達のために一部はおかんは農家で食糧と交換した。

どこからかその不正話を聞きつけて来て、横流しはならんと文句も付けた。そんな日常の不満が貯っている矢先も矢先、隣保長が玄関先の庭地に置いてあった鈴蘭の花鉢を片手に、家に怒鳴り込んで来た。

「お前のところの小娘はおるか。こんな、毒のあるもんを玄関先に置きよってからに」

いきなり、玄関の扉を開けて隣保長は乗り込んで来たのだが、この時は、姉の登美子と勇輝しか家にはいなかった。

登美子が隣保長の相手をした。

「なに言うてんのん。毒がどうて、なんよ。そんなん、問題なんかあらへんよ」

「あほぬかせ、ほなら、この花の茎でもしやぶってみい。たちどころに、ころっや」

「わざわざ、そんなことする人はおらへんわ」

「なんや。口の減らん小娘やな」

玄関先で揉め事が続いている最中におかんが帰って来た。

大きなかぼちゃ頭が後ろを振り返った。

振り返るなり、改めて、この禿頭男は、怒鳴り声を上げた。

「おらあ、非国民一家がつ。毒の種を撒き散らしよってからに。なつ、いま、この小娘にそう言うて聞かせとったところや」

「毒つて、何を言うとするんか、よう、わからしません」

「あいな。鈴蘭の毒や。なあ、花屋の寺山んところからもろうて来たもんやろ、これは。なんで、うちの前に、こんな毒花があるねん。物騒やから、わしが処分したるっ」

「そんなん、それ、うちのもんやから帰して下さい」

登美子が必死になり訴えた。危険を察して、おかんが登美子を庇い前面に立った。一層に血相を変え、隣保長が我鳴り立てた。

その手にした鈴蘭の花鉢がぶるぶると震えていた。禿げた頭からは湯気でも出ているのか、顔中が赤くなり眉までもが逆立っていた。

と、その途端に隣保長は登美子の肩先目掛けて鈴蘭の花鉢を投げ付けた。ひよいと、登美子は避けたが花鉢は畳の上に転がり壊れた。

その破片と花鉢の土が畳一面に飛び散った。

投げ捨てられた鈴蘭も根っ子が剥き出しになり、畳の上で無惨な姿を晒(さら)していた。

「わかったか。このあほんだら一家が。ええか、少国民に非国民一家や。どもならん。お国のために命を投げ出ししてる兵隊さんに、みんなで謝ってもらわんとな。ええ、お前ら、謝れや」

言いたいことだけを居丈高(いたけだか)に告げると、隣保長の男は肩で風を切るように両肩を怒らせて、玄関口から出て行った。

肩と肩を寄せ合っておかんと姉の登美子は泣き出した。

「おいおい」と声を出し泣いた。

「ほんま、女の家や思うて、うちや、悔しいわ。あの男、馬鹿にしよってからに」

大好きなおかんと、姉ちゃんが二人して、肩を震わせ泣いている。

ここは、もう、愁嘆場だった。勇輝だって少国民扱い、男として扱われていなかった。一家は侮辱されていた。

おかんの悔し涙に濡れた顔を見た時、咄嗟のこと、勇輝はあたりに飛び散った花鉢の破片を手に掴み取っていた。なぜ、そうしたかは分からない。

勇輝はその破片を手にしたまま、表に走り出していた。裸足のままだった。

あとのことは、どうなったのか。なぜ、そうしたかも分らぬままに、勇輝は隣家の玄関扉のあたりを目掛けて、花鉢の破片を投げ付けていた。

がっちゃん、がらがらっ、ガラスが碎ける派手な音が返ってきた。

見事に破片は命中していて、格子枠に張り付けられていた玄関扉のガラスの大半は下の土間の三和土(たたき)の上に飛び散っていた。

その大事の結果を見届けた瞬間、勇輝自身もびっくり仰天し、慌てふためいた末、逃げ場を失って家の中にと駆け入った。

「こらっ」

隣家のおっさんの怒りの声が轟き渡った。と、思う間もなく、あのかぼちや頭の隣保長が玄関先に姿を現わしていた。

おかんと姉の登美子はその場で押しつけられ、その奥の部屋に逃げ込んでいた勇輝は、たちまちの内に、首つ玉を捕まえられていた。

「このガキが。なにしたんや分かつとるんやろな。来い。こないなったら、わしや、絶対に許さんで」

小さな体が手玉に取られていた。二、三度、畳の上に投げ出された後、再度、首根っこを掴まれて、そのままに玄関の方へ体ごと勇輝は引き摺られた。もう、抵抗のしようもない。

「悪いことした奴はケイサツや。駐在所に連行したるつ。来い！」

大層な剣幕なので、誰も防ぎようがなかった。

ずるずると、玄関土間まで引き摺られた。やっと、おかんが勇輝の片足を捉え、そして、登美子がもう片一方の足を掴んだ。

勇輝もばたばたと手を動かし、一生懸命に逃げようとした。

この騒ぎは、向こう三軒両隣りにも伝わっていて、顔を出す者もあり、これ以上のことは大人げないと思ったのか、隣保長は玄関先に勇輝を放り投げたままで、隣家へと戻って行った。

「えらいこっちゃ、勇輝、あんた、えらいことしよったな」

助け起こしてくれたおかんだったが、真実、困惑しているふうの表情になつた。

「あんな奴、あれぐらいのこと、してやったらええねん」

姉の登美子だけは意に関せず、依然強気の言を吐いた。鈴蘭の花ごこと、土や花鉢も、まだ、畳部屋のあちこちに飛散していた。

「こりゃ、あかんで。かあちゃん、たどん工場、辞めさせられてまうな。

あいつ、あれでも、社長で工場長なんやからな」

咄嗟のこと、(しまった)と勇輝は思った。

何がしかの労賃を得ているから家計はまだ持っているのであって、その労賃がなくなればと思うと、敵討ちの本懐を遂げたと言う類いの話ではなく、それどころか、相手の首を獲る話が、これは、獲られる話になつていることに勇輝は気付かされていた。

自分のやったことの重大さに気付き、もう家には居ずらくなり、ぼろ靴を足に引っ掛けると勇輝は表に飛び出していた。線路際の道を走ると、駅前に出た。駅前通りにある亀福散髪店の看板が目に入った。

結局のところは権太の所に、勇輝は逃げ込んでいた。

大きく肩で息を吐いていた。

「どないしてん？血相変えてからに」

「わい、わい、もう、あかんねん」

「なにがや。なんねん？どないしたんや」

取り敢えず二人は店先を出た。二人が行くところは決まっていた。

“鈴蘭台登り坂台地”の台地にある草っ原がひとまずの勇輝の隠れ場所となった。神有電鉄の高架下を抜け中山たんぼの方角に向かう途中地点に、この“登り坂台地”はあった。もちろん、この名を付けたのは勇輝自身、こここの急坂は通称登り坂で通っているのでその地名とも合致した名を付けた。春先などはうたた寝などにもいい場所の草っ原なのだが、今はそれどころではなかった。やっと、この場所に二人はやって来た。

二人は草むらに座り、事の次第を語り合った。

悪いのはあの禿おやじと、二人の話は合ったが、だからと言って、子供のこと、悔しさをぶつける法はなく、報復だって出来るわけがなかった。

権太も一緒になって悪口を列ねたがそれで気が晴れるものでもなかった。

「そや、勇輝、はげちゃびんの歌を歌おうや。な、禿の歌やったらなんぼでもあるで。あいつを、思いつ切りな。二人で馬鹿にしたろ」

と、権太が提案したので、二人は声を揃えて、“尻取り歌”を歌うことになった。報復するにはその方法しかなかった。

♪さよなら三角 また来て四角 四角は豆腐

豆腐は白い 白いはうさぎ うさぎは跳ねる 跳ねるはノミ ノミは赤

い 赤いはほうずき ほうずきは鳴る 鳴るはおなら おならはくさい

くさいはウンコ…♪

とまで歌った時、勇輝の和唱の歌声が急に消え入りそうに小さくなった。尻取り歌を歌っている内に勇輝の両の頬に涙が伝わった。今頃、悔しさが募って来て、思わずのこと、勇輝は胸が締め付けられたのだった。

♪…ウンコは黄色 黄色はバナナ バナナは高い 高いは電気 電気は光る 光るはおやじの禿げ頭 ぴっかぴか ぴっかぴかっ ピッカピカ…♪

いつまでも、二人は「ピッカピカ」を繰り返していた。

勇輝の涙は止まらず、いまは、しゃくり上げ、両手で目を覆いながら、一生懸命に悔しさに耐えていた。

「なあ、勇輝、元気出しいや。わいも一発咬ましたるさかいに。な、あんな禿げおやじ、なにいうてまんねんひやくまんねん、や」

と、権太は言い、得意の“まんねんもの”とやらを披露に及んだが、二人とも意気は上がらず、草っ原に向かって立ち尽くしているだけだった。

冷たく風が吹き抜けた。

この事件の後、隣保長は小うるさくあれこれは言わなくなったが、おかしな顔を出しづらくなつてたどん工場は辞めたので、失職、そして、勇輝一家の玄関のガラス扉は、そっくりそのまま、隣家の玄関格子に移し変え

られた。ガラス職人にこの仕事は依頼したので予期せざる出費も強いられた。勇輝の家の残された玄関扉の格子には、張り替えガラスを買う金もないので障子紙が貼られた。これから数年、この状態は続くことになった。何にしても物資不足、他家でも、障子紙が用いられている例はいくつもあった。これで、一件落着。“やったー石投げ少年勇輝”と、回りに吹聴したい思いも実は勇輝にはあったが、この話は、勇輝と権太の友情間だけでの自慢話としてのみ通用した。

4

「なんや。そんなアホなことあるんかいな。赤紙なんて、勇は、もうちゃんとお国のために船に乗っているやないか。だいいち、あの子はうちにはおらん。どないすればええのや」

勇輝が学校から帰ると、おかんが一枚の赤紙を手に握り締めて途方に暮れていた。地区の役場の兵事係の男がやって来て、兵役待機組であった兄のところへ、「召集令状を持ってまいりました。おめでとうございます」と、決まり文句を告げて帰ったばかり。

戦局悪化とともに、すでに、前年、昭和十八年には徴兵年齢を一歳引き下げる決定が為され、また、満十七歳未満は志願なら入隊が可能とされた。

少年航空兵なら、十五歳で志願入隊が許される時代、総動員体制が敷かれ

て、戦局は急を告げていたのであった。

「五日後には浜田連隊に入隊せなならん。そやけど、本人はここにはおらんので」

おかんが恐れたのは、指定された日時に出頭しなければ徴兵忌避で軍当局から指弾されると言う事実があったことだった。

「えらいこつちゃ。そやけど、どないして船の上の勇と連絡をとるのんや？」

やっと、おかんは一計を思い付いて郵便局まで足を運んだ。

その矢先、勇本人からの至急電報を郵便局が受信し、おかんは郵便局でその電報文を受け取った。『いえじ かななしちよくせつにゆうたい いさむ』—『家時間無し直接入隊勇』の二十字が送られて来た。

どのような通達方法で応召の報せを受けたのかは不明だったが、近隣の者たちに送られて戦地に向かう壮行会もなく、兄の勇は単身島根の浜田連隊に指定された日時に入隊を果たすことになった。その日、隣保長の落合が家に挨拶に来た。勇の出征話を地区の役人から通達されたらしく、礼装のつもりか、新しい国民服を着用、ゲートルまで巻いていた。

その場には勇輝は立ち会っていなかったが、おかんと姉の登美子は、勇輝が家に帰った後、その話の続きをした。勇輝も側にいた。

「あの男、ご立派な出征おめでとごございます。息子さんもこの晴れの日を心待ちにしておられたことでしょうて、そんなん、誰も心待ちになんか

してえへんわ」

「そやけんど、みんなで送って上げられんてことは、どないなんやろ。兄ちゃん、近所の人にも挨拶してからと思うてたんとちやうかな」

と、姉の登美子が口を挟んだ。

結局、姉の登美子是有馬の軍需工場兼用の国民学校高等科は辞めて、鈴蘭台小部尻の地にある結核療養所の炊事係の下働きの職に就いていた。

たどん工場の仕事を失ったおかんに代わって収入を得なければならず、これも一家としては止むを得ないことではあった。

「そやな。勇はこの間のこと知らんよってにな。うちの玄関扉は障子張りや。貧乏所帯が余計のこと、貧乏くそうなってもうたな。勇、このボロ家の前でみんなに出征の挨拶をしたかて、かつこうが悪いやろからな。このボロ家や。そのお、挨拶なんかせんでもええて」

そのおかんの言い草を耳にして勇輝は小さくなった。両膝を立ててその上に首を乗せていたのだが、肩を竦め、貧乏揺すりもした。

(わいのせいでこないなことになったんやからな。がっちゃんがらからや。ほんま、あれでおかんも仕事にいけんようになったんやし)

申し訳なさそうにしている勇輝の顔を見て、今度はおかんが励ました。

「なあ、勇輝、あんたは男の子や。男の子やから落合の奴に石を投げたんやろ。勇がずっと家に居(お)って、あないなことになったら、石を投げ

たかどうかは分からんけど、落合の奴の首つ玉ぐらいは掴んで、結構、

やっていると。そや、やっつけてるわ」

「そうやて。うちかてやったらか思うたぐらいやからな。花の心が分からん男はんは、みんな女の敵やで。そや、勇輝、いつも姉ちゃん、言うてるやろ。アレはあれ、ソレはそれでコレはこれて。な、気にせんとときい」

と、登美子が勇輝を励ました。

「そやけんど、どないなんやろ。召集令状が来ると、男言うんは、みんなこれで肩身の狭い思いをせずに済みましたとか、銃後のみなさんを守るために立派に戦って参りますとか言うやろ。やっぱり、勇ましいところがないと、なんや、男ってやって行けんもんなんやろか」

「男の意地やろ。みんな、無理してん」

「軍国の時代やからな。男は元気でないと、やっぱり生きてはいけんのやろな。兄ちゃんかて、入隊してなよよしてたら上官に張り倒されてしまいうもんな。元気がもうても元氣な振りせんと軍隊では特に生きてはいけのやろな。そないな時代や」

軍国時代の風潮に馴化(じゅんか)されたいわゆる軍国の母、おかんも、そのことを、この時は、強く意識せずにはいられなかったのだった。誰しもが国家への忠誠を誓うことを強いられていた時代であった。

兄の勇は無事入営し、このあと、何回か、兄は律儀に軍隊から葉書を寄越した。その文面は硬かった。

「軍務に精励、日焼けし遅しくなった黒い顔をみんなに見せてやりたい」

とか、「一日感謝し、一日お護り下さる事を神に祈ります」とかの、常套の文句が列ねてあった。軍隊では検閲があり、検閲の印も押されていた。情に流れる文面は許されないのです、どうしてもお決まりの文句になるものであった。だが、葉書の末文の短い文句には兄らしい工夫もしてあった。「朝五時半、夜は八時半、郷里に向かひ一日感謝し」とか、「みんなの家の方向に向かひ、一日をお護り下さるやうに拝禮を行つてゐます」と、家族への思いが綴られていた。

この時期、すでに、戦局は急を告げており、銃後でも、休みのない国民生活を推進するため、「月月火水木金金」「欲しがりません勝つまでは」の戦時スローガンが国民の口の端に乗り、そして「鬼畜米英」の過激な文句も罷り通っていた。

小部国民学校の校庭も全国菜園化活動の名の元、五年生、六年生が狩り出されて耕作が行われ、さつまいも、南瓜などの種が植えられていた。

当時の新聞写真では、情宣活動のために、スコップを肩に負って行進する少年たちの列が写し出されたものや、「南瓜をつくりませう」のスローガンの旗を掲げて行進する女子挺身隊の勇ましい姿も掲載されていた。

「こんなに多うなつてしもうて、えらい、小部国民学校も大繁盛やな。わ

いらの級にも十数人やで」

いつもの帰り道、権太が勇輝に言った。

「下級の級なんか。丸々、級を一つ増やして級が一遍に二つにもなったんやねんで。それで、先生、足らんもんな。神戸の学校にいた先生で、用なしになった先生の何人かはこっちに来て、教えるねんで」

「そないなことしたら、わいら、余計に喰うもんがのうなってしまうで。イモに南瓜ならまだええけど、この頃は、なんや、高粱（コーリヤン）の粉まで食わされるんやもんな。ばさばさで、ごつつうまずいで、あれ」

権太が言う通りで、高粱は満州の遠い地から送られて来るらしい唐キビの一種。小粒で赤味がかった色をしており、煮ても焼いても食えない代物、ふかし団子にしたりするのだが、腹へこの子供でも喜んで食へなかつた。

もう初夏を思わせる五月のある日。

勇輝と権太の二人は、マリお婆さん直々の招待とやらを受け、この日、勇んで、羽鳥宏志の家にと遊びに行った。

神有電鉄の鈴蘭台駅から三田、粟生方面に向かう支線の途次、最初の踏み切りを渡ると急な坂道があり、直ぐの場所の右手、丘の上にあるのが、あのヒカル子お嬢様が住む“鈴蘭台天空城第一番地”となる。

更に、坂道をどこまでも上がって行くと、宏志の家がある林間の一带となるのだが、この前来た時には、つい先の駅名はダンスホール前駅だったのに、敵性言葉と言うことで、この単線車線の駅名は、すでに、戦時下、

小部西口と改められていた。

「あんたら、はようお出で。今日はな。うちはバラお婆さんや。ほらほら見てみい。庭先にバラの花が咲いたで。きれいやろ。そやそや。バラの花にはトゲがあるさかいに、あんたらも、取り扱う時はな。気い付けなはれや」

庭先に出て迎えてくれたマリ婆さんは、至極ご機嫌、もちろん毒舌も健在だった。それもそのはず、バラの木は寺山花園からもらい受けたもので、廃棄処分されるはずのバラが、子供たちのルートで移植されたのだった。

呼ばれて、駆け寄ると、赤や白や黄色のバラの花が一塊り、庭の一隅で咲き誇っていた。

「みんなのお陰や。“命短し、恋せよバラの花”やなあ。バラの花はこんなにきれいに咲きましたってみんなに訴えているんや。このマリ婆ちゃんかて、このきれいなバラの花にはな。一生懸命、恋しているところや」

もう、いきなりのマリ婆さんの攻撃に、勇輝も権太もたじたじとなったが、マリ婆さんは、間髪を入れず、第二弾も放った。

「そやそや、宏志から頼まれてたんやけんど、あの、“すみれの花咲く頃”の歌の第二節、このバラの花に囲まれてな。みんなに披露するんが、いちばんええんやないかとさつきから考えていたんや。付け加えておくとな。

うちかて、神戸にいてる時は大の宝塚ファン、この歌を歌う資格はおおあ

りやど」

「お婆ちゃん、それやり過ぎないかと思うけど、そやけど、このバラの花は、わいの同級生のみんなが贈ってくれたもんやし、感謝の意味やったら、ええんとちゃうか」

と、また、宏志が大人ぶった口を利いた。

「そやな。あれから須磨の家、やっぱり、家の強制疎開を受けてもうてな。家も庭もなんものうなってしもうた。そうやなかったら、今頃は、赤の紅牡丹、黄色の黄金とか、それに乳白色系の銀月なんかも、きれいな花を咲かせてたやろな。それにな、寺山さんところのお父さんが作出した白君影、あれも根付いて、小さな白い花を咲かせてたから、今年はもつと一杯花を咲かせてくれてたやろしな」

ちよつと悔やんで見せたが、マリ婆さんのバラの花の話はこの後、絶好調となった。バラの花が咲く庭に囲まれて、余程、嬉しかったのか、多弁になった。挙句に、マリ婆さんは、吟遊詩人の一人にでもなったような気になり、お気に入りのバラの詩をみんなに披露した。

「バラなる花は 恋の花　バラなる花は 愛の花　バラなる花は 花の王
て言うんや。これ、ギリシャの詩人アナクレオンの詩でな。紀元前六世紀頃の作なんや。みんな、分つたるうか。それぐらいの大昔から、バラはみんなに愛されて来たってことなんや」

何匹ものミツバチがバラの花の蜜を求めて飛んでいた。

ぶんぶんと羽音を鳴らしている。

勇輝と権太は感心した顔付きで、マリ婆さんの詩の朗読を聞いた。

「なあ、お待ちかねやで。バラもええけんど、“すみれの花”も頼むわ」

マリ婆さんと宏志の息はぴったり合っているようだった。

「よっしゃ。一世二代の大芝居がもう一つ、残ってたな。ほな、行きまっせ。“すみれの花咲く頃”の二番や」

ぱちぱちぱちと宏志が手を叩いたので、慌てて、勇輝と権太の二人も手を叩いた。

♪花の匂い 咲き 人の心 甘く香り 小鳥の歌に 心踊り 君とともに
恋を歌う春 されど恋 そはしぼむ花 春とともに 逝く すみれの花咲
く頃お…♪

「婆ちゃんも、昔は大の宝塚ファン、なあ、鈴蘭台の仲良し花の三人組の宝塚ファンとも、婆あちゃんとなら話が合うやろな」

と、この場を宏志が繕った。勇輝も権太も、“すみれの花咲く頃”の歌を聞かされて、やはり、どこか、その顔付はにやついていた。

「そや、勇輝くんのおねえちゃんらも、ここに連れて来てくれたら、もう、いっぱい、花の花組の花が咲くでえ」

マリ婆さんが女同士の話に花を添えた。

「青砥百合花とも、ほんまは、お婆あちゃん会おうてみたいねんで。そい

から、鈴蘭台とは縁のあるあの大スター、鈴代蘭香の舞台は見たことがあるねんて」

と、宏志がマリ婆さんの気持ちを代弁した。

「まあ、みんな、うちの大舞台のあととはな。家に入って大茶会や。楽しんでやりまひよ。宝ジエンヌの話も、続きがあるで」

それで、みんなは家に入り、お茶の間でくつろぐことになった。

マリ婆さんは浮き浮きしていて、至極、ご機嫌だった。

どこから買い入れて来たのか、元々、家にあつたのか、ラムネの壺が三本用意されていた。この頃の値段だと一本三銭、のどが渴くほどの陽気だったので、ラムネの栓を抜き、一気飲みをした時、三人は目を白黒させた。

うまい角度で呑まないと、壺の口にラムネ玉が引っ掛かり炭酸水の出が悪くなるのだが、三人とも、一気飲みを上手にこなした。もつとも、久しぶりのことで、勇輝も権太も、このあと、しばらくゲップばかりした。

「あいな。男の子には、宝塚歌劇はあんまり関係がないと思うてるやろうけど、男の人でもえらい大ファンの人はおるんやで。宝塚に住んではる代々のお医者さんの一家でな。お嫁さん貰うのんも宝ジエンヌ、一家中が宝塚なん。それにな。戦争前なんか、フランスの水兵さんたちが大の宝塚ファンでな。“モン・パリ”公演の時はもつと大変で、一番前の席に水兵服姿の若い水兵さんがずらーと並んで、ま、ちよつとした見ものやったで」

「なんや。いつもの話になってしもうたな。男はやっぱり宝塚の話、苦手

なんとちやうか」

「そうやった。そうやった。ほな、この前の話の続き、西洋音楽のジャズについて、ひとくさりして上げよか」

「どない思う？退屈やったら、わいの部屋に行ってもええねんで」

「ほないなことない。わいら、お婆ちゃん大好きや。こんなおもしろいお婆あちゃん、どこにもおらへんもんな」

「そか、そか。あいな。宏志から聞いたんやけど、藤王勇輝くんは番地を付けるんがうまいて話も宏志から聞いててな。そいでえ、うちの番地も考えたんやけど。どやろ。えらい山の中に来てしもうたから、うちや、山姥（やまんば）気分や。そいでな。ここはな。鈴蘭台山姥番地で付けましたんやが、そないに、呼んでくれますやろかな」

「やまうんば番地？そんなんでええんですか？山姥ゆうたら、なんや、怖いもんなあ」

「なにを言うてはりますのん。可愛い、山姥かて居りますのやで」
それで、勇輝も納得した。

和氣藹々（わきあいあい）の半日をみんなは過ごしたが、マリ婆さんは勇輝の兄の出征話を聞き付けていて心配もしてくれた。現地応召されている宏志の父親の話が出た時に心配口調で応じてくれたのだった。宏志の父親は無事を報せる手紙は寄越したが、その所在は確かではなく、中国の奥地満州にでも行っているのやも知れないという話だった。

あくまでも五月の空、どこまでも抜けるように青い。吹く風だって心地良くて、部屋の中にもいつまでも籠もっているのは惜しかった。

三人は表に出た。

彼らの目線の先にかぶさる新緑の山々は早緑色で今にも匂い立つかのようだった。宏志の家の裏手にある小さな物置倉に、つばめが巣を懸けており、巣作りに余念のない親つばめが少年たちの目先を掠めて、低空飛行をして見せた。「ぴぴっ、ぴぴゅっ」と鳴く。

野の草も丈が伸びて来ていて、野っ原にも、あちこち、草丈の高い叢が見られるようになった。黄色い蝶も野を這うように舞っていた。

ものみな萌え立つ初夏の季節、ゆっくりと自然は巡っていて、ここには、どこにも戦いの場を思わせるものは見当たらなかった。

だが、長引く戦いのために、この時期、誰しもが疲弊していた。氣息奄々（きそくえんえん）、銃後を守る者たちも、敗色濃厚な戦いとなっていることに、すでに、薄々と気付き始めていた。そんな時代にもなっていた。

「そやけんど、宏志の婆あちゃん、何でも物識（し）りやな。世の中のこと、みんな分ってるみたいや。そやから宏志も頭ええんやな」

勇輝が感心したような口を利いた。

勇輝や、権太と違って、少し、宏志は背も伸びて来たようだった。

その分、大人っぽくもなっていた。

外まで送りに出た宏志が、帰り際に、勇輝と権太の耳に、別の替え歌を

吹き込んだ。

「今日は替え歌はなし」と、他の二人に勇輝が告げたら、その分なのか、宏志がその代わりの役を果たして、別の替え歌を口にしたのだった。

『うちの婆あちゃん、ええ度胸してるけど、なんや、お前らには遠慮したんやな』と言う注釈付きの、それは替え歌だった。

軍歌の替え歌も、この時代、人の口には乗っていた。

その一つを宏志が二人に教えて聞かせた。

どうやら、それは、マリ婆さん直伝の替え歌のようだった。

『♪ニホンの軍隊 夜店のバナナ 買(勝)った 買(勝)ったと またま

(負)ける♪』

もちろん、宏志は小声で囁くようにして歌った。

少しは引け目を感じてはいたらしい。

『さあ、買った。買った。バナナ屋、口は悪いが腹はいい。これが名物沢市バナナ、さあさ、今日はバリバリ売っちゃうよ…』の台詞で始まるバナナの叩き売りのこれは台詞。

夜店や露店の縁日ではお馴染みの威勢のよかったこの叩き売り、もはや、この時代にはなかったが替え歌だけは健在であったのだ。

「そのバナナ屋の話も秘密やな。わいらの秘密う。そや、マリ婆あちゃん

は前からわいらの秘密仲間やったな」

そう勇輝が宏志に言葉を返したので、宏志は安心したように笑みを返した。両手を天に向けて突き出すと、権太は、「三人組にもう一人仲間や」と、マリ婆さんや宏志を鼓舞(こぶ)するような気の利いた台詞を、珍しく口にした。宏志がなお嬉しそうな顔になった。

6

疎開児童だけは一挙が増えて学校全体は騒々しくもあつたが、その分町のカラスや、村のカラスの色分けも、何やら怪しくなって、新参の都会のカラスも、数の分だけ幅を利かせるようになった。物持ち家庭であることと、都会から来ていると言う意識、優越感、彼らには妙な差別化の空気もあるようで、田舎暮らしに馴染まない者も多くいた。

もつとも、田舎者は田舎者で、何かにつけて、泥臭い面もあり、自分たちの地に紛れ込んで来た連中と言うように都会者を見ているところもあつたので、ズレが生じてしまうのは、これは止むを得ないことではあつた。

そんな中での夏休み、それでも子供たちは元気一杯であつた。

全国の夕刊紙がこの年の三月には紙不足で廃止、宿題を出すにも用紙は節約、お陰で子供たちは宿題地獄からも解放されていた。

遊ばない術(て)はなかった。子供たちにとっては天下の夏休みだった

が、校庭は大部分が菜園になっているから集まって遊ぶ場所もない。

それで、どうしても集まるのは、川や池、それに、草っ原、山の中、勝手知ったる土地の内となるので、夏休みの遊びは地元の子供たちが絶対に優位となった。

「いっぱい、泳いでこまして、真っ黒け、わいは海軍さんに行くんやから、泳ぎの名人になるんや」

「素手獲りやで。モリなんかいらへん。魚ちゅう魚はみんなわいが捕まえたるう」

こんな勇ましい台詞を吐いているのは地元の少年たちに限られる。「海国日本」「国民皆泳」の国を上げての鍛錬目的の奨励文句も、この時代、少年たちの耳には入っていた。

この山の中まで足を踏み入れること自体が大変で、六甲山地のこと、イノシシだって出没するので山に入るのは危険でもあった。

泳ぎに自信の悪童たちが集まって来るのは、中山たんぼを分け入った地にある通称南谷の池だった。ここまで来るには鈴蘭台の街からはかなりの急坂を上って来なければならず、また、たんぼ道を三、四十分は歩かなければならなかったので、菜園作りに熱心な街の連中も、さすがに、この地まではやって来ず、この地は手付かずの状態で残されていた。

南谷の池は周囲が百数十メートル、水深が五、六メートルはあると思われる大きな池で、池としては、小鮒釣りや鯉釣りなどにも適していたが、

夏ばかりは泳ぐ場所として子供たちに解放されていた。

もつとも、深処の場所があるので、「あの池には行くな。河童が出る」と、子供たちに普段から注意をしている親もいた。

それだけに、泳ぎに自信のある少年たちが集まる池ともなっていた。

「村のカラスの野郎に負けんように気張っていかんとな。町のカラスなら、わいが一番や」

南谷の池の端に立った時、権太が身震いをした。

小部国民学校専用のプールのようなもの、それも、泳ぎに自信のある連中の選抜チーム、露骨な対抗意識はここではなくなり、水浴びを楽しむ夏の少年たちだけが、この南谷の池ではお互い覇を競う傾向があった。

「おおっ、三吉、おまえ、体はひよろい分、抜き手をやらせたら、いちばんやな」

頭から水を滴らせ、池から上がって来た三吉に権太が言った。ここでは敵も味方もない。

「息をな。どれだけ、吸わんと潜れるかが、まあ、勝負やな。一直線の竹ヤリ泳法や」

「なんや、突いて、突いて、せいから、突きまくりかいな。かつこはええけんどな」

「そや、竹ヤリなんかやのうて、わいのほ、ほんまもんの槍、免許皆伝泳法やからな」

三吉と権太の会話に勇輝が割って入った。

「やっぱり、三吉は海軍やで。そないに泳げるんやから、身一つで七つの海もすいすいや」

「そや、南洋諸島のどこへでもすいすいや」

権太が更に三吉を持ち上げた。村のカラスたちは五、六人でこの池に来ていたが水遊びに夢中で、お互い干渉をし合うこともなかった。

みんながみんな純な少年顔のままだった。

「わいらも、お泳(よ)ごか。跳ねるはカエル／カエルは泳ぐ／や。ほな、行くでえ」

権太はカエル泳ぎが得意なのだった。池に飛び込むと初めは潜ったまま泳行した。もぐりも得意の内、十メートルほど潜航すると、やっと顔を上げ、ゆつくりと大きく水を掻きながら権太は水面を前へ前へと進んだ。

勇輝も水泳は苦手ではなかった。犬掻きで進み、体を慣らしてから、速泳法(クロールは敵性用語)に切り変えた。

池の面を裂くような素早い泳ぎだった。

何しろ、兄の勇は台湾沖の海を何尋(なんひろ)も泳げるほどの水泳の達人であった。

天の上から夏の太陽が直下の熱光を投げていた。午後二時過ぎ、いちばん、暑く、太陽もぎらぎら燃える時刻のことだった。

あちこちで歓声が上がリ、飛び散るようなさんざめきの声が池の水面を

跳ねながら渡って行く。どこまでも夏、開けっ広げであった。子供たちの、天まで抜けて行くような無邪気な声だけが、ここには在った。

が、いつとき、入道雲が出て、陽が翳った。

その時、何やら、池の向こうで、少年たちの叫ぶ声が聞こえた。池の端に上がって甲羅干しをしていた勇輝と権太にも、その甲高い声は聞こえた。池の一番奥手にある通称魔物淵のあたりで、誰かが溺れていた。

魔物淵と呼ばれていたのは、そのあたり一帯は水草のヒシの密生地、水面がびっしりとヒシの葉で覆われていたからだった。

手で引き抜けば、根っ子ごと抜けて出る水草なのでそれ自体は問題なかったが、ぬるぬるした根茎が結構深くまで生えていて絡み合い密生しているので気を付ける必要があった。

縄を纏ったような絡み合いなので、手足を取られると、絡まり、自由に動けなくなる。その魔の手に嵌っていたのは、三吉だった。

その上、筋肉が引き攣るこむら返しの症状になっているらしく、ばたばたする間もなく、三吉の姿は見る間に水に吞まれて行った。

「よっしゃ、わいらで三吉を救けたるっ」

「わいも行くっ。人命救助や」

先に権太が飛び込み、勇輝がそれに続いた。

数十秒後、二人は魔の淵に泳ぎ着いた。

他の少年たちも、半ば体が沈んでいる三吉の救出に必死になっていたが、

絡まった水草は執拗で、三吉がもがけばもがくほど、手足を縛りつけるように水草の茎は絡み付いた。

「そないことしてたらあかん」

咄嗟に権太が判断をした。潜りが得意の権太が危険承知で深みに入り、水草を一本ずつ手で千切り取った。

やっとこむら返しから解放されたのか、三吉も自力で権太の背にしがみつくことが出来た。魔物淵から三吉は脱出していた。みんなで、池の端まで連れて行き、いっぱい吸い込んだ池の水を吐き出させた。

町のカラスと、村のカラス、そんな争い事にはなかった。三吉の親は息子の命を助けて貰ったことで、町のカラスに感謝した。

もちろん、親たちの間では、町のカラスとか村のカラスなどの言い方はない。あくまでも、少年たちの間だけでの話であったが、三吉の命の救出話は、お互いを見直すためのいい機会とはなった。

夏の初めと終わり、そしてこの年の夏休みも、直接には戦いの被害も受けずに、鈴蘭台地区は山に囲まれた地形に守られて日々が過ぎて行った。

この夏、かっと燃える陽射しだけがやけに暑かった。

空の涯まで燃えていた。

夏休みを機に、寺山花園の撤収作業も進み、その手伝いをしていて、寺山花菜子もこの夏ばかりは、大忙しの日々を過ごしていた。

その後、理紗からは報告はなかったが、諏訪山動物園では一部の猛獣が

昭和十九年七月頃から殺処分の対象となり命を奪われていた。この殺処分の案件は全国に及んでいて、都会地ほど過酷な条件を突きつけられていた。

やがては、実りの秋、この言葉とは裏腹の食糧不足の日々が続くことになるのだが、この年の秋は、羽鳥宏志もやっと山の地暮らしに慣れて、例年通りの供出用のいなご狩りにも、自分の方から参加するようになっていた。何人かの、新疎開児童なども、いやいやではあったが、中山たんぼなどでの、この、いなご獲りには出掛けてはいた。

第五章 埋もれ火の影

第五章 埋もれ火の影

1

「電報なんて来ると確なことないから、電報を開く時はもうぐどきどきして、かあちゃん、手が震えてしもうた。そやけんどよかったわ。なんや、勇がな。明日には家に帰って来るちゆうことや。そないな電報や」

学校から勇輝が帰ると、おかんが言った。

もう、秋の気配が忍び入っているお彼岸過ぎのある日のことだった。

おかんは喜び半分、不安半分の顔付きであった。一時帰休の意味は戦地に向かう前の家族との別れを意味することが多く、この激しくなる戦時下、不安の方が強いのは当然であった。

兄の勇が家に帰るのは、ほぼ一年ぶり、台湾沖で輸送船が沈没して遭難して以来のこと、軍務の厳しさが分かるこの一年だった。

姉の登美子が勇輝に言った。

「勇輝、また、ハーモニカ、吹いてもらい」

「兄ちゃん、名人や。頼んでみるわ」

「勇に何を食べさせたるか。こりや考えとかんとな。そや、あの子、えら

いうどん好きや。六甲道の家にいた時は、商業学校の帰り道、友達と一緒に。鬮貞（ひいき）のうどん屋によく行った」

おかんが首を振り振り言った。

「なんや？その商業学校て？」

「小さい時やから勇輝は知らんやろけど、お父さんが亡くなって、それで、途中で、灘（なだ）にあった中学校を止めて、勇は商業学校に転校したん。わし、船に乗って一家を支えんならん言うてな。よう、出来（だけ）た子や。あの子の短い青春やったんやな。あの頃は。その、うどん屋に友達と行って、わいわい、しゃべってるのって、な、ええやろ」

「うん、わいも、うどん屋に行って、お兄ちゃんの真似したいわあ。ええなあ」

「アホ、言うてるわ。今時、どこにうどん屋があるのん？」

「そやな。あのな、おかあちゃん、それより、わい、お願いがあるんやけどな」

「なんや。また、食べ物のことかいな？」

「違（ち）やうよ。ちやう、ちやう」

「一年ぶりに帰って来る兄ちゃんなんやから、ご馳走はお兄ちゃん優先やもんな。勇輝の出る幕はないでえ」

「分つたるう。そんなことお」

「ほな、何や？」

「あのな。障子紙のこと、お兄ちゃんには言うわんといて欲しいねん」

「あの、障子紙が張つてある玄関扉のことを言うてるん？そないなこと、ずつとお、勇輝は気にしとつたんかいな」

「そやかて、母ちゃん、兄ちゃんが出征の時、ぼろぼろの障子の玄関の前で挨拶したら、兄ちゃんが恥ずかしい思いをしたかも知れんて言うたんやんか。わい、よう、覚えてるで」

「な、そやから、ねえちゃん、あの時、言うたやんか。アレはあれでソレはそれ、コレはこれや、てな。何や、覚えてないのんか」

返答に困つたおかんの顔を見て、近くで、裁縫事をしていた登美子が、この時、得意の言い回しで、助けを出した。

「かあちゃんがそないな言い付けをするわけないやろ。玄関のガラスはな。お金になるから売つてしもうたと言うとくわ」

「おかあちゃん、それはないて。そんなこと言うたら、お兄ちゃん、家のな。お金のこと心配するで」と、これは登美子。

「そやな。今かて軍務の手当て、余分なもん使うわんと、きちんきちんと家に送つてくれてるもんな。そやったら、こないな話にしよ。大体がうちの玄関扉の開け閉め、悪うて、がたがたやったんやから、扉が外れてガラスが割れてしもうた。そいで、入れ替え中てのはどない？」

「名案やけど、そやったら、今頃、ガラスは嵌つたるで。ほなら、物資不足。ガラスが店に入るんはあと数日と言うことでええか」

したり顔で、登美子が口を挟んだ。

「ええ、やっぱり、そんなん、無理あるで。作り話や。わいは男やからな。

あの禿げおやじに報復したったんや。兄ちゃんも、わいにな。再度山に行つた時、勇輝は男やから男らしくやったらええと言うてくれたで。自分でやっという嘘の話、作るんは、良（よ）うない。男の癖に卑怯やしな」

「立派なこといいよるな。ほなら、兄ちゃんが訊いたら、そのへんのこと、うまいこと、かあちゃんの話しとくわ」

と言うおかんの提言があつて、ひとまずは、この場の話に、勇輝は納得した。

この夜、おかんは夜なべで兄を喜ばせるための心づくしの食事の用意をした。食糧事情の悪いこの時代、特別に食べさせる馳走の物はなく、おかんは兄が好きなうどんを手打ちで作つてやるべく知恵を働かせた。

準備のために、おかんは甲斐甲斐しく働いたのだが、これはこれで大変な作業になった。うどんを打つにも、小麦粉があるでもなかった。

配給される米に交じた麦を一粒ずつ、選り分けしなければならず、兄の帰つて来る前夜、おかんは、この気の遠くなるような選別の作業を、ほとんど一人でやりのけた。米の分量を増やすための麦を、米と麦を配給された時に、米箱に混入して保管していたので、こんな始末になった。

どこかで小麦粉を購入すれば済む話だが、どこにも小麦粉など売つてはいなかった。

兄のための馳走で一人分だけだったが、それでも相当の分量がなければうどんは打てなかった。何千粒分か、その量は推し量れなかったが、一粒ずつにすると、相当量、登美子も一部手伝ったが夜明け頃まで時間を要した。この後は、当時はどこの家にもあった石臼（いしうす）で丹念に麦を挽き、粉にした。この石臼挽きだけは勇輝も手伝った。

注ぎ口から麦を入れ、把手（とって）に手を掛けて石臼をぐるぐると挽くと、上下に重ね合わされた石の隙間から押し潰された白い粉が出て来た。一家総動員、それでも、兄の帰宅する前に、みんなは、兄のための馳走の下準備だけはひとまずは整えることが出来た。

2

昭和十九年秋の暮れ、兄の勇を迎えての夜寒の一夜が過ぎることになった。この日、夕刻遅くに兄の勇は家に辿り着いた。軍服姿の兄は凛々しく、背筋もぴんと伸びていた。軍人らしく胸も張っていた。入営して半年足らず、階級は二等兵のまま肩章には星が一つ付いていた。

予定の時間より、家に帰る時刻が遅くなったのは、列車の遅延が理由で、島根・松江連隊からだ、その間、長旅になるので、途中、降り着くのに色々と障害があったものと思われた。

一時帰休の意味は軍事機密なので口にしなかったが、兄に戦地に赴く決

意が出来ているのは家族にも分った。人が変わったように軍人としての矜持（きょうじ）を、すでに、兄は身に付けているかのようだった。

「家の者にも顔を見せてやれと上官が気を遣（つこ）うてくれて帰って来れた。それに、出征の時もわしはおらなんだから近所にもこれからのこともあるし、挨拶しておかんな」

それが、家に着いた時の兄の第一声だった。

「そやな」

とだけ、おかんは短く答えた。

結局、障子紙張りのぼろぼろの玄関扉の成り行きについては兄は何も訊かなかった。口に出してはよくないことと、やはり、兄も胸内に収めていたのかも知れなかった。登美子と勇輝、小さな妹と弟の頭を懐かしそうに撫でた後、「二人とも元気でやっとなるか」と、この時ばかりはにこっと笑ってくれたが、忙しそうに、この後、濃い夕闇の中、近所に出立の挨拶回りをするため兄は出掛けた。

もちろん、隣の隣保長の家には立ち寄り、後のことはよろしゅうたのんます」と、言っておいたと兄はおかんには伝えた。

「あ、そうか」

と、だけしかおかんは答えなかった。

この後、「身辺整理もあるから」と断って、兄が一人、二階に上がってからは、登美子も勇輝も兄の側には寄りなかった。

許された逗留時間も短く、翌日の夜までには兄は帰営しなければならなかった。この時、戦地に赴く兵士の心得に倣って兄は自分の遺髪と爪の一部を遺した。

ハーモニカを兄に吹いてもらうなど、とんでもない話で、子供なりに勇輝は勇輝で、大人の世界の帷（とぼり）には踏み込めなかった。

やはり、登美子も無口になった。

その間、おかんは一生懸命にうどんを打った。うどんを作るのに適した麦の粉ではないので、山芋をつなぎに入れたものうまきは出来上がらなかった。おかんは一人、うどんを作るのに苦労をしていた。

挽いた麦粉に水を注ぎ、練り上げたが、どうやら、固まらずに、ばらばららしく、何度も何度も、おかんはその練った麦の塊りを捏（こ）ねた。

それでも、出し汁の醤油の匂いを嗅いだけで、勇輝は「ぐうー」と腹が鳴ったのだが、おかんは「なんや、これや、出来損ないやな」と、ぶつぶつ呟いた。情けなさそうだった。

それでも、捏ねた粉の塊りを、俎板（まないた）の上に乗せて、すりこぎ棒で伸ばした後、うどんらしく包丁で切り揃えた。

やっと、悪戦苦闘した末、おかんは手作りのうどんの馳走をどんぶりに入れて、二階に持って上がり、母と息子の会話が成立した。

何を語り合ったのかは、勇輝たちには分らなかった。その夜、一人、兄は二階の部屋で寝た。ハーモニカを吹くこともなかった。

あれもこれもと、勇輝は身辺のことを兄に語ってみたいと思っていたが適わなかった。

翌朝、朝が白々と明ける頃、二階部屋で、「きききっー」と、鋭く啼くモズの声を勇輝は聞き取った。昨夜から飼っていた小鳥に餌をやっていないことに勇輝は気付いていたのだが、兄が二階部屋にいることで足を向けずにいた。鳥籠は二階の物干し台に置いてあった。

結果だけ言うとも猛禽(もうきん)のモズが飛んで来て、籠の中に入れて飼っていたシジュウガラを襲い、その首を刎(は)ねていた。

「可哀想なことをしてしもうたな」

起き出した兄は事の次第を勇輝に報告しながら、申し訳なさそうな顔をした。モズはシジュウガラを襲ったが、相手は籠の鳥、獲物を外に持ち出せなくて、首だけを喰い千切り、その血を吸ったようだった。

この事実には、不吉な徴候のように思えてか、おかんは露骨に嫌な表情を示して見せた。

「ええよ。シジュウガラやったら、いつでも捕まるから。それに、この辺ではオオルリみたいなきれいな小鳥もおるもんな」

勇輝は言わずもがなのことを言ってしまった。戦地に赴く兄には無邪気すぎる返答だった。やはり、「しまった」と心の中では思った。

この日の朝人時過ぎには、兄の勇は軍服に改め、ゲートルをきちつと巻いた脚絆姿で玄関口の土間に立った。

ぼろぼろの障子が張られた格子扉が、その兄の背にはあった。

おかんと兄はつくづくと名残り惜しそうに顔を見合わせた。それでも、おかんは兄に向けて明るく振舞ったふうの声を掛けた。

「勇、かあちゃんは駅までは送っていかへんで。勇はまたこの家に帰って来るんやから。大袈裟ことはせえへんほうがええやろ。な、体を大事にな。何でも、無理せんように。勇には神様の運があるよってにな。無事なんを、かあちゃんはいつでも祈つとるう。ほな、ひとまずは、さよならやな。元気で行きや」

おかんは辛そうな口調ではあったが、そう言って兄の勇を見送った。

このあと、登美子と勇輝だけが駅頭まで兄を送った。

ちよつと風の冷たい朝で、みんながみんな白い息を吐いていた。

誰もが無口だったのに、ふっふつと鼻息だけが白く洩れた。

鈴蘭台駅は三田・有馬方面と粟生方面との交差点の駅になるので、その方面から来る電車の乗客の乗り換えを待つために、駅に車両を停め待機することがあり、この時も、神戸・湊川行の電車が駅には停車していた。乗り換え車両はこの駅が始発となるので、少し席があった。

まばらにしか、人は座っていない。

兄は乗り継ぎの電車が来るまで、二人に発車まで座っていたらと薦めてくれたので、二人は車内の座席にちよこんと座っていた。

二人は何もすることがなかった。

その間、兄は駅頭に立ち、覆いかぶさるように迫るあたりの山々の風景と一人対峙していた。どれも、見える範囲内の山々は小さくて低い山ばかりだったが、東西を山で挟まれた山麓の地、この駅が地形的に山間の小駅であることは、山々を見渡せば一目で分った。

線路道とて、山の狭間を分けて伸びており、駅の一方には高い丘地も迫っていたりで、見た目も、とても、窮屈そうに見えた。

小さく重なった山々は、秋も深いので大方は黄葉しており、風景としては、どこか、寂寥感も漂わせていた。北風も吹いていた。

登美子や勇輝たちには、この時の兄の心中は分らなかったが、兄は古里の山々や風景と、しばしの別れを告げているようにも見えた。

やがて、曲がりくねった急坂のレール道を、一生懸命さだけを見せて、有馬方面から電車が下って来た。小さな車両が近付いて来た。

慌てて、二人は兄を呼び、自分たちが確保しておいた席に座るように兄に言ったが、兄は首を横に振った。

「往く往くの道の電車の窓から見える山の景色がええのや。再度山は見えんやろうけんど、途中、菊水山やろ。それに、かぶさるように聳え立ってる鍋蓋山や、他の山々、六甲山系の尾根に連なる山々が見えてな。山にもサイナラせんならんからな。よう、見える吊り革に掴まって、窓の外を見てるんがええのや」

「うん」と、だけ勇輝は答えた。寒いので鼻水を垂らしていた。

登美子はただ黙って頷いた。

やがてのこと、電車が構内に入って来、レールの音に「きまきま」と、ブレーキを踏む音が混じった。

「ええか。二人とも、おかあちゃんを大事にしいや。おかあちゃんてな。この世に、一人しかおらへんのやからな」

やっぱり、二人は頷いただけで、兄に言葉を返すことは出来なかった。

乗り継ぎ駅なので有馬方面から来た乗客が鈴蘭台駅ホームに、どつと降り立って来た。席を取るための争奪戦もあつたりで、登美子と勇輝の大事な時間は慌しさの中で消えた。

登美子と勇輝はプラットホームに立った。

妹や弟とは対面になれる位置の吊り革に掴まり、兄は発車寸前まで登美子と勇輝に軍服姿のまま手を振った。やがて、発車のベルが鳴った。

がっつんと車両が揺れて、電車は神戸方面にと進行方向を向けた。ほぼ、満員で、電車の窓には、人の顔がいっぱいに列なっていた。

順送りに、窓は過ぎて行った。

登美子と勇輝は兄の勇の姿を認め、過ぎ去って行く兄に、千切れるほどに手を振った。進行方向の左手側の位置で、兄は吊り革に掴まっていた。

電車の窓からでも、四軒長屋のわが家の物干し台あたりは、ちらとだが見ることが出来るはずだった。

電車が発車して一、二分、直ぐ様に、電車はそのあたりを通過した。

きつと、過ぎ行くわが家とも兄は別れを告げたに違いなかった。

もしかしたら、おかんも物干し台に身を乗り出し、その位置から息子を見送ったのやも知れなかった。電車が速度を上げた。

視野から電車は遠去かって行った。

小さくなって行く電車に、いついつまでも、二人は小さな手を振っていた。やがて、山と山の狭間を潜り抜け、電車は消え去った。

3

新しい疎開児童たちとは村のカラスも町のカラスも、その唐突な出会いのゆえにか、みんな学校生活では戸惑いを隠せずにした。

新疎開児たちはそうはたやすく友達が出来るわけでもなく、また、他の地の集団疎開とは違って、それぞれの理由で疎開して来ているので、環境にも馴染めずに、学校生活を送ることを余儀なくされてもいた。

校庭のほとんどの土地が耕され、菜園化の進んだ校庭では南京やサツマ芋、それに、一部、野菜なども植えられていて収穫の秋を迎えていた。

小部国民学校全体でも、児童数は四割増しとなり教室中が疎開児童たちで溢れており、その過密化のせいで先生も不足し全員の学力は低下、混乱状態が続いていた。

それに疎開児童たちはどこか脾弱（ひよわ）な上に、一部の児童は菜園

での収穫作業にも参加せず、不公平さのゆえに、一部では不満も出るようになっていた。

「なんや、わいらは、鋤(すき)や鍬(くわ)を家から持ち寄ってやで。みんなで芋を掘ってるのに、あいつら、なんもせえへん。見てるだけや。芋掘りを手伝った奴でもや。あんなん、遊びや」

「そやのに、腹が減ったらいくさはでけんと言いくさりよる奴もおるしな」
「耕したんも獲るのもわいらやったら、あいつらにはなんも喰わせへんど」と、これは村のカラスたちの言い分。

収穫物は学校から全児童に公平に分配するのが建前、収穫の喜びを知ること、食糧増産の意識を植え付けるための教育の一環ともなると言う狙いもここにはあった。

「サツマ芋に南瓜か。もうええ加減にせいや。な、出るのはげつぷと屁、なんでこんなもんばっかり作らせるんやろな」

「腹が減ってるよりは、何でももらえる方がええやんか。だいいち、タダやしな」

「貧乏人の子沢山、喰うもんない時はや。貧乏人には芋沢山、しゃーないてえ」

こんな穿った意見が出るのが鈴蘭台周辺に住む町のカラスたち。だが、村のカラスたちは、畑の耕作、種付け、草むしりにしても、みんな仕事ぶりは一丁前で、口ばかりの連中に比べれば遥かに役立った。

その働きぶりに勇輝なども大いに感心させられた一人だった。親の仕事を手伝って彼らが日頃から汗を流して働いているのも、勇輝は知っていた。

農耕使役用の牛や馬などを飼っている農家も多かったからその日々の世話も大変で、農家の仕事は、この時代、人手にのみ頼っていたから、尚更に、手間ひまが掛かった。

勇輝のところでは、おかんがまだ仕事に就けずにいたので、兄の軍務からの仕送りと、姉の登美子の僅かな稼ぎで食っていた。

金があっても、物資がなくて買えない時代、この頃では、七分搗きで支給される配給の米も玄米同様のままで藤王一家は食べていた。

一升瓶に竹棒を差して突き、糠を取って精米してから食べる家庭が多かったが、糠も栄養の内、糠を捨てるのがもったいないからと、おかんは精米して食べるのまで止めた。前には、精米して残った糠に熱湯を加えて、そばがきのようにして食べさせようと、おかんは苦心の作を試みたのだが、これはまずくて、腹へこの子供でも食べなかった。七分搗きの米と麦、七分三分の麦飯とてばさばさで、こちらもまずかった。

こんなある日、小部国民学校の菜園に思わぬ来訪者があった。収穫の秋を嗅ぎ付けた一匹のイノシシが校庭に乱入して来たのだった。

それも、今年、生まれたばかりのウリ坊で、母イノシシと離れ離れになって迷い込んで来たらしく、全校でちよつとした騒ぎになった。

木造校舎から見える位置に小さな丘があり、その丘のあたりは畑になっ

ていた。悪い事をした児童たちは、罰を受けるためにいつも校舎の窓からも見えるこの草地の丘の上に見せしめのために立たされるのが通例。

それで、校舎の窓の位置から、直ぐに、ウリ坊の侵入は児童たちに発見されて、サツマイモ畑荒らしに見立てられ、ウリ坊はみんなの追跡を受けることになった。

「ウリ坊や。捕まえて喰うてまえ」

「よっしゃ、捕まえたら猪（しし）鍋や」

これは腹を空かしている連中の言い分。

「そんなん、可哀想や。お母さん猪のところに帰してあげんと」

女の子たちは大方はこの意見の持ち主。

全校児童が授業も止めての見学で、上へ下への大騒ぎとなった。その内、ウリ坊は侵入したサツマイモ畑から追い立てられて行き場を失い、追われ追われて校舎目掛けて突進して来た。

余りにも大勢の子供たちに取り囲まれて、右往左往、挙句の果てに、とうとう校舎内に逃げ込み、廊下を暴走し始めた。

この時ばかりは、村のカラスも町のカラスも、都会のカラスもなかった。大方は、歓声や悲鳴を上げながら追跡劇を見守った。追われる内にウリ坊は逃げ場を失い、その挙句に、五年一組の教室に入り込んだ。

机の角々に体をぶつけながら、ウリ坊は必死になり逃げ惑った。

気を付けないと、怪我をさせられる場合もあり女の子たちは教室の隅で

身を屈めた。「きゃっ、きゃっ」と、大声も上げた。

「よっしや、一発で仕止めたるで。わいのは眉間撃ちや」

みんなが怯えている中で、三吉と権太の二人は元気がよかった。

言葉で一発咬ませてから、ウリ坊の正面に回ったのは三吉だった。

三吉はホウキの柄でウリ坊の眉間を狙った。

ウリ坊は直突して来る性質があるからコレは無謀な行為でもあったが、

普段から猪の出現には村のカラスたちは慣れてもいるので、この際、いいところを見せようとばかりに三吉は正面から挑んだ。

ウリ坊は直突の姿勢を取った。

三吉はホウキを振り下ろそうとしたが、その前に、慌ててよろけた。

こんな時は権太の出番で、咄嗟の機転で、直ぐ横にいた権太が三吉を横へと突き飛ばして危難を防いだ。危機一髪の局面だった。

その拍子にひよいとウリ坊は逃げ、窮余の一策、一足跳びに、開いていた窓から外へ飛び出した。校庭にまたウリ坊が姿を現した。

「うわー、うわわっ」と、全校児童から歓声が上がった。

瓜のかたちをしているからウリ坊、その名の通り、ウリ坊は可愛くて人氣者。イモ畑荒らしのウリ坊を追い掛け回した末に、追い詰めて捕まえたのは村のカラスたちの一党で、一躍、村のカラスたちの奮闘ぶりはみんなの認めるところともなった。

遠慮して余り口の利けなかった疎開児童の連中も、これを機会におしや

べりが出来るようにもなりウリ坊はみんなの交流のために一役買った。ウリ坊は母イノシシのいる山場の向こうへと逃がしてやった。

これまた一件落着、ひとまずは、安心安心の結末となった。

本当は、秋の運動会で、児童同士の交流を図るべきだったのだが、校庭の半分以上はサツマイモ畑、それに、急な児童数の増加で、運動会は中止となった。その点では、ウリ坊効果はバツグン、みんなを仲良くさせる親善大使の役目を十分に果たした。

それ以降、少しずつではあったが、小部国民学校ではみんなの交流が進むようになった。

4

寺山花菜子の父親が地区の隣保組織の幹部の連中に再度呼ばれた。

その後、時間稼ぎをしていたのだが、菜園化の話だけでなく、この地に敵機空襲に備えるために防空壕を掘る予定があると、忠誠者顔をした連中に国土防衛を盾に寺山花園は立ち退きを迫られた。

すでに、この年の六月には、北九州工業地帯に敵機B29による本格的な大空襲があり、日本本土も爆撃圏内に入っていた。

そんな事情もあつての立ち退き強要の話に、もはや、寺山実朗は抗せななくなった。もっと、早く立ち退いていれば、今頃は、秋の収穫物を地区住

民に配れたものをと、そのものずばりの嫌味も言われていた。

「なんや、ハナちゃんどこ、ほんまに、丹波に行ってしまったらしいで。この前、ハナちゃんどこに行つた時、そないな話、ハナちゃんから聞いたわ」
登美子とおかんとのお話を、いつものように、勇輝は聞き耳を立て聞いていた。寺山花菜子が転校するであろうことは、もう、勇輝を含め、学級のみんなは大方は知っていた。

寺山花菜子からは直接に何も勇輝は聞いていなかったが、加賀美理紗からは、部分的には聞かされて知っている話であった。登美子と花菜子との交流はまだ続いていた。時々、花園にも足を運んでいた。

「ほんまに、しゃーないことなんやろかね。だいいち、花を作っても売れへんだら、おまんま食っていけへんしな」

「うちかて、ほんまはな。ハナちゃんのお父さんここで働かせてもろうて花作りが出来(け)たらよかつたんやけんどな。そないな夢、うち、持つてたのに残念やわ」

十三歳、まだ、おかつぱ頭の少女で、いつも、勇輝が見ている姉とは何も変わっていない。登美子は花好きの少女のままだった。

本当なら国民学校の高等科に籍を置き、机に向かっているはずが勤労のための女子挺身隊御用の軍需工場に雇われて、勉強とは名ばかり、結局、物資調達が出来ないのを理由に、学校の方も閉鎖されて、途中で学業を放棄させられた身であった。今、仕事に就いていて、毎朝早くから出掛けて

行く結核療養所での手伝い仕事も、言ってみれば世間で言うところの飯炊き女で、決して姉の登美子は恵まれていたわけではなかった。

「ええな。登美子、そないな夢があるのん。花屋さんかて、いつまでもあかんて訳ないで。自分なりの夢を持つといた方がええ」

「夢見るんはタダや。金、いらへんもん」

「そか。タダやな。金はいらん」

おかんは同じ文句をオウム返しに口にした。

その時、噂をすれば影とやら、玄関に人の気配があり、寺山実朗その人が訪ねて来た。おかんが玄関口に出た。

直ぐに、登美子も勇輝も呼ばれた。

玄関先に行くと、ぼろぼろ障子の格子扉が半分ほども開かれていて、寺山実朗、そして、女房の婦美子、花菜子の三人が国民服にもんぺ姿の見慣れたいでたちで立っていた。

「突然にお伺いしてすんませんな。わたしら、ひとまずんところ、丹波の方へ引越しをすることになってもうて、そいで、今日、みなさんにはほんまにもうお世話になつとりますんで、わたしら、みなさんに、ご挨拶に上がったようなわけで」

もごもごこと、寺山実朗は言い、それから、深く頭を下げた。後の二人も促されて、それに習って頭を下げた。

一番、小さい花菜子は今にも消え入りそうに見えた。

視線は伏せたままで、小さな肩先が心なし震えていた。

「…そんなん、なんや、ほんまに残念なことやわ。そいで、その、いつ行かかりますのん？」

「荷物は大方は運んだんやけど、色々、引越しになると大変ですわ。丹波の方は雪が降るのも早いとこやし、早（はよ）うせんと。そいで、最後の荷物は馬車屋の親方の都合もあって、明後日の午前中ちゆうことになつて、みなさんに、ご挨拶に来たんですわ」

「ハナちゃんは学校もあるのに、そんな、急な話でこれは大変やな」

「親としては申し訳ないこつちやとは思っておるんですが、ね、こればかりは、しゃーないですわ」

花菜子に同情をしたおかんにも寺山実朗は申し訳なさそうに、もう一度頭を下げた。

「ハナちゃん、ほんまに行つてまうの？そんなん、あかんわ。あかんて。うちら、仲良し三人組なんやんか。うち、そんなん悲しい…」

登美子が声を詰まらせた。

一杯に見張った目から、ぽろぽろと大粒の涙が流れた。

「ごめん、ごめんな。うち、それしか言えへん」

精一杯、花菜子は返し、嗚咽した。

可愛いおかつぱ頭と小さな肩先、今日は、それでも、もんぺ姿ではあつたが、上着はセーラー服を着ていた。これとて最大限のおしゃれだった。

(ハナちゃん、なんで行ってまうのんや。みんなな。ハナちゃんのこと、好きなんやで)

自分の思いも込めて、勇輝は呟いたが、自分の思いが花菜子に届くわけでもなかった。お母さんが泣きじゃくるわが子の背を優しく抱き止め、とんとんと背を叩いた。母子は抱き合い、やはり、涙に暮れた。

「すんまへんな。こないなことになってもうて。そやけど、花屋にも花屋の心ちゅうもんがありますでえ。花より喰いもん、この考えも間違いではないんやろけど、今の時代、花を切って捨てて、そいで、花の心まで人間が喰うてしもうたら、もう、これは人間の心に毒が回るちゅう話やおまへんか。どんな時でも人間、花の美しい心を忘れたらあきまへん。その心を忘れんように、どないなところに行っても、どないなことになっても、わしは花を作り続けまつせ。なあ、花菜子、お前も、父ちゃんのその心意気を忘れんように、向こうへ行っても、しつかり、手伝おうてや」

「うん、うちもその気いや。いつかな。登美子お姉さんに卒業の時のお祝いにブーケを作って贈ったやろ。あん時にな。登美子姉ちゃんが、うちに花屋になる夢は失わんと、夢は持ち続けなあかんよて教えてくれたんや」
「ハナちゃんは偉いな。偉いてえ。ほんま、夢は叶えて欲しいん。“アレはあれでソレはそれ、コレはコレ”て、うち、いつも冗談を言うてたけど、今度ばかりはな。これはコレや。夢を叶えるんが、コレ、やで。そいからな。ハナちゃんがブーケに巻いてくれたあの時の赤いリボン、あれ、大

事にして持つてるん。うちの宝もんやからな」

気丈になり登美子も、花菜子を励ました。

やっつと、登美子も涙を拭った。

「そか、花菜子の決意を聞いたら父ちゃん元気が出て来よったわ。うちの女房も花好きや。そないな一家でいられるちゅうことは、これ、幸せな話なんやな。花園の方は立ち退きになりましたけんどな。あそこの、石垣だけは誰も触らんやろから、石垣の間に根を付けた芝桜、春になったら、あの、ちっちゃい花を咲かせると思うさかい、みなさん、楽しみにしといて下さい。やっつと場所を確保して、一つだけ残せたうちの花園の花ですわ」

寺山実朗は鈴蘭にまつわる毒の話についての抗弁はしなかった。口にするのも大人げないことと切って捨てていたのかも知れなかった。

口元には笑みも浮かんでいた。

涙を拭った後の花菜子は、もう、すっきりした顔になっていた。藤王一家の三人も、晴れ晴れとした表情になった。

「ええな。夢なあ。夢は持たんと人間は生きてはいけへん、うちの夢は子供たちが大きゆうなって世の中の役に立つことや。そないな意味ではな。登美子も結核療養所で働いてて、明日にも死ぬやもしれん人たちに、生きる夢を少しでも上げようと、こないな食べ物のない時代でも、ご飯を炊いて上げているんやから、役には立ってるんよ。うちの子も」

言わずもがなのことだったが、おかんが自分の娘のことも褒めた。

「勇輝さん、明日、うち、学校に行つて転校の話するよつて、サイナラは、そんな時にな」

「うん、ああ、そないなことになるんや」

慌てて、勇輝は答えた。胸がきゅつと締まっついて、それ以上の氣の利いたことは勇輝は口には出来なかつた。

寺山一家は、もう一度、みんなに頭を下げてから、家路に就いた。

どうやら一家は少しは元氣を取り戻したように見えた。この日は二学期がもう直ぐ終わろうかと言う初冬の日、やはり、夕暮れのことでの外の風は冷たかつたが、雲の下辺にはわずかながらも夕陽の明かりが射し染めていた。

5

鈴蘭台の街でも、十二月に入つてから各地で防空壕作りが始まつた。

この年の五月を皮切りに、空襲被害に備えるための県警備隊が神戸市の各地区では結成され、国土防衛の体制が制度化されつつあつた。この山間の地でも、それに倣うように、避難場所作りが始まつていたのだ。

「防空壕、言うたかて、各家の分担金もあるさかいにな。そやけど、命には代えられんことやから、こればっかりはしようがないわ」

おかんの愚痴ごとだつた。思わぬ出費におかさんは頭を抱えたが、問題は

それだけではなかった。

何もかもが配給制、防空壕作りの材料集めからして大変だった。

穴を掘るのは男たちだからと言うので、女たちは材料調達の任を負わされた。誰かが所有していた大八車で農家回りをして、竹と棒材とを手に入れた。その後、列の出来ている材木屋で必要分の板を購入した。

防空壕は、勇輝が住む長屋の隣地、接收された植木屋の土地の入り口あたりに掘られた。半分以上は菜園になっていてネギや、白菜や大根などの冬物野菜が各所に植えられていた。土を掘り、それらしき縦長の防空壕が完成したのはもう年の瀬も押し迫った日のことであった。

深さ一メートル半、奥行き三メートル、巾が七十センチの穴倉で、何段かの階段型の出入口も設けられた。

そして、外側の天井には土が四、五十センチは盛られた。

隣組全員の勤労奉仕で、やっと、空襲に遭った際の避難場所が完成した。

この鈴蘭台地区でも、神戸市内に敵機が襲来する時は警戒警報が発令され、六秒吹奏、三秒停止の合図のサイレン音が鳴った。

この年の暮れの十二月十五日、午前九時頃、B29が神戸上空にも飛来、阪神間一帯を空の上から偵察飛行して回った。続いて十二月十八日のこと、やはり、偵察機が七機も神戸上空にやって来た。

この時は、午後一時過ぎた時刻だったので、学校からの帰途、勇輝らは、敵機そのものの姿を初めて目撃する機会を得た。

みんなして、大騒ぎすることになった。

消防署横の坂から入り、末廣稻荷神社のある通称いなり坂のぐねぐねの急坂を登ると、子供たちご用達しの鈴蘭台道草横丁になる。

この日、勇輝と権太と宏志の三人は、学校の帰り道に揃って道草横丁に立ち寄った。いちばんてっぺんまで行っても、平らな台地があるだけ、それだけに誰も来ない三人だけのいつもの秘密の場所だった。

もつとも、近頃は、権太によると、末廣稻荷神社では賽銭泥棒がいるらしく、自分たちがその側を通り過ぎる時、あそこの宮司が家の奥から覗いていたと言う話になるのだが、「わいらは渴しても盗泉の水は吞まずやで」と、権太が言い切り、相変わらず、このルートが彼らの道筋となった。

台地のでっぺんに立つと、鈴蘭台の東の地域、住宅地が一望出来る。小さな街なのだが、それでも、密集しているので家々の数は多く見える。

その空の向こうには、どれも低い山容ではあったが六甲の山々が連なっで見えていた。幾重にも重なっていて、その分、なだらかにも見える。

三人が坂を登りきって、「はあはあ」と、肩で息を吐いていると、急にけたたましくサイレンが鳴った。警戒警報発令だった。

午後一時過ぎ、騒ぎは起きた。

何しろ、坂の直ぐ下が消防署、そこから発信されているサイレン音なので、耳をつんざくほどに、生々しく音は響いた。

「おい、ここがいちばん安全やで。こんなとこ、爆撃するアホウはおらん

しな。だいいち、当らへんわ。防空壕に入るよりええ。ここで、じつとしようや」

こう言う時は権太が頼りだった。

それで、三人は台地に留（とど）まり時間を過ごした。

「そやけど、B29で、ほんまに来よるんかな。わい、見たことないから、一度、お目に掛かりたいと思ってるねん」

「アホやな。そないなもん遭（お）うたら、もうここで遭うたら百年目、えらいこつちや」

「なに言うてまんねん。ここで遭うたら、ひやくまんねん目やろ」

勇輝と権太の会話、久し振りに、権太は権太節を披露した。権太は胸を張っていた。勇輝が言い終わった時、権太が素っ頓狂な声を上げた。

上空を指差していた。

「うわおっ、おりや、りや。あれ、B29や。ほれ、見てみい」

みんなが見上げた上空遥かな空に、きらきらと銀色の機影を光らせながら飛ぶ大型爆撃機B29の編隊が飛んでいた。

やや、曇り空だったが、雲の切れ間から敵機は姿を現した。

全部で七機、東から西へと、ゆっくりと移動していた。高度一万メートルほどだから、小さな機影のはずだったが、少年たちには大きな鳥にも思えた。一杯に両翼を広げていた。

「はよ、高射砲で撃つたれや。ぼんぼん撃って、落とさな、あかんでえ」

勇ましく、権太が吠え立てた。

「あかんで。とどかへんで。あないに高いところにおるのに、高射砲を撃ったかて、どもならんで。撃つても空砲や」

こう断言したのは宏志だった。

「ほな。隼（はやぶさ） 戦闘機や。零戦（ぜろせん）でええ。空中戦、一発咬ましたれや」

「そんなんな。あそこに行くまでにな。こつう時間が掛かってしまうて。あかんあかん」

「なに言うてんねん。このままやったら、あいつらにやられてしまうやんか」

宏志と権太の、そんなやり取りに勇輝が口を挟んだ。

「やられてまうよな。山の向こう、海の方にはぎょうさん、軍需工場あるもんな。爆弾を落とすんかも知れん」

だが、この日は、偵察だけで敵機は去った。B29の機影はゆつくりと、少年たちの視界からは消えた。六甲山脈を一巡りしたようにも見えたが、銀翼の機影だけをこれ見よがしにひけらかせて見せた。海の方角、紀伊半島沖から、関西方面に機首を変えてやって来るのが通常の進入ルートで、また、同じその海の方角に消えて行くのがこの敵機の航程ルート。

この日も機首を東の方角にと取り、B29の編隊は消え去った。

「なあ、♪おぼけはこわい おぼけは消える 消えるは電気 電気は光る

光るはおやじの禿頭♪やな。ぴっかぴか、ぴっかぴかで、B29、消えよ
った」

数え唄の一節に例えて権太が言った。

とんだ道草になったが、この帰り道、坂を下ったら、警防団本部のある
消防署は団員たちでこった返していた。空襲警報は解除されていたが、男
たちが忙しそうに声を荒げながら動き回っていた。

この日を境に、警防団の連中が発令を周知徹底させるためにメガホンで
各地区に発令を告げて回るようになっていた。

偵察機が何回か神戸上空に飛来しただけで、民家などへの大きな実害は
生じていなかったが、すでに、この時期、軍需工場のある福岡、名古屋な
どでは空襲は日常化しつつあった。

年が明ける昭和二十年初頭の頃から、神戸への空襲も苛烈さを見せるよ
うになるのだが、まだ、この地では、防空演習が学校組織、隣保組織で行
われただけで、身近な空襲そのものの実感は誰も体験していなかった。

B29もこの地を爆撃目標にはしないだろうと言う判断が、一部の住民
にあったのも事実だった。山を幾つも隔てていることで、一種の「安全神
話」のようなものが、ここ鈴蘭台地区には根強く存在していたのだった。

第六章 再度山の安全神話

第六章 再度山の安全神話

1

鈴蘭台道草横丁でB29を目撃した数日後、勇輝と権太は新しく出来た防空壕探検をすることになった。

子供は好奇心旺盛だから、あちらこちらの防空壕探検に関心大、その一日、勇輝も付き合った。道々、二人は他愛ないことを言いながら、お互いの防空壕観などを披露し合った。

「そやけんど。こんな山の中に爆弾落としてもしやあないで。あちやこちや、いっぱい、穴を掘ってからに。勇輝んところの防空壕は広おうてええけんど、うちのなんか、裏のドブ川の側やから臭うてかなわんわ」

権太が自分のところの防空壕のことで不満を漏らした。確かにドブ川に面していた。

「うちのんは水が出るねん。ほいでな。入る時は下に板を引くんやけんど、みんなには行き渡らへん。落合のおっさんだけ用の板があつてな。あいつのケツだけは濡れへんのや」

「けつ、また、威張りくさつたあの禿ちやびんかいな。隣保長はえらいさかいにな。わいんとこの隣保長はその点はよう出来(け)てる方やろな。

酒屋のおっさんやから、配給物資の酒をな。ちよいちよい、ちよろまかせ
て、わいのおとんとこに持って来てくれるんや」

「そないなん、横流しやんか」

「ちやうて。ちゃんと散髪して帰りよるから、物々交換やて。一升瓶で三
回分や」

「そないなことしとるから、うちなんか女所帯に酒はいらんやろて配給な
しなんや。その、酒、配給でもろうたら闇米が買えるんやで」

「なんや。勇輝い、この、わいに文句を言うてんねんな」

「ちやう、ちやうて」

慌てて勇輝が取り消すと、待ってたとばかりに、権太が得意の一発を咬
ました。

「なにいうてんねん、ひやくまんねんや。文句なんか言うてんやないで」

「なんや、それが言いとうてケチつけたんかいな。何回も同じこと言われ
てるとな。そなん、一発咬ましても、全然、匂わんわ。屁でもないで」

「へへーや。ほれ、見いな。ハナちゃんとも、ぼこぼこになってもうて、
奥の方に防空壕や。よっしゃ、今日の防空壕探検、第一号は寺山花園ちゅ
うことにしようや」

勇輝も異議はなかった。高い石垣があつて、石の階段を上がると、整地
された広い一郭があり、寺山一家の住んでいた家屋と、一部の温室造りの
建屋だけは今も残されていた。

もちろん、誰も住んではいず、その温室に張られていたガラスもないので、広い土地は荒れ果てて見えた。

「ここはよう作ってあるやんか。な、勇輝、壕に入るところからして余裕ありや。うちなんか入口が急やから下手したら滑りそうになるけんどな。ほい、天井も奥もほいほいや。これだけ広いとな、みんな集まってわいわいやれるで」

二人が探り当てた防空壕は作られたばかりなので、木の香がまだ匂った。勇輝のところのように古材ではないらしい。

奥行きの広さからすると、二、三十人ぐらいは空襲時には潜んでいられそうだった。地上ではこの季節、もう、空つ風が吹いていたが、地下に潜ると風のない分だけ暖かった。

「よっしや、ここ、わいらの秘密の場所にしたらるか。わい、気に入ったわ」

「アホやな。そないなん、非国民で、そいでな。国賊もんやで」

「なんでや？みんなが逃げて入るとこやからかいな。この山の中に防空壕なんかいらへんて、わいとこのおとんは言うとったで」

「そらそうやけんど、ここの防空壕はな。ハナちゃんところを立ち退かせて穴を掘ったんやろ。なんやここの防空壕、けったくそ悪いわ」

「なんや、勇輝、えらい怒ったるん、ハナちゃんがおらんようになったからかいな」

「お前な、そないな言い方しよったら、わい、許さんでえ。ハナちゃんが

「どうかこうとか、そんな問題ではあらへん」

「えらい、剣幕やな。どないしたん？」

「どうもせえへんわ…」

防空壕の中は昼間でも暗かったので、勇輝の泣き顔は見られなくて済んだが、勇輝は口元をきゅつと締めて悔しさを堪えていた。

寺山一家が勇輝の家族のみんなに別れを告げに来た経緯については、権太が仔細を知らず、乱暴な口を利くのも致し方のない話だったが、この花園の地下に防空壕まで掘られていることへの怒りは子供でも治まらなかった。

「もっ、出よ。出よや。わい、勇輝とはな。喧嘩なんかしとうはないで。友達なんやから」

「そやな。ぐるり回って、三川屋坂、あっちに行ってみよか。あの急坂、どこに防空壕は掘るんやろな」

「うん、鈴蘭台花屋敷花番地やろ。柿の実、いっぱいもろうて腹いっぱい天国、そやけど、花の花組も、加賀美理紗一人になってもうたな。行く、懐かしの花番地や」

「権太、そないに、ええことも言えるんやな」

「宝塚花組の青砥百合花も、今はあそこに住んでへん。慰問団の一員になって、中支の方面へ行かされてるみたいな話を聞いたで。ごつつう、別嬪(べっぴん)さんやったな」

「みんな、誰も彼（か）も、女の人かて、戦地に行つてまうんやな」

「タバコ屋のあんちゃんなんか、七つボタンの予科練志願や。せいから、この前、辺見先生の親戚や言う海軍将校の人が散髪に来てな。これがえらいかつこええねん。白い軍帽に白い軍服、白い手袋、腰に差してる短剣かて、かつこになつてるねん。わいも、大きゆうなつたら、海軍はんやな。そやけど、わい、頭、ようないから、あかんやろけんどな」

その頃の軍国少年なら誰しも口にしような文句を権太は口にした。

少年航空兵を教練する予科練は特に少年たちの憧れの的で、七つボタンの軍服を着ていたので、七つボタンの予科練で通っていた。

「なんや、誰もおらへんみたいに暗いで。青砥百合花がおらんようになつたら、鈴蘭台花屋敷花番地も、なんや、花が咲かへんのやな」

イヌマキの生垣の奥を覗き込みながら、権太が言った。庭地の一部は窺えたが人の気配がないのでひっそりとして見えた。

「鈴蘭台花屋敷、花の咲いていない花屋敷やな。花が咲いてないと鈴蘭台花屋敷花番地にはならんへんでえ。今は、ここには、誰も住んでないんやな」

庭木の繁りは見えていたが、濃い緑色で、その分、闇のようなものがこのお屋敷の内には住み着いていた。ひっそりと静まり返っていて、人が暮らしている様子はなかった。

「なんや。外れやな。人がおらんのやったら防空壕もいらへんしな。ここ

の探検はなしや」

「よっしゃ。ここまで来たんやったら、この坂を上がろうや。この坂を上
がればロシア人の館や、あいつら、あれからどないして生きてるんやろな」
「わからん。あれから、ハリスも見かけんもんな。そやけど、これまで
は白っぽい館やったのに、何や、敵機の標的になり易いから、黒い壁に塗
り直せって言われてて、黒いロシア人の館になるみたいやで」

亀福理髪店での大人たちの会話から仕入れた情報だから、多分、本当の
ことだった。防空管制も敷かれ始めていて夜間は電灯を灯すのも制限する
こと、明かりが洩れる窓や、扉は黒い布で覆うことなどが、隣保組織を通
して各家庭には通達されている昨今であった。

ロシア人の池の周辺まで下って見たが、大きな冬の池が一面に広がって
いるだけで、景色そのものは何も変わってはいなかった。

勇輝の発案で、鈴蘭台夕陽ヶ丘まで足を伸ばした。いつか柿の実が一つ
枝に懸っていてカラスども相手に奮闘した場所でもあった。

鈴蘭台夕陽ヶ丘は勇輝にはちよつとした兄との思い出もあった。今の長
屋に移る前、タドン工場の物置庫に住まわされていたことがあり、ここ
一つ鍬山の野辺では、兄と口を交わしたことも何度かあったのだった。

「なんや、ただの痩せた木やな。冬になると、なんもないから、カラスも
飛んでけえへんし、何や、寒うなって来たで。はよ、帰ろ」

確かに、権太は鼻水も垂らしていた。ぐじゅぐじゅと鼻を鳴らしてもい

た。それでも、権太は勇輝に付き合ってくれていた。冬空になると山の端も直ぐに暗い色に沈むようで、まだ、日暮れ時ではなかったが、一つ鉾山に連なる山々は、その稜線を重ね合わせて暮れ始めていた。鈍色の夕陽が中天にあつて一日の終わりの気配を静かに窺っていた。

やがて、街にとつながるけんぺい坂を二人は下った。憲兵隊公舎の側を通り過ぎる時、勇輝の顔を覗き込み、権太が告げた。

「な、オコーコ屋はんの前を通ると、腹がぐうーて鳴りよるな。あれはたまらん」

守田の家にはもう一部明かりが灯っていた。

きゅんと、足元で風が舞い、坂道の埃りや枯れ葉を大きく巻き上げた。

北山の方角から下りて来る山嵐しの風が吹き始めていた。

「こりや、明日は雪やで」と権太が言った。

薄黒い雲の厚みからすると、権太が口にしたように、明日ぐらいはもしかしたら、雪が降るのかも知れなかった。

2

その翌日、やはり大雪が降った。

なぜか、部屋の中までもが明るくなっていた。近所の一番鶏が鳴かず、勇輝はいつもより遅くに起き出した。

「うわあ、雪や。真っ白ケー」

「えらい、雪やで。一晩中降ってたさかいに、どかんと積もってるでえ。」

今日は、厚着していかんとな」

いつか、鈴蘭台天空城第一番地に招待された時に着た手編みの黒いセーターを、おかんが出してくれた。作ったばかりの防空頭巾も防寒用にはぴったり、頭からすっぽり被ると、もうそれだけで勇輝は暖かかった。

熱いコーンスープと言っても、高粱の粉を熱湯で溶かしたもの、味も素っ気もないが、体だけは暖まった。主食はさつま芋一個。

鈴蘭台駅前も一面の雪景色、小さな商店街も店をまだ閉めたままで、白一色に塗り込められていた。登校の道筋も、雪、雪、雪、白銀の世界がどこまでも広がっていた。

こんな日は学校では恒例の雪合戦が行われる。みんなが学校に到着すると、早出した先生たちによって校庭の半分以上が立ち入り禁止区域になっており縄が張ってあった。もちろん、菜園地区は立ち入り禁止だった。

全校生参加の雪合戦の準備が整っていた。

初めに、担任の辺見先生が、各級選出の選手の名前を読み上げた。各組三人、五年一組の選手は亀福権太、木村三吉、それに羽鳥宏志が加えられた。少し、のっぽになり始め、手足も長く見えるので、その辺の成長ぶりに辺見先生は期待したのかも知れなかった。

対抗戦は、雪投げだけではなく、年少組のことも考えて、雪ダルマ作り

競争も取り入れられた。大小、その形が選考対象となる。

ところで、雪合戦、とんでもない標的が、この日は用意されていた。いつもの急造の鬼面の張りぼて人形の案山子が雪の山には突き立てられ標的になるのだが、今回は、『鬼畜米英』と胸の部分に大書された張りぼての立て看板が登場した。絵の具や色鉛筆不足で、この頃は戦時色一色の灰色ばかり。街から色付き看板が消えてもう久しいのだが、ここには色鮮やかな赤鬼、青鬼の鬼面の鬼畜米英兵のお面が揃えられていた。

全校生徒が校庭に整列させられた時、校長が壇の上に立った。

なぜか今日は、その背後に、在郷軍人会の者たちなのかどうか、腰に日本刀を下げた軍服を着用した男と、もう一人、国民服姿の男が、後ろに控えていた。

「体力増強！国力増強！お国のために役立つ立派な人間になれるよう今日の雪合戦は全生徒の心身の鍛錬を期するためにここに行われるものであります」

寒々しい空の下での宣言であった。

それでも、雪だるま作りとなれば、秩序も統制もないので、みんなやりたい放題、みんな和気藹々に、雪だるま作りに励んだ。

特に、年少組や、新疎開児童たちに取っては、初めての体験で、みんな嬉々としており、雪だるま作りは、中止された秋の運動会に代わり、改めでの交流機会も全児童に芽生えて、これはこれで成果があった。

このあとは、全校生徒の見守る的当て競技大会の開始で、鬼畜米英兵の立て看板に向けて、選抜選手が固く握った雪玉を投げた。

この時から、軍人服の男と、見慣れぬ国民服姿の男二人が的の側に立ち、投擲（とうてき）選手の一人一人に、大きな声を出し檄を飛ばした。

「憎つくき鬼畜米英兵を撃ち倒せ！鬼畜米英どもはここにおるんやつ」

「何だ！外れや。手りゆう弾を一発、損したと思わんのか、貴様っ！」

いつか、嬉々として見物していた生徒たちも、その剣幕に押されて、緊張の面持ちとなった。手に汗を握る展開ではあったが、無邪気にはみんな応じることは出来なかった。

勝負の決着だけを言えば、五年一組が優勝をした。体のこなしには自信のある三吉が健闘した。権太は力強い雪玉を投げたが、その分的には余り当らなかった。ここはまた宏志登場の場面となった。

長い手足が効を奏して、ほとんど、百発百中、権太が減点になった分も取り返して、六年生組を制して第一位を獲得した。

羽鳥宏志、大いに男を上げるの場面、一躍、級の人気者となった。みんなが盛り上がった競技代会であったが、雪合戦はこれでは終わらなかった。校長がまた演壇の上に立った。

「生徒諸君、よく聞きなさい。雪遊びはただの遊びではありません。武道鍛錬の場でもあります。皇国の兵士が戦場で戦っている今、銃後にいるわれわれとて戦う覚悟があらねばなりません」

寒い風も吹き始めているので、生徒たちは早く教室に戻りたかった。

校長の長広舌が続いた後、今度は全員が雪だるまの前に直立不動の姿勢で立たされた。

雪だるまは学年、級の数を入れたら十三、四個あった。大小の様々な形もさることながら、丸いだんごの目や、ナンテンや、アオキなどの赤い実を口に見立てたみんな苦心の作、それぞれに、面白い表情をしていた。

軍服姿で、日本刀を腰に下げた男が、整列している生徒たちを目で威圧してから、一言発した。いかつい顔をした男であった。

「戦地では百人斬り、二百人斬りで覇を競っておる優秀な戦士もおる。お前ら銃後のもんも、負けてはならんや。ええか！」

男がみんなを一喝した。

事実、新聞報道には、戦地で百人斬り、二百人斬りを果たしたと、実名、写真入りで、戦士を褒め称えた記事が何度も出ていた。

抜き身の日本刀を手に、男は雪だるまの前面にと体を移動させた。

雪だるまを敵に見立てて、しばし対峙した。鼻穴から、気の息なのか、ふっふっと白い息が出た。と、次の瞬間、男は身を翻した。

「憎つくき米英兵ども、われ、一刀のもとに斬り捨てん！」

そう、一人の男が叫（おら）んだ次の一瞬、もう、日本刀は宙に翻っていた。剣先が走り、雪だるまの頭を真横からすぱっと刎ねていた。

こともなげで、全てが呆気なかった。

「ずぶあ」

その鈍い音からして手応えがなく、むしろ、滑稽であった。日本刀だけが空を切っていた。転がった雪だるまだって血を流しているわけでもなかった。次に、抜刀したまま、男は日本刀を高く上段に構えて見せた。

何かの剣流の流儀に倣つてのことらしく、更に、正面向きに構え直すと、白刃が鈍く光った。次の雪だるまの首を剣法の別の使い技を駆使してまた、(は)ねた。その次は、返り討ちの技、隣りの雪だるまの首と胴体も絶ち切られた。あたりに、派手に、雪煙が飛び散った。

微かに、生徒たちは声を上げたが、誰も言葉を呑んだだけで、もちろん、歓声の声とはならなかった。みんな固唾を呑んでいた。

さすがに、抜刀した軍服の男は、全部の雪だるままでは手に掛けなかった。まるで試し打ち、日本刀の切れ味を男は試してみたかったのやも知れなかった。一人、高揚したいかつい顔で生徒たちを睨(ね)め回した。

関係者が学校を去つてからは、後片付けとなった。

残った雪だるまはそのまま放置されるはずだったが、菜園に取られていく分、狭くて運動場の場所が限られるので邪魔になると先生から指示があり、また、全校生徒は雪の片付けを理由にみんな雪だるまを壊した。

雪の上に転がされていた首を切られた雪だるまも、高く積まれた雪山に埋もれた。

下校の帰り道、雪道を分けながら仲良し三人組は肩を並べて歩いていた。

「なあ、ほんまはな。わいらに、竹ヤリを持たせてな。一人、一人、あの立看板の赤鬼、青鬼のにつくき米英兵をな。一突きさせるとこやったんやっつて」

「えーっ、そないなこと、権太、どこで聞いてきてん？」

「あんな。先生用の便所があるやろ。あそこで、わい、ちよい借りしてしやがんでん。ほしたらな。先生同士が言いよった。そこまでやらんでええやろて校長が言うたら、なんや、お前、腰抜けやなて怒鳴られたんやて。」

そいでその続きや。腹いせにな。軍服野郎が日本刀の切れ味見せたる思つて、雪だるまの首を斬りまくりよったんやて。あれはやり過ぎちやいますかて、そないな話やった」

勇輝の問いに、さすが情報屋、権太の地獄耳がびくびくと動き、その存在感を示した。

「あんなん、見せかけやろ。なんで、あないに威張りくさるんやろな。どこ行ってもおんなじや。須磨の家にいたときかて、似た奴がおったで。うちの婆あちゃんを目の仇にしててな。こっちの庭の方に向けて、朝んなると片肌脱いでな。びゅん、びゅんと音立てて、日本刀振り下ろすんや。わしのは真剣やて、近所には言い触らしてて、そいつも、隣保長や。あんなんばっかしや」

「そつかあ。宏志んともそうだったんや。マリお婆ちゃん、もう、鈴蘭台には慣れたんかいな。こっちはえらい寒いなあて、この前に会おた時、

言うとした。今日は雪や。ほんまに底冷えして寒いわ」

「あのな。おもしろい話したるか。うちの家は、鈴蘭台山ン婆番地やろ。そいでな。朝、婆ちゃん起きたら、雪景色でな。わー、どこもここも、真っ白やーて、大喜びしとつてな。うちや、山ン婆ちゆより、こりや、雪女、そやそや、勇輝くんに言うときい。雪の積もってる日は、鈴蘭台雪女番地に番地変更してもらなあかんでて言いよつた」

「そつか、ほなら、この雪道、氣い付けて帰りや。そや、鈴蘭台雪女番地で、早う、可愛い孫が帰って来んやろかと、首を長うして雪女が待ってるで。雪が溶けんうちは雪女や。溶けたらまた山姥番地に戻りや」

「雪女が溶けてえ、元の山姥番地になるちゅうとこだけは、おもしろーてえ、婆ちゃんは喜ぶかも知れんな」

改めて宏志が勇輝に敬意を表した。どこの道路にも、鈴蘭台駅前にも大量の雪が降り積もっていた。家々の屋根も白い。雪掻きがされていなく、人の踏み締めた跡をたどりながら、みんな家路に就いた。

どんよりと曇った空は重くのし掛かっていたが、鈴蘭台の地から見える回りの山々も真っ白で、どこもかしこも銀色世界であった。

ここでは戦争の傷跡すら隠されてしまっているようで、平穏さの時が過ぎていた。

また、粉雪が空の高処（たかみ）から、ふり落ちて来た。そのままの粉雪が勇輝の防空頭巾にもちらちらと降り積もっていた。

真っ白けの雪たるまになる前に、なんとか、勇輝はおかんの待つわが家に帰り着いた。

3

昭和二十年の正月、鈴蘭台の街には、やはり、雪が降り積もっていた。

「年明けからドカ雪続きやな。どっこもこっこも真っ白けえ。みんなおめどさんやで。うちは配給のお酒もらわれへんからお屠蘇はなし。そいから勇輝にはお年玉だけはちよびっとだけやけんど用意したで。姉ちゃんが働いてくれてるからや、姉ちゃんにもお礼言いや」

お年玉袋は登美子が貯めていた古いお年玉袋で、自分の名前を消した上に勇輝へと表書されていた。いつもとさして変わらぬものが食卓には並んでいた。それより、お年玉の中身を改める方が先だった。早速に、勇輝はお年玉袋を開けた。五銭入っていた。

「よーしゃ、これやったらエンピツが二本は買えるで。おかんも姉ちゃんもアリガト。もう、ちびて捨てるとこやってん」

「そっか、エンピツは大事にしいや。エンピツがないと勉強出けんようなるもんな」

「勉強だけはただやからな。一生懸命やるで。そやけんど、この頃は、先生、なんもあんまり教えてくれへんで。自習に、あと外へ出て教練、体を

鍛えておけて、そんなんばっかや」

母親顔の姉に勇輝が学校の実情を訴えた。先生不足に、急に増えた生徒数、学校でもその対処に追われていたのであった。

それでも、このお正月、藤王一家はお雑煮のようなものには有り付けた。

もち搗き屋に出して、のし餅にしてもらうのには金が掛かるので、特別配給のもち米をせいろで蒸して、搦（す）り鉢で擦り、捏（こ）ね回して作ったおかん苦心の作。

「なんや、どろどろ、餅ちゅうより、団子汁みたいになってもうたな。そやけど、これでも、お雑煮はお雑煮やで。おせちはないけど、これでまあ正月気分やな」

「食べたつमりの痩せがまん。そいでもな。療養所ではおせち料理も用意したんやで。まあ、食べ物数え歌程度のもんやけどな」

「姉ちゃんの数え唄、もう、長いこと聞いてへんな。花の仲良し組がもうなってからや」

「止めとくう。もう、そんなん、歌おうてる年でもあらへんしな。イチヂクも、今は冬で季節やないしい」

と、登美子が首を振り二人を軽くいなした。

登美子らの仲良し三人組は、勇輝得意の替え歌とは違う食べ物数え歌を、歌い、いつも、女の子同士で盛り上がっていたのであった。

その元歌は、野菜ずくしの数え歌。

イチヂク ニンジン サンシヨに シイタケ
ゴボウに ムカゴ ナスビに ハクサイ
キュウリに トーガン

他にも各地で替え歌がいくつもあつた。この数え歌は、「さよなら三角
また来て四角…」の替え歌に、つなげて歌うこともあつた。

「イチヂクがのうても、今はイモのイヤんか」

と、すかさず、勇輝が口を挟んだ。

「うわっ、さつま芋のイかいな？そやったら歌えるわ。イモおに、ニンジン、三もサツマイモ、シイタケ、ゴボウとかな」

早速に、登美子が応じてみせた。

「わー、それ、おもしろいやんか。イモづくしかいな？それはようでけるなあ」

そう言ったおかんは腹を抱えて笑い出した。こんなにおかんが笑うのは
久しぶりのことだった。連られてみんなが笑いこけた。

笑いだけはある明るいお正月だった。

やっと笑いの場が収まり、登美子がおかんに女同士の身辺雑記の一つを
語った。

「そやけんど、病院では煮ヅ（しめ）だけは作ったん。うち、料理の勉強

になったわ」

「作ってあげられただけでもええやんか。登美子もよう頑張ってるわ。七分搗きのごはんのおいしい炊き方も、この前、教えてもらた」

「そやけんどあれは火加減次第やからな。うちの家みたいに山の枯れ木を拾って来て、やっと、火を熾（おこ）しているんとはえらい違いや、真似出けへんわ」

「焚き木拾いも大変や。こないに雪が降ったら、山には入れんし、みんな、他所様の持ち山やから、見つかるど泥棒みたいに追い掛けられてまうしな。たどんや練炭、炭なしにはやってはいけへん。そやけんど、みんな、高いもんな。うちではそうは買えへんもん」

大きな火鉢があったのだが、炭火は入ってはず、部屋は寒かった。それでも、お手製の雑煮を啜ると湯気が立ち、みんなの顔は赤らんだ。白い息も洩れた。いつときの家族のぬくもりが感じられるお正月ではあった。

一月三日、まだ、三カ日も明けぬのに、B29が一機、神戸に飛来し、神戸区（現中央区海岸通）に、二、七キロの焼夷弾を投下。

続いて、一月十三日、十八日に阪神間を偵察飛行後、十九日には、鈴蘭台の山の地からは西の海の方角、瀬戸内海に面した明石方面に大量の爆弾が投下された。

B29、六十三機が投入された本格的爆撃で、この時は、軍需工場である川崎航空機明石工場が目標とされた。

山間の地なのに、鈴蘭台地区でも、何度もの警戒警報、空襲警報が発令されるようになった。防空壕が掘られた意味がやっと少年たちにも分る時がやって来たのであった。

4

明石方面に連日のように襲来する敵爆撃機のせいで、このところ、勇輝たちも防空壕に入ることが多くなった。

壊れかけの雑音だらけラジオが警戒警報を発した。“中部軍管区発表”に始まり、紀伊半島を北西に取るコースで、敵機の数まで伝えた。

鈴蘭台地区のみんなはここまでは来はしないと多寡（たか）を括っていたので、のんびりしていたが、山々に守られているとは言いながら、神戸の中心地新開地と鈴蘭台は神有電鉄でも、二十分少々、流れ弾が落ちて来る可能性だつて否定は出来なかった。

一月二十日、午後八時過ぎに警戒警報のサイレンが鳴った。丁度、勇輝のところは食事中、勇輝はイモ粥を啜っている最中だったが、食卓のものはそのままに、防空頭巾を被ると、おかんに手を引かれて防空壕に入った。

夜間は電灯にも黒い布が被され、灯火管制が行われていたので、みんな、早目に夕食を食べる家庭が多かったのだが、登美子の仕事の都合でこの夜ばかりは遅くなった。

植木屋の隅に掘られた防空壕には隣り近所の者が避難するのが建前だったが、鈴蘭台駅とは至近距離だったので、通勤帰りの労働者なども利用することがあり満員になることもあった。この日も、電車の到着時間に警報が鳴って防空壕は満員になった。いつもの隣組、指揮を取っているのは落合だったが、こればかりは有能で、てきぱきと、避難員を誘導した。やつと一段落した。何となく、こんな時には誰かがそれとはない話をするもので、真つ暗闇の中、灯火管制に関する話が出た。

「まあ、ここまではB29は来よりはしまへんやろけんど、こないに防空壕の中で真つ暗闇言うのんも、なんや、気が滅入りまん。そやけんど、明かりが洩れては敵機の目標になりまっさかいにな。うちの近所では、この前、灯火管制中やのに、暗くするのを守らん奴がおって、そいで、いきなり、警防団にやられて、石投げられて窓ガラスががっちゃんですわ。まあ、これは守らん奴が悪いちゆうことになるんやろけんどね」

見知らぬ中年の男が得々としやべった。

「そやけんど、今時、物資不足でガラスもあらしませんしな」

やはり、どこかの誰かが相槌を打った。一座がしーんとなった。

暗いので、誰の顔も分らず、表情も読めなかった。

(なんや。わいのこと言われているみたいやな。がっちゃんかいな。落合のおっさん、いま、どない思ってるんやろ)

本当は勇輝は禿げおやじの顔を見てやりたところだったが、今はみんな

な防空頭巾着用、それは無理な話だった。向こう三軒両隣りの連中はみんな承知をしている話だから押し黙っていた。もちろんのこと、隣保長の男は一言も発しなかった。

場全体が白けているのに発言者の男はなおも後を続けた。

「うちの近所の隣保管理の畑にも、去年の秋、イモドロボーがおりましたな。近所中で、あいつんところやないか言うて、見張ってたら、やっぱりそいつんところで、捕まえて、駐在所に引き渡してやりましたんや」

「昔の村やったら村八分、ひどい話になると、一家中が生け埋めにされたちゅうこともあったみたいすな」

その時、勇輝の隣りにいた登美子が勇輝の片肘をちよんちよんと突ついていた。自分も聞き耳を立てている最中で弟に同意を求めていた。

あとは、また、座はしーんとなって、誰もしやべらなくなり、長くて、退屈な時間が過ぎた。やっつと、警報が解除されてみんなが解放されたのは二時間ほど後のことだった。家に帰されると、真っ先に勇輝は食い残しのイモ粥を啜った。すっかり冷えていた。

「なあ、隣保長、どないな気持ちであの話聞いてたんやろな。身じろぎもせずやで。なんや、息を潜めてたみたいやな」

「畑荒らしは一家生き埋めて話、あれ、ほんまやで。うち、本で読んだことあるん。昔は飢饉が多かったさかいにな。あないな残酷な話があったん

や」

おかんと登美子が防空壕での話の続きをした。

少しは、一家の遺恨は晴れたようだった。

二月四日は日曜日であった。

この日、勇輝はおかんのお供をして神戸市兵庫区荒田町にあるおかんの姉の家を訪ねることになった。この鈴蘭台へ引越しをして来る前は一家が一時住んでいた所でもあった。

姉の家は昔は衣料問屋をやっていたので端切れ布の取り置き分があり、物資不足の折、その提供話にわざわざ出掛けることとなった。

二年余りは神戸の街に勇輝は出掛けていなかった。いつか、古本好きの登美子も連れ立っておかんと一緒に市街地の湊川・新開地をぶらついたが、戦時下のこと、どこの遊興施設にも寄らずに家に帰った。

午後一時過ぎ、寒いが空は晴れていた。

窓から見える景色が楽しみで勇輝は神有電鉄に乗った。曲がりくねった線路を下る電車はのろのろしていたが、勇輝にはその方がゆっくりと外の景色が見えるので楽しかった。

冬のこと、どこも寒々しく見えたが、山また山の地形は、幾重にも折り重なっていて果てがなかった。菊水山トンネルあたりを越えると、時折り、市街地が現れては消える。

いくつかの駅を過ぎると、やがて、長田駅となり、このあたりからは眼下の街並みが目近に望めた。それほどに、狭い線路道を走るのろのろ電車

には、四季折々のいくつもの風景が織りなされていたのであった。窓の外に映る一つ一つの景色は、あくまでも通り過ぎて行くだけの風景ではあったが、人の心を和ませる安らぎのようなものがあるのだった。

飽かず、窓の外を、勇輝は眺め遣っていた。

藤王一家が住んでいた前の家は、強制家屋疎開の対象とされ、荒田町の街並みからは消えていた。更地だけが寒々しく残されていた。

この日、荒田町の伯母宅に着いていきなりに空襲警報が発令された。このあたりは平坦な地にある市街地で民家が数多くあった。

「なんや。狙い撃ちみたいやな。えらいとこに来てしもうたわ」

おかんが悔やんだが時すでに遅しで、勇輝は近くの防空壕に引き入れられた。こんなところで、防空壕探検をすることになるうとは思ひもしなかったことだが、ここの防空壕の作りは鈴蘭台に比べると市街地のこととて、格段に大きく頑丈に出来ていた。

防空壕の様子を窺っているどころか、この後、勇輝は大変な体験をすることになった。

この日、敵機は八十数機、午後二時十分、午後九時二十二分、午前二時二分の三度にわたって飛来、神戸市湊東(そうとう)区、兵庫区、須磨区、林田(はやしだ)区を爆撃し、特に、主に海岸地帯に位置する軍需工場などは集中的な爆撃を受けた。

市内では初めての死者も二十六名と、後の資料によれば発表されてもお

り、この日は、多大な被害が生じた日ともなったのであった。

「しゅーしゅるるーっ」

これは、街を焼き尽くす焼夷弾が空から降って来る音だった。勇輝は防空壕にいながらにして初めてこの焼夷弾の落ちて来る空恐ろしい音を耳にした。防空壕の外側は土が高く盛られていて貫通する懼（おそ）れはないとされていたが、この音を耳にした者が生きた心地がしないと言うのは本当のことだった。

「ここから出たらあかんよ」

そう言い置いておかんは消火のために壕を飛び出して行った。無謀だったが姉の家の回りの家が被弾、すでに燃えている家屋もあるようだった。見知らぬ人の中で勇輝は首を竦めて、じっと、退避の時間を過ごした。

何分経過したのか、再び、おかんが戻って来て切迫した声で勇輝に告げた。

「なんや。流れ弾がな。近所に落ちたみたいやけど、この後、どないなるか分からんよって、うちらは家に帰ろっ。神有電鉄が停まってしもうたら、うちら、鈴蘭台に帰れんようになるからな」

おかんのこの判断は正しかった。

後刻、敵機はこの地一帯に焼夷弾を落とし、姉の家も罹災して家屋は全焼の過酷な仕打ちに遭うこととなるのであった。

逃げるようにして、一目散、勇輝はおかんに手を握られたまま、引き摺

られるようにして道を歩き、やっと、神有電鉄の湊川駅に辿り着いた。

荒田町からは十分ほどの距離だったので母子は救われた。

元来た道を鈴蘭台にと戻る電車は他の地区などから避難する人たちでごった返していた。大方が生活物資を背負い込んでいて、駅構内に所狭しと並んでおり、勇輝らも直ぐには電車に乗れず待たされた。

夕刻間近い時刻にやっと座席を確保した。のそりとだったが、電車は北に方角を取った。その間に、勇輝は電車の窓から、神戸の西地区の街々が焼夷弾攻撃を受けて、赤く燃え上がっているのを目撃した。

長田駅は高台に位置するので、火影を写した赤い空までも望めた。その後塵を拝しながら高山列車はのろのろと、それでも、一所懸命に急な線路道を登りに登ったのだった。

この日、おかんと勇輝は無事に家に辿り着いた。

夕暮れを思わせる時刻のことだった。

鈴蘭台は直接の戦禍には見舞われなかったが、深夜、午前二時過ぎ、よく寝入っているところを、また、空襲警報発令で勇輝は叩き起こされて防空壕に入ることになった。この夜ばかりは、みんながみんな神戸空襲の恐ろしさを防空壕の中では口にした。

すでに神戸側の南に位置する山々の暗い空は赤く燃えていて、いつもとは違う夜の光景となっていた。鈴蘭台にいてもこの異変は誰の目にも明らかで、罹災者のことをわが身に置き変えてみんな恐怖感を口にしたのだった。

た。赤い空を見て「きれいやな」と言った子供たちもいた。確かに夜空はきれいだったが勇輝は複雑な思いで赤い空を見た。燃えている空の赤さは底気味の悪い勃（おこ）りの火の色が隠されていた。

この夜、悲しい出来事が勇輝の身边で起きていた。

この翌日、神撰新聞の報道写真部員の加賀美理紗の父親が取材中に被弾し殉職したことを勇輝は知ることになった。

同じ日に神戸の地に勇輝も身を置いていた。そのことに勇輝の思いが繋がった。鈴蘭台から一步を踏み出したばかりに、勇輝もまた戦争の実態そのものを思い知らされることとなったのであった。

5

「この前な、わい、口笛吹いて歩いてたらな。どっかのおっさんに怒られてん。なんや、精神がたるんどるんやて。かなわんわ」

学校からの帰り道、宏志が言った。

「人がおるところで吹くさかいや。よっしゃ、今日はな。鈴蘭台道草横丁の、もつと、横丁の方に案内したるわ。それに道草横丁やと、坂道の直ぐ下が消防署 あそこ警防団の本部もあってうるさそうなおっさんがうろろしてゐるさかいにな。あそこは避けて稲荷神社の裏側からな。頂上に登る道や。」

山あり谷ありやけんどな」

権太の発案で三人は道草横丁の外れのけもの道に足を踏み入れることになった。近くに、商業学校があり、その運動場の側を迂回すると、この目的地にと辿り着く。だが、その横道に外れた途端に、とてつもなく大きな音で警戒警報のサイレンが鳴った。

警報が出ると、近くにある防空壕に入り、避難するのが決まりだったが、三人はいつものように道草中、そのまま丘の地を目指した。

山あり谷ありと言うほどの道程でもなく、草地の山坂に取り付いて七、八分、息は切れたが、彼らはやっと目的地に着いた。

丘の上に立つと、鈴蘭台の南西側に建ち並ぶ家々を眼下に収めることが出来た。ここまで来ると、誰も干渉する者はいない。

三月中旬の午後の時刻、春の息吹もそこそこに感じられる季節だったが、山頂に来るとさすがに寒い。三人は「おお、寒う」と言いながら肩を竦めた。吐く息だって白い。

「石投げをして体をあたためようや」

こう言う時は、直ぐに、権太が率先する。小石を拾うと、三人は街の方向に向けて投げた。目の先は熊笹の斜面になっているから、石の礫（つぶて）は、青い波を形成している笹藪の向こうに消えた。そんなことをして遊んでいる内に、今度は、サイレンは空襲警報に変わった。見ている風景は何も変わらなかったが、風だけは少し強くなった。

「なんや。喧しい空襲警報やな。早（は）よう、終われ、早よう終われ。そ

んなん、関係あらへん。ほんま、耳の鼓膜が破れてまう。羽鳥宏志はや。口笛を吹きたい気分なんやから」

両耳を手で塞ぎ宏志が言った。

やっと、執拗なそのサイレンの音が止んだ。

「かなわんな。やっと、終わりよった。わいな。今な、ちよびつとだけやけんど音楽の練習をしてん。こつそりとな。婆ちゃんが音をうんと小（ちい）そうしてレコードをな。わいに、聞かしよるねん。サクソフオンは喧しゅうて吹けんでも口笛は吹けるやろて、な」

「口笛言うても、ほなら、それ、あの、敵性音楽ちゅうやつかいな」

「そないなことにはなるけんど、ここやったら、山ん中、喧しい言うて怒るんは小鳥ぐらいなもんやろ」

「ええ、ええ、わいらかて、ちよびつとやったら、聞きたいわ。なあ、権太あ」

勇輝が権太に問い質すと、権太も頷いた。

「ほな、な。口笛マーチや」

「なんや。マーチて？」

「敵性言葉で行進曲のことや。ほら、『聖者の行進』や。婆ちゃんの好きな。これ聞くと婆ちゃん、元気出るて言うとった」

「マリお婆ちゃんの言うことやったら間違いないで」

権太の一押しがあつてから、宏志は口先を尖がらせた。首も振り振りの

口笛演奏だった。

「♪ぴゅぴゅぴゅーぴい、ぴゅぷうぴい、ぴいぴいぴいつ、ぴっぴいぴい
い…♪」

勇輝と権太は耳を澄まし、じっと、聞き入った。「ぴゅ、ぴいぴいぴゅ、
ぴゅぴゅぴいぴゅ、ぴゅぴゅぴい。ぴい、ぴっぴーっ」の音のリズムに乗
って軽快な曲が吹き鳴らされていた。『聖者の行進』の一節であった。もっ
とも勇輝と権太にこの曲の良し悪しが分っていたのではなかった。口笛の
音だけは快かった。

いつか、時が過ぎていたのだが、この時、権太が「ああつ」と、声を上
げ、上空を指差した。西南方向の空に、いつの間にかB29が一機姿を現
していた。それもかなりの低空飛行で、いつもの一万フィートの高度には
なかった。それで、銀色の翼は一層に大きく見えた。偵察飛行中なのかも
知れなかった。

急に、地上高射砲から、今度ばかりは届くぞとばかりに砲弾が放たれた。
みんな、届かぬままに空中で破裂した。やはり空砲だった。

「なんや。わいの口笛で敵のB29を呼び寄せてもうたな。あほらしい」
それでも、見物している分にはまだ余裕はあった。驚いたものの宏志も
冗句を口にした。

と、この時、しばしの間合いの後、信じられないような光景が空の上で
は演じられた。小さな日本の戦闘機が一機、空の要塞B29を目掛けて体

当たりして行った。あつと言う間のことだった。両機が接触した瞬間に、一点の黒い煙が空を焦がした。その黒い煙の塊りは、ぱつと広がり、そして、たちまちの内に火煙と化して空に散った。

「わーっ、体当たりや」

「命中や。ワーツ、なんや？あれえ？」

「こんなんあるとは思わなかったで」

三人三様、感嘆の声を漏らした。体当たりした日本の戦闘機飛燕（ひえん）は伊丹軍港から発進したものであった。

この体当たり攻撃を食らったB29は尾翼の一部を挽ぎ取られていた。機首を下げながら大きく旋回したが均衡を失った。

次には、B29の機体はばらばらになって地上に向けて墜落して行った。

黒点だけが、なお、空に残った。

と、見上げている空の上で、二つ、白い落下傘がぱつと開いた。

ふわふわと風に乗り落下して行く。

三人の少年たちが見ていた丘地からだど、菊水山か、再度山の方角のように見えた。

「うわーっ、落下傘や。えらい、近いとこやで、あれてえ」

思わず叫んだ権太の文句通り、実際に、B29の巨体は四分五裂した後、

この時、再度山の近くの山中に落ちていたのであった。

空に浮かぶ落下傘だけは緩慢な動きそのままにまだふわふわと空を漂って

いた。やはり、方角は西南の山々の上空であった。

その頃から、坂下の消防署あたりが騒がしくなり、山頂にまでその騒ぎは伝わって来た。

「どないするう？空襲警報発令中や。しゃーないから、もうちよつとここにおろか」

勇輝が自分の判断を二人に示した。

「そやな。こないな時に、その辺をうろうろしてたら、どつかれてまうもんな」と、権太。

「なんや、悪魔の口笛みたいやな。わいが呼び寄せてもうたみたいやな。口笛、吹くのん、わい、しばらく、止めとくわ」

少しやり過ぎたかと宏志は反省して見せたが、整ったその顔立ちは悪魔顔ではなかった。やつと、元来た裏道から三人は脱出した。

ところが、この後も、ただならぬ光景を少年たちは目撃することになった。鈴蘭台駅方向にと向かう帰りの道すがら、警防団や、隣保組織に關係している男たちが、血相を変えて、駅前通りを走り抜けて行った。もちろん、さつきまで三人がいた坂下の一本道の方角からも、男たちは集まって来た。男たちは有馬街道のある方角を目指していた。何人かは手に日本刀を握り締めていたので、ただならぬ事態が発生しているであろうことは三人にも分った。

「なあ、敵兵狩りやで。落下傘、あの方向に落ちてるもんな」

権太の推理は正しく、この時、生存者の敵兵二名が再度山の山腹近くに落下していた。

「みんなえらい剣幕やもんな。わいは、家にもう帰るわ。何が起ころや分からんもんな。婆ちゃんが心配しよるからな」

宏志は、勇輝と権太とは別れて早々に家に帰って行った。落下傘だと、山に囲まれているこの鈴蘭台の街にだって、敵兵は落下して来る危険性ありと言うことで、この事実を知らされ、今度だけは、宏志もこの出来事は度肝を抜かれたようであった。

結局、事の結末は、軍事機密に関する事で、大人たちの間では何も語られなかった。山狩りだけはあったようで、この翌日、学校仲間でもこの一大事は話題になった。

勇輝を驚かせたのは、本当にB29が再度山の直ぐ近くに落ちたらしいという話だった。

みんなの耳に入ったのはそこまでであったが、噂話には尾びれが付いて、地元の警防団員が日本刀をふるって敵兵を虜殺しにし、成敗したとか、山中で交戦したとかの自慢話もまことしやかに飛び交った。

戦後、この事件に関しては新事実が明らかになるのだが、少年たちには、色々な出来事を合わせ類推するだけの力はまだなかった。

勇輝の場合は、平穏だとばかり思っていたこの地を揺るがせる大事件が、兄と一緒に登った再度山が舞台になっていたことで、心の内かなりの衝

撃が残った。

鈴蘭台の山の地の「安全性神話」が崩れ去って行くようなこれは大事件で、もう直ぐ近くにまで、現実には、敵はやって来ていたのだった。

6

昭和二十年三月十七日未明にかけて神戸はこれまでにない大空襲の被害を被った。B29の爆撃は苛烈を極めた。

西地区の兵庫区、林田区、暮合(ふきあい)区など市街地のほぼ半分が焦土と化した。敵機の来襲は一挙に三百余機、消失家屋数が六五七二八戸、死者、二五九八人。何より、海側から焼夷弾を落とし始め、六甲の山際へと逃げた一般市民を今度はまた狙い撃ちにし、焼夷弾を浴びせると言う無差別爆撃が敢行されたことで被害が拡大。世に、神戸大空襲と伝えられる未曾有の戦禍を招くこととなった。

海に沿い、山に囲まれた地形が逆に敵側に利用されたもので、逃げ場を失った市民が標的とされたのであった。

これ以降、日本本土への空襲は日常化し、神戸の街もまたその例外ではなくなっていく。

四月、勇輝らは国民学校の六年生になった。

改めて、小部国民学校には疎開児童が多くやって来た。この、つい先日

の三月の大空襲とも、これは無縁のことではなかった。

すでに都市部では地域ごとの集団疎開も実施されていたが、更に縁故疎開も奨励され、その余波で、鈴蘭台地区にも転入者の数が増えた。緊急対策として、新たに、疎開児童を中心に、小部国民学校六年生にも、一学級が増設されることになった。

新しく出来た二組の級長は加賀美理紗、そして、副級長には疎開児童第一号の羽鳥宏志が適任者と判断されて選ばれた。

都会のカラスたち、村のカラスとも仲良くすべきなので、何人かは村落の者も加えられ、三吉もその二組の一員になっていた。

「なんや、知らんやつばかりの都会のカラス組にわいは編入されてもうたで。なんや、落ち着かへんわ」

組変えのあとで全員が各々の教室への移動中、廊下で顔を合わせた宏志が勇輝に言った。

「ええ、ええ、白岩ヒカル子みたいな驚きお嬢様はおらんけど、みんな都会組は頭よさそうや。しっかりもんの加賀美理紗が級長やから、宏志とは、ええ組み合わせやて。それにな。三吉かて、南谷の池で助けられてからは、ええ奴に変身しているやんか。仲間の一人や。まあ、羽鳥宏志、しつかりやりや」

「まあな。そないなことかあ」

と、頷いたものの、このところ、宏志はちよっと元気がないように見え

た。定期的に手紙が届いていたのに、父親からの通信がこのところ途絶えていて気懸かりだったのだ。

更に、戦局は悪化していて、三月以降本土空襲も本格化、また、南洋諸島に派遣していた日本軍は各地で玉砕が相継ぎ、この四月の初めには沖縄では米軍が上陸を開始していた。兄の勇の消息も、一切、分らない状況にあったが、この年、一月にはフィリピンルソン島に米軍が進攻、実は、この時、兄の勇はこの激戦地に身を置いていたのだった。

少年たちは、相も変わらず、食べ物戦争を繰り広げていた。米の配給量も減り、かつ、多くの疎開児童、また、戦災の罹災者なども鈴蘭台近辺の地に流入して来たことで、一挙にこの地の人口も膨れ上がり、食べ物への切迫感も増していた。

これまでは、学校では、勇輝や権太は弁当持参組だったのだが、弁当すら彼らも持つて行けなくなり、昼飯時は家に帰って食事をする組の一員になってしまった。

いつか、村のカラスどもにからかわれた山森も、あれ以来、弁当なし組に入っていた。彼ら弁当無し組の児童たちとも思わぬ交流が勇輝も権太も生まれることになった。

何人かの者は家に帰っても昼飯は用意されていないので、近くの森で腹ぺこ時間をそれなりに過し、何食わぬ顔をして学校に戻っていた。

山森もその一人であった。

子供たちにも、体裁を繕うようなところは残っていて、サツマイモの蒸したものの代用食を、そのままに弁当代わりに持参するのには抵抗感があり、勇輝も家に帰って代用食は口にするものの、結局は、弁当無し組を選んでいたのであった。権太もそれに倣った。

そんなある日、担任の辺見先生が今度は応召されて出征する身となった。三十八歳だったが教職にある者も、その対象とされた。

徴兵検査で甲、乙、丙の、丙種は兵役を免除されていたが、それらの者も動員されるご時勢となっていたのであった。

「お国のために立派にわたくしは戦ってまいります。今や国民が一丸となり米英に立ち向かう決戦の時、わが身を犠牲にしてもわたくしにはみなさんを守らねばならぬ義務があるのであります」

全校生徒が集まった狭い校庭の演壇に立ち、辺見先生はみんなにお決まりの別れの挨拶をした。辺見先生はみんなの前から呆気なく消えた。桜の花がそろそろ綻び始める四月初旬の日のことで、蕾を膨らませた桜の枝々が、重そうな枝を垂れて春風に揺られていた。

後任の担任には近くのお寺の住職に嫁いだ四十半ばの年齢の代用教員岡林先生が赴任することになった。薙刀（なぎなた）の名手で、この日から、女生徒たちは教練の時間には薙刀の实地教練を受けることになった。

「なあ、どないや。今度来た疎開組、みんな、おとなしそうで、なんや、元氣ないな」

「そやかて見知らん者同士や、そないには口はきけへんで。宏志もなんや、
氣いを使うて、そんなこと、言うとつた」

学校からの帰り道、勇輝と権太は肩を並べて歩いてた。二人っ切りだった。話題にされた宏志は、「わいは今日は口笛のお練習があるねん。白岩のお嬢さまみたいやろ。へへ」と、ひやかされる前に一言、断りを入れて、途中、二人と別れて帰った。

いつか、二人の足は鈴蘭台道草横丁の方角に向かっていた。相変わらず坂下の消防署のあたりには団員らの出入りがあった。その横をすり抜けて丘の上にと二人は坂を上がった。

急に、春らしくなっていて、道々、土筆（つくし）が顔を覗かせていた。おかずには格好の土筆採りに熱心なおかんの出番がそろそろやって来る時期になっていた。

春風は丘地の下草のあたりから這い上がって来て、とても、心地良かった。生え立って来た緑の草々もすでに春を告げていた。

台地の上から見る鈴蘭台の街並みもは、今は春景色ののどかさの中にあ
り、平穩無事のままに春を告げようとしていた。

近頃の鈴蘭台情報を権太が口にした。

「あのな。ちよつとした話、教えたるか。散髪しに来よる大人の話やとな。
落下傘で降りて来た奴、二人、捕まったって話や。どうやら、切り裂いた
言うんは嘘みたいやな」

「なんや、再度山の辺も物騒になって来よったな。兄ちゃんと再度公園に行った時、鈴蘭台は山と山に囲まれていてるさかいに安全やと言うつたのに、落下傘が降りて来てから、あの辺、おかしゅうなってもうたな」
率直な気持ちを勇輝が披露した。

「あのな。それから、再度山の近くにはB29のばらばら機体があちやこちやに落ちててな。大龍寺のお寺はんが発見して、そいで憲兵なんかやあって来よって、捕虜を二人、捕まえたわけなんやて。その後があるねん。落下傘で降りて来たあの敵兵な。どないなことになると思う？」

「そらあまあ。捕虜やからな」

「うちのおとんの話やと、ああ言うんは軍事裁判に掛けられて、無差別爆撃の罪でな。どいつもこいつも打ち首やて」

「打ち首？あの、あれかいな？」

と、言いながら、勇輝は手で首を刎（は）ねる仕草をした。権太が首を竦めた。

「なあ、この前、雪だるまの首を日本刀で斬りよった奴がおったやろ。おとんにあの話したらな。そないに、雪だるまにみたいに人間の首が斬れるて思うてんのか。そないなことする奴もアホ、見せられてる奴もアホやて言いよった。人間の首は骨があるよってに、首刎ねたらな。がぎって音がするねんて」

「…そないなことなんや」

「あのな。これからがほんまの秘密話や。ちよつと耳を貸してみい。再度山あたりのどつかにな。ええか、捕虜收容所があるねんて」

耳を寄せて来て、権太が囁いた。

「なんやあ。捕虜收容所？ほんまかいな？」

「そいでな。わい、守田の奴にちよびつとだけやけんどそのことをな。訊いてみてん。ほしたらな…」

そこで一拍（いっぱく）を置き、もったいをつけてから、権太は話の続きを勇輝の耳に吹き込んだ。

「なんや。神戸はな。日本の中では一番捕虜が多いのやて。あちやこちや、海の方にも山の方にもあつて、再度山にかてあるんどちやうかて、あいつ、澄ました顔して言いよつた」

「へえー、守田がかいな？あいつ、何でも知ってるんやな」

「そやそや、有馬街道をな。そろそろ歩いてる、捕虜を見たもんもおるんやで。そないな話をしてた客もおつたな。守田も言うてるぐらいやから、再度山のどつかにも捕虜收容所あるんどちやうかいな？わいはそないに睨んでるんや。そいで、突っ込んで、そのこともな、守田のやつに、わい、訊いたつてん。ほしたらな。そなん、お前、スパイヤでて言われてもうた。あいつ、怖いでえ」

「怖いもんなしの権太が売りもんやのに、憲兵はんには権太も弱いんや」
「そう言うこつちや。憲兵隊に捕まらんよう、勇輝はんも気を付けなはれ

やて、マリお婆ちゃんら言うところやな。この話は宏志にも教えとかんとかんな。そないしょ」

「あいつ、今頃は口笛の、お練習中やろ。そんなん自分には関係ないて、素知らん顔をして、ぴゅぴゅぴゅて、口笛吹きよるで」

「へへ、敵機かて呼び寄せてまう、あいつ、口笛魔人やもんな。あついにもかなわんわ」

二人は自分たちの身边に起きたことを、あれこれと話し合った。他愛ない話が多かったが、一部は、戦争の実態にも及んでいた。

亀福理髪店を経由して流れて来る大人たちからの情報は、大要はその通りであったが、亀福理髪店にやって来る大人たちの地獄耳をしても、実際に起きている事実を少年たちが知るのは、ほとんど不可能なことであった。

落下傘で降下した敵兵のその後の始末記は、戦後明らかになった情報で、改めて、みんなが知ることになるのだが、この時点では、その真実のほどは伏されたままであった。

「陸の孤島で言われてる鈴蘭台やけんど、落下傘部隊なんか一杯落下して来よったら、山も海もあらへんで。ほんまに、この前の落下傘、わいらの目の前で落ちて来よったもんな。わー、言うてる間に、やられてまう。な、権太やったら、そないな時、どないするう?」

「どないするてえ?ほら、逃げるに決まってるやんか。こないに大(おお)きゆうて広い六甲の山々や。どこまででも逃げられるで。ほんま、なに言

うてまんねん、ひやくまんねんや。ひやくまんほどな。落下傘部隊が降下しよつたらやの話や。そんなん来よらへんて」

権太が胸を張り言った。正直な話、勇輝も、そうは思った。

権太が口にしたように、二人が眺めている山々の峰は堅牢の守りを誇っているようにも見えていた。鉄壁そのものだった。

山の稜線には春霞が懸かっついて、空との接線はぼんやりしていたが、それでも、山また山、山は、幾重にも重なり合い、更に、伸びやかに山裾野を広げて、遥かな果ての果てまでも、わが領域としていた。

だが、この数カ月後、日本の死命を制する原子爆弾が昭和二十年八月六日に、広島に、そして同年八月九日には長崎に投下されることになる。

瞬光の瞬きでしかない原子爆弾の核分裂爆発によって、広島では十数万人余、長崎では七万余の人命が、瞬時に奪われた。

広域に亘るこの大量殺人兵器が産み出されたことで、もはや、山もない、海もない広域の地の破壊が可能となって行くのであった。

ここ、鈴蘭台地区は、やはり、山また山に守られていたことになるのだが、この時期、危うさを告げる警鐘の報せが、もはや、耳近くで、鳴り始めてもいた。敗戦を数ヶ月後に控えたこの春の時期、季節の巡りそのものは、いつものような平穏さを伝えていたが、すでにして、歴史の転換期に向けて、刻一刻、穏やかならぬ状況にと、戦局の方は向かいつつあったのであった。

第七章 烈日の夏が過ぎて

第七章 烈日の夏が過ぎて

1

夏一天、真つ青な夏空だけは果てもなく天の上にあった。

輝きを放つ熱射の矢が地上には燃え立ち、どこにも、のたりとした風さえも吹いていない、そんな一日のことだった。

朝から蝉が一斉に束の間の夏を告げて、何かを知らせるように喧騒な鳴き声を立てていた。六甲の山々はただ泰然とそこに在った。

青緑の山肌が一層の勢いを増し、なお山懐の深さが夏の季節を旺（さか）んなものにしていた。見渡す限り、やはり、天と共にある。

ぎらりと、昼間の太陽が灼熱の光を投げた正午、天皇の雑音交じりの玉音放送がラジオから流された。みんなが耳を傾けた。

昭和二十年八月十五日、日本が無条件降伏をし、敗戦が告げられた日のことである。何がどうなっているのか誰にも分らなかつた。

一方的に、現人神（あらひとがみ）とされた天皇の宣言文が読まれ、日本が太平洋戦争に敗れたことが告げられたのであつた。

この日、この時刻、勇輝は南谷の池の畔り

で鬼ヤンマを捉まえることに夢中だった。

池の水面をすいすいと、これ見よがしに飛んでいたのを狙いすませて追
い、草葉の上で羽を休めたところを、人指し指で小さな円を描いて目くら
ましを食らわせ、まんまと、鬼ヤンマを仕止めた。トンボは複眼だから目
が回り、動けなくなってしまうのだった。

鬼ヤンマは動きが早く、高い空を飛ぶ習性があるから大収穫だった。

夏休み最中、今の時期は、子供たちにとっては、夏の盛り、水浴びをし
て過ごすのが一番だった。

相変わらず南谷の池では、泳ぎ上手な三吉が目立っていた。

今年は宏志も加わっていて、ここで、また、宏志の抜き手速泳の泳ぎが、
三吉に負けないことをみんなは知った。

「なにやらせても、宏志はこなしてしまうんやな。ほんまに、かなわんわ」
泳ぎの腕は権太は確かだったが、その権太が舌を巻くぐらいだから、宏
志の泳ぎぶりは際立って見えた。これは権太の言である。

疎開児童の何人かも、宏志に誘われて泳ぎに来ていたので、今年の夏は
いつもの年より参加人数も多かった。

その分、賑やかで、このあたり一帯は、活気に満ちた子供たちの張ちき
れんばかりの元気な声に占拠されていた。

池の水は冷たいから、みんなそうは長くは泳いでいられない。いつもは、

池の畔りや、平らな草むらの地を見付けて、みんな甲羅干しをするのだが、何しろこの暑さ、みんな早々に池に飛び込むので、会話の方は弾まず、今日ばかりは池の水面は子供たちの小さな頭で占められた。

この日、子供たちはみんな家に帰ってから、戦争が終わった事実を知ることになった。家に帰るなり、勇輝はおかんに声を掛けられた。おかんの声はいつもより活き活きしていた。

呼び止めた時も、心持ち、その口元は綻んでいるようにも見えた。

「勇輝、なんや、日本は負けてしもうたみたいやで。近所もな。みんな大騒ぎしてて、これからどないなるんやろて噂してるわ。そやけど、勇は命は助かったんやと思うでえ。そやったら、こないに嬉しいことないわ。もう、戦争する相手はおらへんのやから、命、取られることないもんな。そやろ」

「ほな、兄ちゃん、家に戻って来るんや」

「そらそうや。そやけどもな。本土におったんやったら直ぐにでも帰って来れるんかも知れんけど、海の方の遠いところにも連れて行かれてんやったら、これはえらいことや。どないなるんやろ。母ちゃん、それ、心配してるんや」

勤めに出ていて登美子はいなかったの、家に勇輝が帰って来るまでおかんは自問自答していたのか、勇輝に自分の疑問をぶつけた。

「帰って来るに決まっているんや。うちの兄ちゃん、運が強いんやろ。」

船で遭難した時かて、運が強いから帰って来れたて兄ちゃんも言うと思ったやんか」

「そやな。あの子には持ち合わせた運の強さがあるさかいにな」

そんな会話を交わしている内に、朝番を終えた登美子が急ぎ足で家に帰って来た。

「母ちゃん、日本が負けたんやて。病院でもえらい騒ぎになってるわ。病院は大丈夫やろけど、本土に米兵が上陸して来ることになるんやから、あちやもこちやもえらいことになるんやないかて心配してる人もおったで」

「隣保長はな。こうなったら、本土決戦やて息巻いてたで。隣保のみんなで玉音放送を聞いた時にな。そないなことを言うて、まだ、みんな気を引き締めてかからんといかんて隣保のもんは言い聞かされてるんや」

「そやけど、よかった言うて喜んでた人もおったで。もう、殺し合いせんでも済むんやから、戦争や戦争やて大騒ぎせんでもええんやし、焼夷弾が落ちて来るんも心配せんでもええて。そいでな。ここ二、三日、空襲警報ものうてえらい静かやったんは、その前触れやったんやて、その人は言うてた」

「そやな。B29かてもうこれからは飛ばんのやろな。さつき、勇輝とも話してたんやけどな。勇がどないしてるか、母ちゃん、えらい心配になってるんや。なあ、登美子やったら、勇、今頃はどないしてると思う？」

やっぱり、勇輝相手では頼りなかったらしく、おかんは改めて登美子に問うた。

「はよう、兄ちゃんには帰って来て欲しいわ。なんや、軍隊は解散されてしまふんやから、直ぐにでも、兵隊さんは家に帰されるんやないかて誰かが言うとつたで。それにな。もう、お国のためにはならんのやから、ただめし食わせることないやろて、病院の炊事長のおっさんなんかえげつないこと言うとつた」

「そらそや。軍需物資の米なんか一杯どっこかに隠してあるんやろからな」
「そやけど、みんな、そんな敵に没収されて、なんや、もつと食うもんのうなるて話もしてる人がおつたで。負けた国は相手の言いなりや。碌なことは起きんでて」

「…そないな話になるんや。そやけど、命さえ大丈夫やったらええ。勇がな。おってくれたら頼りになるさかい、母ちゃんはそれだけが望みなんや。あんな親孝行な子おらへん」

「うちも兄ちゃん大好きや。兄ちゃんのハーモニカ、はよう聞きたいわ。兄ちゃん、なんの曲を吹かせても名人やからな」

「そやな。うちにハーモニカはおいて行つたからな。なんもかも忘れて、あの子が一番、自分に夢中になつてる時なんや。な、ハーモニカを吹いてる時は」

おかんと登美子の会話はこの後も延々と続いていた。勇輝は耳を傾けて

いた。誰しもが錯乱し、混乱した一日だった。

三年余に亘(わた)る太平洋戦争の日々、その全てを語り尽くすには、誰しも、余りにも多くの時日を要する話ではあった。

夕暮れ時、この日の夕陽は輝きを失うまいとでもするように、いつまでも、山の端に在った。夏の一日は長い。

山と山が重なった稜線の上を、動かぬままに夕陽は止どまり、やがてのこと、静かな表情になった。なおも、眼下の山々をやさしく、夕陽はあか
ず眺め遣っているように見えた。

2

「よう来たな。みんな、これからも元氣一杯にやりや。何事もな、元氣にや。にっぽんは戦争に負けてしもうたけど、あんたら若いもんが戦争に負けたわけやないで」

勇輝と権太を迎えてくれたマリ婆さんの、元氣一杯のこれが第一声であった。戦争が終わってみんなは初めて会う。

やはり、マリ婆さんはおしゃれで赤も混じった花柄模様のアッパパーを着ていて、いつもの小粒の真珠の首飾りも身に着けていた。

徴用されていた宏志の父親の消息を、元ジャズマンの友人から伝えられ、マリ婆さんはほっとしてもいたのであった。

軽度の治療のために軍病院に入院中に、その友人とは顔を会わせていて、
どうやら無事に終戦を迎えられたと言うのがことの真相のようだった。こ
の話は、直接に宏志から聞かされ勇輝も知っていた。兄の帰還を待ちわび
ている勇輝としては羨ましい限りであった。

二人は応接間代わりの六畳間に通された。

どこで仕入れたのか、西瓜が三切れ、白い皿の上に乗せられて、卓袱台
の上に用意されていた。そこに、二人は招き寄せられた。

「さあ。西瓜でもお上がり。にっぽんが負けてお祝いするのんも気が退け
るけれど、この先の畑で見付けて、大枚をはたいて買うて来たんや」

「うわ、西瓜や」

権太は直ぐ様に反応した。

勇輝もいざるようにして進み、ご馳走の前にと顔を近付けた。

「西瓜こそが夏の食べモンやで。八月十五日を忘れんようにな。あんたら
しつかり食べなはれ。それにな。灯火管制の暗い夜、あんなんともサイナ
ラや。ぱーと世の中、明るうなつたと言うことや。よかった、よかったあ」

後は、マリお婆さんの言うことは、少年たちは余り聞いていなかった。

宏志、共々、夢中で、少年たちは西瓜にかぶり付いた。

白い皮がやつと残るほどに、少年たちが西瓜を食べ尽くした時、マリ婆
さんは、もう一言、勇輝と権太に言って聞かせた。

目の色が活き活きと輝いていた。

「宏志にも言うて聞かせたけど、みんな、あれやりたいこれやりたいで、色々あるんやろ。そんなん、兵隊さんになるのんだけが、世の中やなんておかしいわ。もう、兵隊さんになろう思うてもそれは無理やけどな。自分の好きなことやれるんが一番やで。婆ちゃんはそう思うてるう。そや、今日のな。取って置きはや。西瓜なんかやないで。うまいモン食べたら、今度は耳の掃除や、耳の掃除い」

「また、婆ちゃん、そないな遠回しなこと言うわんでもええて。わいの口笛も、上手（うも）うなったけど、本物をな。他のもんは耳にしてないんやから、レコードの曲を聞かせたるて、はよう言わんかいな」

「なんや。宏志が先に言うてしもうたな。ほなら、マリ婆ちゃんの約束を果たすでえ。レコードのジャズの曲、蓄音機で聞かせるよつてに、こつちの部屋に、オイデヤスや」

京言葉のオイデヤスの文句まで用意してのもてなしぶり、マリ婆ちゃんは上機嫌だった。

二人とも一階奥の洋間のお婆ちゃんの部屋に案内された。

マリ婆ちゃんの足取りは軽かった。あの高い屋根裏天井のある秘密部屋で、板の間に座布団がもう二枚用意してあった。

マリ婆ちゃんが二人の正面に座った。

「ええか。金属製曲がり尺八なんかやないで。本物のサクソフォンの音色や。曲の名前は、『聖者の行進』で、歌っているんはルイ・アームストロン

グ、ほんまは宗教歌の黒人霊歌で、亡き人を悼む曲なんやけど、心に沁みる曲でな。そや、この戦争でや。仰山の人が犠牲者になつたるんやさかいにな。そう言う、鎮魂の思いも込めんならんな。この曲はな。そないな曲でもあるんやで。あんまり、浮かれてばつり言うんでは、これもまた、申し訳ないことやしな」

浮かれた口調だったマリお婆ちゃんだったが、神妙な顔付きにもなった。それでも待ち切れずに、マリお婆ちゃんはお喋りを続けた。

「ジャズの名曲として、世に知られるようになって、音楽の好きな人やつたら誰でも知ってる曲や。よう、聞きなはれや。ほな、前講釈はこれぐらいいにして、戦争が終わった記念にや、そいから、みんなのこれからの前途を祝してや。名曲、『聖者の行進』の曲、マリ婆ちゃんから、勇輝くと権太くん、それに、宏志にも贈らせてもらいますでえ」

箱型の蓄音機が部屋の隅にはでんと控えていて異彩を放っていた。部屋に入った時、真つ先に、二人の目には付いていた。

四本の支え脚の上にレコード盤の木製の箱があり、大輪の花を咲かせたような口径五十センチの銀傘のラッパホーンがみんなに向けられていた。ラッパホーンは両手でないと抱え取れないほどもあるサイズで、勇輝らはその大きさにまず圧倒された。

すでにレコードは音盤にセットされ、レコード針も装着準備の状態にあった。レコードを掛ける前に、また、マリ婆さんがひとしきり前講釈を垂

れた。

「ジャズバンドオーケストラやからな。その、金属製曲がり尺八、サクソフォン、それに、トランペット、クラリネット、トロンボーン、他に、コントラバスにドラム、ギター、ピアノもありやな。ジャズバンドの面々は総勢十人はいる大編成や。この楽器、みんな敵性用語で言うたらやで、そうやな。もう使う必要もないし、舌を噛むよつてに言うのは止めとくわ。そや、トロンボーンだけは傑作やつたな。あれはよう出来(でけ)とつた。妖怪的四弦や」

「あんまり、話、長いと、わい、景気づけに前奏のところだけ、これで吹いてまうで。そいじゃ、おもしろくない思うてわいは我慢しとるのんやで」
宏志が手にしていたのは本物のサクソフォンだった。よく磨いてあるのでぴかぴかと光っていた。

今にも、吹きそうに宏志はマウスピースに口も付けて見せた。それを制してから、少年たちに向けてマリ婆さんは、もう一講釈を垂れた。

「終戦祝いに、もう一言だけや。みんな、自分のやりたい好きな道に進むんがいちばんやで。宏志の父ちゃんもな。ほんまは、アメリカのニューオリンズの本場もんのジャズに憧れとつてな。修行に行きたがとつたのや。もし、アメリカさんと仲良うなれるんやったら喜ぶやろな。ええか、音楽は人間の心を豊かにしてくれるでえ。婆ちゃんはそないに思うてるう。歌うのんも、曲を弾くのんも、自由な心ちゆうもんがあつてええもんや。ほ

な、『聖者の行進』や。みんな、サクソフォンでも吹きながらわが道を往くや。これからはそう言う時代やとええな。その時のための大行進の曲やで。そう思うて聴きや」

円いレコード盤がゆつくりと動き出した。

慣れた手付きでマリ婆さんが細いレコード針をセットすると、たちまち、耳に快い曲が流れて出て来た。その曲をバックに押し潰されたような声の英語の歌が被さった。

マリ婆さんの説明があつた黒人歌手ルイ・アームストロングの歌声であつた。もちろん、どの、パート、パートがサクソフォンの奏でる音なのかは、勇輝も権太も聞き分けられなかつたが、一体となつたリズムに打たれていると自然に心が浮き立って来た。

♪ Oh when the saint
go marchin in
Oh when the saints go
marchin in Lord how
I want to be
In that number
When the saints
go marchin in ♪

マリ婆さんはこのジャズの曲を聴きながら、手拍子を取り、首を左右に振り、足さえ、踏み鳴らすようにして、リズムを取った。

音さえ出さなかったが、宏志はサクソフオンを顔の上にかざし、真似だけのことだったが、レコードの曲を吹き鳴らす仕草をして見せた。

マリ婆さんと宏志は軽やかに体を動かさせた。曲に連れてリズム感が表現された。勇輝と権太は呆気に取られて見ていた。

英語の歌の意味が分らなかったせいもあるが、目から鱗とはこのことで、正直のところは、ぽかんと二人とも口を開けて聞き入っていた。歌を楽しんでいるのは主催者の二人だけだったが、それでも楽しさは伝わって来た。なお、『聖者の行進』の曲は続いていた。

その内、サクソフオンから手を離れた宏志が英語の歌を口ずさんだ。

「おー、うえんざ、せいんと、ごー、まーていにい…」

林間の中の一軒家とは言え、銀傘型拡大ラップホーンの威力もあり、ジャズの曲は裏の雑木林の向こうまでも響き渡っているようだった。もう、誰にも文句は言われない。

その自由さを謳歌するように、どこまでもどこまでも届けと、レコードのジャズ曲は快い響きをいつまでも奏で続けていた。

部屋の四隅に吊るし紐が掛けられていて、例年の夏のように蚊帳が吊るしてあった。夏も終わりの季節になっていたが暑い日が続いた。おかんと登美子、そして勇輝の三人は夏の夜は蚊帳の中でいつも過した。

近くの川からホタルが飛んで来て、蚊帳の外張りの天井の部分に止まっていた。息を吐く時か、吸う時なのか、青白い光をぼあぼあとホタルは放つ。幻想的だった。今夜も、十数匹はいた。

いつの間にかカブトムシも飛んで来て、こちらは壁に張り付いていたが、勇輝は関心を示さなかった。おかんの話に耳を傾けていた。

「なんや、えらいことニュースでは言うてるな。戦争で悪いことをしたもんは戦犯に問われて裁かれるなんて言うてるで。あんな。勇は特務機関員の教育を受けてな。所属は憲兵隊で、母ちゃん、聞かされてるう」

「憲兵隊で、あのけんぺいのこと言うてるん？」

そう素朴な疑問を勇輝が投げたのは、敗戦早々に憲兵隊公舎に住んでいた守田一家が追い立てられるように、早々に転校して行ったからだだった。『オココ屋いの一等地』と言えばあのオココの海苔巻きの味をどうしても思い出す。人のいい母親の顔も思い浮かんだ。

その後、色々と耳にした話では、いつも、憲兵隊員は軍の警察役で、厳しい軍務をこなして来たので、あれこれと、悪評が付きまどった。

負ければ、どんなことでも言える。そんな風潮でもあった。

実は、守田のことも、口さがない子供たちの間ではあらぬ噂も二つ三つは囁かれた。どれも、敗戦になってからの噂話であった。

「まあ、そらあ、憲兵隊と言っても色々やからな。勇は、下の方の位や。そんなん、責任のある立場にはおらんよって、そないなことには関わってはおらんと思うけんどもな」

「そんなん、考え過ぎやて。病院でもな。そないな話出てたけど、兄ちやんがそないな戦犯になるようなことするはずがないやん」

「お母ちゃんかてそう思うてるう。そやけんど親心言うんはな。悪いように悪いように考えて、わが子のこと、心配してしまうんや」

母と姉の話が続いていた。

蚊帳の中に迷い込んでいたホタル数匹を、涼を取るために手にしていた団扇（うちわ）を使い勇輝は引き寄せた。

うまく扱うと団扇の上に乗って来るので、そのついでに手で一匹捕まえた。いつも、ホタルの数は多いから、丁寧には扱わない。掌の上に乗せたホタルを勇輝は爪先でひよいと跳ねようとした。

「止めときい。ホタルは一週間も生きてないんやで。儂い命なんやから」
そう言ったおかんだったが、その後は黙り込んだ。命の儂さに触れたことで、ついつい、おかんは兄のことを思い出したようだった。

「夕方に雨が降ったから、今夜は湿気があるよってホタルの数が多
みたいやな」

お互いの沈黙に耐えかねたのか登美子がぼつんと言った。ホタルは湿気を好む。そのことに登美子は触れた。

「…なあ、母ちゃん、お兄ちゃんはどっか遠くに行ってるんやろか？」

「もう、ぼちぼち、軍隊から戻されてる人もおるみたいやしな。羨ましいわ。まあ、遠くにおつても手紙ぐらいは出せるかも知れんけど、こないに混乱してる時やからな。手紙かて届かへんのやろな」

（よっしゃ、わいは明日から、時間のある時は鈴蘭台駅の改札ん所に行つて、兄ちゃんの帰りを待ってるで。そいで、兄ちゃんの姿を見付けたら家に飛んで帰っておかんに一秒でもはよう知らせたる。ほら、兄ちゃん、家に帰って来たでつてな。これ、ほんまにおかんが喜ぶ大親孝行やでえ）

蚊帳の天井に目をやりながら、一人、勇輝は呟いた。

駅とは三分、走れば一分になる。青白い光を入り交（か）わせながらホタルはわが物顔に寢室を占有していた。

登美子が言った通り、その後も湿気が多いせい、ホタルの数が増えた。

発光するのは交尾のためにオスが光を点滅させるのだが、それにしても今夜は数が夥（おびただ）しい。やがて、勇輝は眠りに就いたのだが、瞼の裏にはまだ青白いホタルの余光が映じていた。

夢を見ていたのではない。ホタルを追っていたのでもない。

なぜなのか、勇輝の瞼の裏には青白い海が漂い始めていた。波立つてもなく、うねるでもない、広くて暗い海だった。

それなのに、遙か向こうには青白い海ホタルの群れる波があった。いつか、兄が口にしたあの果てのない青い海が、いつの間にか、ひたひたと押し寄せ、勇輝の体に取り憑き始めていた。波は寄せると言うよりは、ゆっくりと勇輝の体を包み込むと言った緩慢さで、ひた寄せに迫って来た。逃れようのない魔の手が、漂っている勇輝を掴み取ろうとしていた。それだけではなかった。ざわざわと、白い波が立ち始めた。

生き物の蠢きを感じ取っていたが、その青い海に兄が語ったネズミの群れが放たれているでもなかった。

現実の世界では、青白い光を放ちながら、ホタルたちが寝室に張られた蚊帳の外側を少し頼りない感じで飛び交っていた。

誰もが寝静まっている。おかんも登美子も何度か寝返りを打ったが、それでも、一日の疲れにもはや二人とも寝入っていた。

(なんでや。あないなとこに青白い島みたいなものがあるで。わいのこと、なんや、おいでおいでしてるわ。いや、あないなとこに行ったら、そや、あれはネズミの島なんや。わいはあないなとこに泳ぎ着いたら、そや、ネズミに食われてまう。骨の髄まで貪り尽くされてまうんや。あかんで、あかん…)

そう思った瞬間に、勇輝は目覚めた。

いや、何か、うめき声を上げたらしく、おかんに叩き起こされていた。

「なんや。悪い夢でも見たんかいな。えらいこと、魔(うな)されとった

で。しつかりしい。なあ、なんの夢を見とったんや」

ぼんやり見上げた天井にはまだホタルが飛んでいて、しばらくは勇輝は現実とも夢うつつとも知れぬ世界に身を置いていた。

登美子も目を覚まし、勇輝の様子を窺った。このあと、みんなは夏の蒸し暑い夜を過すこととなった。不吉な思いでも抱いたのか、寝付けぬままに、おかんは何度か、兄の勇の無事を祈る文句を口にした。

4

鈴蘭台駅の駅頭でも、復員軍人の姿も見られるようになり、人々の話題は大きな荷を背負ったそれらの連中のリュックサックの中身が軍需用物資の分け前であることへと移った。

国内に駐留していた軍隊はすでに解散されていたが、外地に残留している可能性のある者の情報は、この時期、ほとんど得ることは出来なかった。

壊れたラジオではほとんど何も聴けず、近所の者の噂や、登美子が勤め先で仕入れて来る情報しか、一家の耳には入らなかった。

何度も勇輝は鈴蘭台駅頭に行き、兄が帰って来るのを待った。大きなリュックサックを抱えた復員軍人が改札口へとやって来る度に、胸をどきどきさせた。残った夏休みの大半、夕刻頃になると勇輝は駅頭に立っていたのだが、兄の姿を見つけ出すことは出来なかった。

いつも、他愛ない権太の話から、勇輝はいろんなことを知った。

復員兵のリュックサックの大方の中身は米や砂糖や、食糧の缶詰類であること、一度も戦地には行かずに、そのような物資を持ち帰った者のことを世間では「戦争長者」とか、「持ち逃げ軍人」とか呼んでいること、それから、もう一つ、戦犯に問われる者の審問が始まっていて、戦犯対象者の日本帰還が困難であることも、亀福理髪店では話題になっていることも知った。おかんならずとも、勇輝もまた兄の勇が特務機関員であつたらしいと言う話に関心を抱いていたのであつた。

敗戦からもう三週間ほどが経過しようとしていた。暑い夏はそのまま、空には入道雲が立ち上がり、そんな日は夕立になることが多かつた。

ほんとうは、子供たちの夏休み、毎日、毎日が、南谷の池へ行っての水泳大会遊びで勇輝も出かけるころなのだったが、このところ、勇輝は権太の誘いを断っていた。

兄の帰宅を心待ちにして勇輝だけは、相変わらず、鈴蘭台駅の周辺を一人でうろうろしていた。兄の消息が気掛かりだつたのだ。

そして、夏休みも終わり、新学期を迎えた時、元担任の辺見先生が小部国民学校に復職して来た。広島・宇品港から海外に派遣されるところを原隊待機、輸送船の都合がつかずにそのままに敗戦を迎えた。勇輝が耳にした“持ち逃げ軍人”なのかと、ふと、勇輝は思った。辺見先生も多くの帰還兵の中の一人であることには変わりはない。

新学期になって、もう一つ、級編成に異変が起きていた。疎開児童の数が大幅に減った。

空襲の心配はもうなく、そして、家を焼かれずに済んだ者たちは元の学校にと戻って行った。六年一組で七名、二組では疎開児童数が多かったせいで、一挙に十一名が転校して行った。みんな、挨拶もせぬままだったので、疎開児童たちとは、その後、絶縁となった。

新学期、六年一組の担任として辺見先生は復職したが、開襟シャツと背広姿、身なりも以前の国民服姿の時の先生とは、まるで印象が違っていた。少し、元気もなかった。

アメリカの占領軍の通達で、「前向けマエ！横向けヨコ！」などの号令は使うべからず、ましてや、「カシラ中あー」などは厳禁の世の中になっていて、教師も戸惑っていたのであった。そんな時勢下での復職であった。

「みなさんにまた会うことが出て、先生は一番うれしゅう思っています。みなさんと別れて戦争に行く時は、ほんまに、みんなの顔を見るのんもこれが最後やなあて思うてたんやけんど、三年生の時からの持ち上がり、この六年一組には、先生にも多くの思い出があるよつてに校長先生にお願いして、六年一組の担任にさせてもらいました。日本が戦争をしたことがようはなかったことなんか、どうなんか、まだ、先生には分かつとりません。

軍国主義やのうて民主主義、そう言うことだけしか、今はまだ口にはでけん状態やから、もうしばらく先生にも時間をくれるよう、みんなに、お願

いをしときますう」

肩肘張っていた辺見先生の面影はなく、言葉使いの方も、関西弁まじりとなっていた。毎日、授業らしい授業はなかった。

一部、教科書には軍国時代の教育を否定するために黒線が入っていたりで、学ぶべき、教科書もなかったと言うのが実情だった。

芋蔓を伸ばした開墾畑の一部だけを残して、校庭は元の更地に戻された。

この秋には、子供たちを元気付けるために運動会も開催しなければと、先生たちが率先して復元を図った。

「なあ、ますます、食うもんがのうなって来てるな。負けた国はしゃーないけど、この頃は遅配、欠配や。それに、なんや、今年は台風が多おうて、米が不作になるやないかて話や。あほらし、わいとこのおとんなんか。

もう直きに、そこいらのサツマイモが採れるさかいに待つとれ。イモやつたら腹一杯食わたるわて言いよるねん。ほんま、なに言うてんねん、ひやくまんねんやあ」

いつもの権太節が出た。

秋の野っ原を満喫するなら、ここが一番の、「鈴蘭台登り坂台地」の草地に寝転びながら勇輝と権太の二人は話をしていた。

遠くからは、時々、神有電鉄のレールを踏む軌徹音や、信号音が伝わって来た。近くの山々に反響してこだまのように響く。

柔らかそうな穂を出したススキが秋風に撫でられてさやさやと揺れてい

た。花を咲かせた野あざみに、小さな赤い点々の花をつけたイヌタデやワレモコウも、今が盛りの花を咲かせていた。野っ原だけを見れば、どこも、何も変わっていないかった。キンエノコロの金色の穂を口に啜えながら、権太がやはり食べ物不満を口にした。

「食いもんは何でも供出なんやて。馬鈴薯も高粱も、片栗粉も、米も麦もな。それで、なんもかも農家は国に持って行かれてしもうてなんもあらへんて言うけんど、嘘やーてえ。あるところにはあるてうちのおとんは言うとった。闇米はな。配給の値段の六倍なんやて。そんなん、誰が買えるねん。な、こいつらも、なにやつてこましてんねん、ひやくまんねんやでえ」
権太節ばかりが絶好調だった。

このところ、勇輝は無口になっていて、一人、考え込むことが多くなっていた。おかんの心配事は、そのまま、即、勇輝の心配事であった。

軍隊から帰れる者はもうみんな帰されているーこれは、本土に居た者の話だったが、もう、一ヶ月余にもなるのに、何の音沙汰もなく、おかんは不安の日々を過していたのだった。

もっこりと権太が起き上がったので、同じように勇輝も起き上がり草地の上に腰掛けた。

「なあ、辺見先生もな、あれ、ぎょうさん、軍需物資をもらうて帰った口やでえ。あいつ、軍隊に顔だけ出して楽しんで帰って来よつたて、おとんが言うとつたで。それにな。民主主義言うてもな。誰もそんなん信じへんて。

そやろ、昨日まで、校長かて、みんな、はよう大（おう）きゆうなって、神風特攻隊のように成れてわいらに言いよつたんやで。学校の廊下に、神風特攻隊員の写真張ってあったん、勇輝も覚えてるやろ」

「みんなヤラレテもうたんや。なんもな。B29に体当たりしたあの時の飛燕の航空兵のこと、あれも、辺見先生かて、皇国の誉れやとか言うて、えらい褒めてたもんな。いや、わいらも、ようやったと思うたけんどな」

真実話としては、体当たりの飛燕は整備不良で操行不能になり、偶然、B29に衝突、結果として、体当たりの英雄譚が誕生したもので、戦後、遺族より、この話は根拠のないものとして否定された。もちろん、少年二人はそれらのことは知らずに過ごしていた。

権太がやや声を潜めて、次の話を口にした。

「散髪に来るんはみんな軍人の悪口ばかりや。憲兵隊の公舎にいた守田んとこやけんどな。神戸に駐屯して来たアメリカさんにな。出てけて追い出されたんやて。そいでな。あそこは憲兵隊でも下の方で事務職で最前線にも行つてないから、戦犯には引つ掛からんやろうから、命だけ助かった分、儲けもんやなんてえ」

「…そおかあ、オコーコ屋さんとか、そないなことなんや」

「あのオコーコ巻きは今でもやっぱりうまいもん屋いの一番地やな。マリお婆ちゃんが食わしてくれた西瓜もうまかつたけんど、あれ、うまいもん屋の二番地。三番目は、えーと、えーと、あらへん、まだそないなんあら

へんな。そやそや、戦争に負けてからからや。いつの間にか勇輝のさよなら三角の数え歌、わい、聞いてえへん、のうなつてもうた。一丁、行こかあ。三角、四角の数え歌、あれ、聞かせてくれたら、なんとか、わいは腹が減つとつても元気が出るんや」

「ほな。一発、空きつ腹に力入れて、歌おうたろか。わいも元気出るかいな」

キンエノコロ草の金色の穂を指揮棒代わりに、権太が勇輝の目の前でタクトを振った。

「ほなな。さよなら三角やま再度山／また来て四角う／四角は切符で／切符は切ーるう／切ーるうはyaksockゲンマン、約束ゲンマン／また来て四角う、また来て四角う…」

そこで、勇輝は言葉を切った。

あとは声が詰まった。涙が溢れそうになった。

「そないな新作やな。三角山再度山、言うのんもええなあ。落下傘も落ちたりしよって、あないな戦争もんとはオサラバさよならや。よっしゃ、わいとほな。男と男の友情や、わいは藤王勇輝とはひやくまんねんの友情をこれからも結ぶでえ。な、ひやくまんねんや。約束ゲンマンやったら、指切りゲンマン、嘘吐いたら針千本飲ますやで。ほらあ」

そう調子を合わせ、権太が右手を差し出した。指全体が催促するように動いた。だが、勇輝は手を差し出さなかった。

いや、差し出せなかった。兄の勇と再度山で再会する時のために「指切りゲンマン」は、大事に取っておくべきなのだった。

「お前とは出けへん。指切りゲンマンは出けへんのや」

首を横に振り、やっとの思いで勇輝は言った。右手の指は強く強く握り締めていた。

「なんや。出けへんてえ？男の友情はなしなんかいな。なんや。その態度お。わい、信じられへん。そんなん、わいを裏切ってることやで。あほらし、腹減るより、こっちの方がよっぽど悪いでえ。腹が立つてもうた。そんな、勇輝を見たんは初めてや。わい、もう、帰るわ。ほんまに、頭に来てもうた」

本当に腹を立てたらしく権太はふいと横を向くと、草地から立ち上がり、勇輝に背を見せて、すたすたと歩き出した。

勇輝は権太の一步、一步を止めなかった。その背にも声を掛けなかった。（ほんまに兄ちゃんとは指切りゲンマンや。約束は果たさんとあかんで。

な、兄ちゃん…）

その兄への思慕の聲が届くはずはなかったが、勇輝は呟かすにはいられなかった。ススキの穂波がさわさわと揺れているのを、勇輝は視野の内に入っていた。

秋風が野っ原を渡って行く。

涼やかで人の頬には心地良かった。涙が出そうになったが勇輝はもう泣

かなかった。秋風だけは今日はやさしかった。

野っ原を出て登り坂を下ると高架トンネル、その隧道（すいどう）の下を抜けると、直ぐの左側の場所が鈴蘭台駅になるので、勇輝は駅まで足を運んだ。

改札口の前に立ち、気丈に、電車から降りて来る人たちを代わる代わるに勇輝は眺めていた。夕刻近い時刻、神戸発の電車が到着する二番線からの降客は余りいなかった。

結局のところ、この日も、勇輝は無駄な時間を費やしただけのことになった。

第八章 さよら三角また来て四角

第八章 さよなら三角また来て四角

1

「なんやつ。なんなんや。これは…。そないなもんは受け取れませんでえ。帰って下さい」

おかんが玄関先で大声で怒鳴った。

破れ扉の玄関口に役所から来た小柄な公報係の男が立っていた。男に向けておかんが突き返した紙片には、藤王勇戦死の公報記録が記されていた。おかんは仁王立ちで、肩を怒らせ、役場の男に立ち向かっていた。

「どうも申し訳ありませんでした」

深々とお辞儀をすると受け取りを拒否し、公報の配達係りの男は玄関先から消えた。

「わあー、わあーんっ」

と、声を上げるなりおかんは畳の上にひれ伏し号泣した。何度も何度も畳を手で叩いた。髪を掻きむしり、首を左右に激しく振った。

おかんの狂乱の様を、勇輝はその背後から見ていた。

勇輝は声も掛けられずにいた。

姉の登美子は病院務めに出ていて、おかんの側に寄れるのは勇輝だけだった。だが、勇輝は何も出来なかった。

立ち尽くしているのが精一杯で、勇輝とて為す術(すべ)を失っていた。

(兄ちゃんが戦死？なんや？それてえ？)

同じ文句を勇輝は何度も繰り返していた。

十二歳の少年には起きている事態そのものは理解出来ていたが、自分の感情をぶつける手立てまでは見付からなかった。茫然自失、おかんの狂乱の様に目を奪われていたのだが、泣き疲れた末におかんはやつと側にいる勇輝に気付き、駆け寄るとひしと勇輝を抱き締めた。

「勇輝い、兄ちゃん、死んでもうた。もう、この家には帰って来いへんや。そないなことがあってええわけないのにな。どないにい、どないになつてんのや」

やはり、その声は怒気を含んでいた。ぶるぶるとおかんの体は震えていて、痛いように、小さな勇輝の体を抱き締め続けた。

おかんが顔を押し付けて来た時、おかんの涙がぼろぼろっと勇輝の頬に打ち掛かった。その涙だけは暖かった。

勇輝も一緒に泣けるだけ泣いた。おかんもそうだった。

泣き疲れた頃に登美子が勤めから帰って来て、おかんはまた登美子と一緒に泣いたが、今度は、登美子を慰める番に回っていた。

その夜、勇輝は兄の勇について色々なことを知った。戦死の公報には「ル

ソン島バクダンにて戦病死」と記されていた。

一兵卒として軍用船に乗せられて台湾に集結の後、遠い南洋の地、フィリピンに派遣されていたので、兄の勇は危険な海域での航海を、再度、強いられていた。

それでも無事に陸地にまでは到着を果たしていたのに、その結果は戦病死、余りにも過酷な運命を背負わされていた。

その死亡日は、昭和二十年七月五日、敗戦の報を待たずして、兄の勇は二十一歳の若さで命を絶たれていた。戦いの実態の大半は、密林に追われ追われての敗残行で、飢えと病いによる無残な死によるものであった。

親子三人、夕暮れ時になっても明かりも灯さずに家に引き籠もっていた。長屋に住む連中も公報を知らせる役場の人間が来たのは知っていたが、

誰もこの愁嘆場には訪れる者はいなかった。家族の者だけが兄の勇のことを想い、この夜、みんなで鎮魂の場を持った。

「みんなここへ来(き)い。船から帰って来ると勇はいつもこの柱んところ座とつた。なあ、あそこが勇の心があ、休まるところやったんや」

おかんが指し示した場所は、台所寄りにある六畳の居間で、みんなが食事をしていた団欒の間であった。その部屋の中央部に部屋を支えている床柱があり、兄の勇はその柱を背に、いつも談笑し、そして食事をした。

いつか、船で遭難した時、おかんと勇がひそひそと話し合っていた場所でもあった。

「勇に葬式なんていらん。あの子は母ちゃんや、あんたらの心の中に住んでるんやんからな。わざとらしく、サイナラなんて言いとうない。そやから、今夜は兄ちゃんのこと、みんなで一杯、話をせんとな。あれもこれもや。なあ、あんたらには話したことないけど、兄ちゃん、地震や、火事なんかに遭（お）うたらな。ぽろっぽろっとなんて知らんけど涙を流すのを知ってるか」

「いつか地震があった時、兄ちゃん、そないなことあったで。うちは知ってるう」

「そおか。登美子は知ってるんやなあ。なあ、勇はな。大正十二年八月生まれや。あの関東大震災の起こる一ヶ月前に横浜で生まれて、あの関東大震災に遭うたんや」

関東大震災では、行方不明、死者を含めて拾万人余が犠牲となった。

そして、家屋焼失、全壊戸数も三十万戸余、未曾有の大災害として、未だに、人々には語り継がれている。

「勇は生後一ヶ月の乳呑み児、母ちゃん、まだぶよぶよしてる赤ちゃんのあの子を胸に抱き締めてな。余震と、大火災の頻発するこの世の地獄の場を逃げ惑うたんや。父ちゃんは船に乗っててな。家におらなんだ。そやけど、罹災した仲間同士、回りのみんなが、赤ちゃんがいて大変やろて、母ちゃんを助けてくれた。もう、何度、これで母ちゃんも勇も命を亡くすことになるかと思うたことか。火の雨が空から降って来て、ごおーっと火

の嵐が渦巻いててな。そりや、ほんまにこの世の地獄やった。そのたんびにな。神様が助けてくれはった。いや、仲間のみんなに助けられたんや。みんなが母ちゃんや、なんも分からん赤ちゃんのな、勇にまで手を貸してくれはった。この世に生を享(う)けた小さな命や、みんなで大事に守らんとと、そりや、みんな、必死で助けてくれはったんや。そないな世話になった人に、母ちゃんは申し訳ないのや。一度亡くしかけた命を、勇はみんなの力で授けてもらうた。な、な、その時に助けてくれはった人たちの顔が、今でも、母ちゃんには想い浮かぶんや。その人たちに、その人たちにも申し訳ないのや…」

宵闇が迫っていて、みんなの顔も暗く写っていた。電灯の明かりを灯すために手をやる者もない。みんな、顔を見合っていた。

「…そいで、その、みんなにお世話になった勇がや。戦争で命を奪われると言うんはどないなことなんや。船で遭難した時のことも考えると、勇の場合はこれまでに二度も命を奪われ掛けた。そやけど、いつも、神様や、ご先祖さんや、親切な人なんかみんなで勇を守ってくれはった。そやのに…そやのにこの始末や。三度目に、とうとう、命を獲(と)られてもうたんやな」

登美子もおかんの一連の話には口を挟めずにいた。

おかんは涙にくれていて、その顔はくしゃくしゃに歪んでいた。鼻水までも垂れているので、登美子がそっとハンカチを取り出し、手渡した。

一度、涙顔を拭ってからおかんは懐かしそうに、主のいない床柱のあたりをつくづと見遣った。新たに涙がぼろぼろとこぼれ出た。

「あのなあ。勇が地震や火事の時なんかには、涙を流すんは、生まれ付きに、あの大地震の恐怖感が身に付いたからなんやろな。瞼は閉じてたけど、瞼の裏では、目の前で繰り広げられてる地獄絵をちゃんと写し取って見てたんや。人の叫ぶ声や、地の揺れ、それに、ごおーと地鳴りのように鳴るつむじ風、襲い掛かる火の嵐、ばんばんと、なんか、弾けるような物音もしとった。そうや、ぎゃーっと言う断末魔のような人の悲鳴も聞いたで。ほんまに、地獄やった。いや、勇は…また、その戦争地獄のただ中に放り込まれて、挙句に…命を失ってしもうた。どないに怖かったやろな。辛かったやろ。あの子、涙流して、いつも、そんなことに遭うたんびに、ぼろぼろ涙流して泣いてたんとちやうやろか…」

後は、おかんは言葉をおのずから呑んだ。

そして、細い肩を震わせ、さめざめといつまでも泣いた。部屋の中はただ寒かった。秋の夜長のこと、あたりが暗くなり始めると、一斉に秋虫たちが鳴き始めた。

エンマコオロギや、スズムシ、マツムシなどが、いつもの年のように、すだくように、競い合って季節を告げるための合唱を始めていた。

この旬日後に、白布に包まれた白木の木箱一つだけの藤王勇の霊が戻されて来た。遺髪と爪の一部だけが兄の勇の生存していたことの証（あかし）となった。戦地に発つ前に、覚悟をして遺していったものだった。

木の位牌には、誰がその銘を刻むことにしたのか、『誠忠院釈蒼勇居士』と、大層な戒名が記されていた。

その日、勇輝は悲しい気持ちを抱いたままに、一人で鈴蘭台夕陽ヶ丘の台地に向かった。

その途中、三川屋坂の坂上にある高垣の家、鈴蘭台花屋敷花番地の屋敷の前で、ふと、勇輝は足を止めた。誰かに、呼び止められたような気がした。そんな気配を感じ取った。

ひっそりとした暗さが住み付いていて、人の住んでいる様子はなかったが、坂を通り掛かった時、ぷーんと薫る金木犀の薫り高い香を嗅いだ。甘酸っぱい香りがあたり一帯に充ち充ちていて、花屋敷全体が馥郁とした薫りに包まれているかのようにだった。

この香りが勇輝を呼び寄せた。

（やっぱり、ここは、花屋敷やな。誰もおらんでも、こないなええ薫りを放っているんや）

勇輝は一人感心をした。何か、救われた思いにもなった。

戦地慰問をしていた宝塚歌劇団の宝シエンたちは、敗戦間近には、そ

んな軍の余裕も無くなり、本土に帰還させられていたので全員が無事でひとまずは日本に帰着していた。

まだ、そのようなニュースはどこにも流れていなかったのも、勇輝らが知るところではなかったが、青砥百合花も、歌劇団の再開を待つて待機している最中だった。

金木犀の甘酸っぱい薫りのお蔭で、勇輝の気持ちは少しは和らいだ。くんくんと鼻を鳴らして勇輝は胸一杯に薫りの空気を吸った。

小さな小さな橙黄色の花が、金木犀の枝にはびっしり着いていた。いくつかは、すでに、地に降り敷いていて、なお、強い薫りを放っていた。

踏み付けることもならず、そっとまたぐようにして、勇輝はこの地を後にした。更に、この坂を上ると、あのロシア人の館になり、その下にはロシア人の池が広がる。左右に何軒かの別荘風の建物もあったが、ずっと、続いているのはくねった坂道で、ちよつと息が切れた。

坂上の道を上がる途中でも、黒く壁を塗り潰されたロシア人の館の、北歐風の洋館を望むことが出来た。何事もなかったかのように、ロシア人の館は山林を分けて聳え立っていた。

平和な風景そのものだった。

ぐねぐね坂を一巡りすると、やがて、一つ鋤山の山々の見える場所に着く。夕陽ヶ丘と勇輝が名付けた丘地であった。

深まる秋の気配は、寄せてくる風にも冷たさの風気を伝えて来た。その

気配を察して、背高のススキの穂波がもはや揺れていた。

柿が実る頃になると、いつも、ススキのほうき状の花穂は開き、こうして、風に弄ばれてざわめくのだった。もう日暮れ時だった。

二年前に勇輝はこの台地で、一つだけ木の枝に残った柿の実を巡って、権太と二人、柿番をした。目の前にもその柿の木は立っていて、枝もたわわに柿の実を実らせていた。

およそ、三十個はあった。

勇輝は山々の向こうに目をやっていた。

至近の距離の柿の木は視野の内に入れたが無視した。低い山々だったが、その向こうの山の地帯は、神戸市街地の南東側になり、山並みは再度山の一角をも呑みこんでいた。

どこにもカラスの姿はない。もう、町のカラスも村のカラスもない。みんな六年生になり、少しは大人になっていた。

この日の夕焼け空は茜色ではあったが死んだようにひととところに止どまって動かなかった。中天に帯状の昏い雲が懸っているせいもあったが、その雲も夕陽を覆うようにしていて、余り動きを見せなかった。

さつきから、夕陽そのものを勇輝は探していた。少しだけ夕陽は雲間から顔を覗かせていたのに、雲が動き、今は、その昏い雲に吞まれて夕陽は隠されたままだった。

天の向こうには、再度山などの山々、そして、更に、その向こうには瀬

戸内の海々などが広がる。そして、更々に、その遙かな海の果てへと思いを投げれば、南の国の島々が浮かび上がった。

（兄ちゃん、死んでもうたんやな。ルソン島で言う島でも、兄ちゃん、朝の五時半と、晩の八時半、こっちの鈴蘭台の方角を向いて合図を送ってくれてたんやろか。そや、こっちの方角で言うんは、再度山の方でもあるてことやったんや…。わいも、兄ちゃんからの手紙を読んで、あの時、そないしようと思つてたのに、そんなん、やったことない。ごめんな。そやからこれからはルソン島のある方角に向けて、わいは手を合わせるようにするう。もう、遅いけんどな。そやからごめん。兄ちゃん、ごめんしてや…）

小さな手を合わせ、夕闇迫る空を勇輝は拝んだ。ゆったりゆったりと夕陽は落ちて来た。

雲間が切れて大きな鈍色の夕陽が山の端の空に懸った。ひたひたと、昏い雲がその背景の空で広がり始めていた。

どうしてこんなに大きいのだろうと勇輝は思った。それほどに、いつもの夕陽とは違い、この日の夕陽は山の端一杯に大きく懸った。それだけではない。いつまでもいつまでも、夕陽は沈もうとはしなかった。明るい光のようなものが夕陽の中心部に生じ立った。

まるで、命の鼓動を示すように、ときときときと、その光の集約点は瞬きもした。勇輝にはそのように見えた。

やがて、周囲が暗くなり始めた頃、天に懸ったままに夕陽はふわーと消えて行こうとした。消えて行くと言うより、回りの空だけが昏くなって、大きな夕陽全体を背後から昏く染めて行ったのであった。

なおも、鈍色の夕陽は天に在った。

勇輝の瞼の裏に、時が停止したかのような夕陽の輪郭が永劫の瞬きを伝えた。そして、次第、次第に、その瞬きさえもが昏い雲の夕空にと吞まれて行った。まさしく、一日の終わりであった。

すでにして、山の端は暗色に染められつつあり、山々のかたちそのものが失われようとしていた。ただ一人、立ち尽くし、勇輝は天に張り付いたように動かなくなった大きな夕陽に、なおも、小さな手を合わせ続けている。

3

昭和二十一年三月二十日。

小部国民学校の卒業式の日が訪れた。

春まだきではあったが、待ちに待ったほんものの花の便りが卒業生のみんなにもたらされた。丹波の地に転校していた寺山花菜子が鈴蘭台に戻って来て、小部国民学校の卒業式には出席することになった。

加賀美理紗が働き掛けた。

五年余を一緒に過した小部国民学校の卒業生になってもらうことを、同級生のみんなと話し合った末に、寺山花菜子に伝え、急遽（きゅうきよ）決まったことであった。これも、始まったばかりの民主主義教育と言うものの成果なのかも知れなかった。

一家ごと、この地に戻って来るのではなかったが、便宜的に卒業式にだけは出席して、みんなと笑顔一杯の再会を寺山花菜子は果たすことになった。もう一つ、卒業生には朗報が届けられた。六年一組、六年二組、合わせて七十六人の卒業生は、果たせなかった修学旅行の代わりに、再度公園、修法ヶ原池コースへの全員参加の遠足プランが組まれた。

小部国民学校からは徒歩一時間余の地ではあったが、遠足などをする余裕もなく過した生徒たちにとっては、このプランは思いがけないプレゼントとなった。

もちろん、汽車などを使つての旅程を組むのは無理な時代、戦後の混乱期、誰にも思い出の修学旅行などはなかった。

卒業生の親たちを中心にした父兄会で、この話は持ち上がった。その父兄会に参加した勇輝のおかんの話では、町のカラスも村のカラスもなく、この地域のみんなが今度は力を一つに合わせて実行に移したことだと言う。もう一つ、おかんは自分の胸にしまっておけなかったのか、勇輝に囁いた。

「みんなにええことがあるで。その中身までは言えんけど、楽しみにし

ときい。父兄会でな。卒業式やからお祝い弁当は用意させてもろうたで」
おかんの久し振りの笑顔を見て勇輝も嬉しくなった。笑顔を見せられるようになった分だけ、おかんもやっと立ち直りつつあった。

思うところがあつたのか、おかんは登美子の勤める結核療養所で、付き添い婦として働き始めていた。下の世話などもする雑事が主だったが、自分の息子と同じような若い年齢の者たちの命を預かる仕事なので生き甲斐を見つけ出したようだった。

当時の肺病はまだ死に至る病で、若くして儂い命を終える者たちもいた。その後、ストレプトマイシンなどの発明で、業病の肺の病いは消滅して行くことになるのだが、この時代は、その前の一過渡期のことであった。

弁当の話は当然ながら権太にも伝わっていて、二人は弁当の中身については、事前にあれやこれやと詮索を重ねた。

二人の結論は、にぎり飯であつたが、この世の中、やっこさの話で言えば、麦入り。もしかしたら、あの、ばさばさ食感の高梁（こうりゃん）を蒸した饅頭ではと、権太などは疑心暗鬼ぶりも見せた。

それに、もう一つ、おかんの話では、辺見先生がこの再度公園への遠足の実現には一番熱心で、父兄を前に自らの意見を開陳し、みんなの説得に務めたと言う。

「間違つた軍国主義を教え子たちに教え込んだ自分を恥じている。平和にっぽんに向けて巣立って行く第一回の卒業生、せめて、みんなにいい思い

出を残してやりたい」

と、涙ながらに、みんなに訴えた。

敗戦から、七ヶ月後の混乱期、軍が調達していた大量の米なども今は闇米として市場に流通していて、とてものこと、一般の者には手の出ない高い価格になっていた。

むしろ、食糧事情は悪くなっていた。

三月二十日、卒業式なのに、みんな軽装で学校にはやって来た。誰も再度公園への遠足付き卒業式を心待ちにしていたのであった。

みんなに、一番、人気があったのはハナちゃんこと、寺山花菜子であった。卒業式を飾るために、温室で育てた白いバラの花を父親の寺山実朗が用意してくれた。花瓶に挿されたその十数本の白いバラの花は、講堂の壇の上に飾られていた。そのバラの花を見た時、宏志は「あれが新種の白君影や」と、勇輝らに教えてくれた。

いつもの礼装用の黒いモーニングを着用した校長だけは生真面目さぶりを発揮していた。この校長は学校から花を追放した張本人であったが、今日の卒業式、白いバラの花はみんなの卒業式を祝福してくれていた。

♪ 蛍の光 窓の雪 ふみよむ月日 かさねつつ いっしか年も すぎのと
を あけては けさは わかれゆく…♪

様々な思いが、勇輝の頭の中にも去来し、思い浮かんでは消えた。誰しも、同じ思いを抱いたのだろう。すすり泣きの声もあちこちで聞こえた。加賀美理紗は父親を戦災で亡くしていた。今日の卒業式には母親だけが参加しており、共々に、二人とも泣いた。

だが、勇輝は泣かなかった。おかんも卒業式には出席していたから気丈ぶりを発揮した。一旦、教室に戻ると、もう、みんなはわいわいがやがや、教室の中は收拾が就かないほどの騒ぎになっていた。

話題はこれから支給される弁当の中身で、一部の者は、にぎり飯で、それも銀シャリ説を主張したが、即座に、有り得ない話だとみんなに打ち消された。

辺見先生が教室に現れて、やっと、その騒ぎが収まった。さつきまで、礼装用の背広姿だったのに、辺見先生も軽装に着替えていた。

「卒業おめでとう。戦争と平和とを同時に体験したきみたちが戦後の第一回の卒業生となりました。これからの平和ニッポンを背負って立つみんなはその第一期生、これからは、戦争のない、いいニッポンを作ってくれるよう先生からもお願いをしておきます…」

みんなが笑顔なのに、辺見先生だけは何度も涙ぐみ、言葉を詰まらせた。午前十一時、修学旅行の一行は、小部国民学校を出発して目的地再度公園、修法ヶ原を目指した。出発前、卒業生たち一人一人に竹皮に包まれたにぎり飯が手渡された。

歓声を上げ、みんなは弁当を受け取った。新聞紙で包装されているので、まだ、中身の方は確かめようはなかった。

誰も礼儀正しかったから抜け駆けをして中身を確かめる者などはいない。小さな水筒を肩に掛け、そして、弁当が入った思い思いのリュックサック、それに、肩掛けかばんなどのいでたちで学校を出発した。

いつの間にか、ぽかぽか陽気になっていて、遠足コースではみんな汗も掻いた。もはや、木々の枝には若芽が膨らんでいた。

林の道を抜けて行くと、爽やかな風も、追い駆けて来るように、生徒たちの背を押した。

有馬街道に出ると、山を伝った風も寄せて来た。川沿いに進み、細い間道を分けて山側に分け入ると、やがて、曲がりくねった起伏のある林道の一本道になり、山中へと踏み入った。川の瀬音がもはや聞こえていた。

林道の小径（こみち）には、アカマツ、コナラなどの樹々が、道を覆うようにして下枝を伸ばしていた。ここばかりはトンネル道となった。

見上げれば、木漏れ日が飛び、そして、隙間風のように抜けてくるわずかな春風が、若葉が覗き始めた下枝を揺すらせた。

シギ、チドリ、ヒヨドリなどの囀りの声が澄明な空気に溶け込み、やはり、春を告げていた。「ほーほけきよ」とウグイスも春の陽気に誘われてか何度も啼いた。やがて、樹下を往く生徒たちの元気の良い声や、高い笑い声に、自分たちの領域を奪われたのか、小鳥たちの啼き声はいつとき間遠

いものになった。

「けっけけ、けきよ」とウグイスも警戒の声を発し、飛び去って行った。

「毎日、こんなやったら、わいは朝と晩の二食は抜いてもええで。勉強はせんでもええし、弁当付き言うんが気に入ったるう」

権太が肩を並べて歩く勇輝に言った。

「ほなら、ずっと、小部国民学校の落第生でおったらええやんか。ほいで、毎年、卒業式にだけ顔を出したらええねん」

「なにを言うてまんねんやな。よう、言うわ」

二人は顔を見合わせにんまりと笑い合った。

「そんなんはどうでもええんや。なんや、歩きたんびにな。腹がぐうぐうと言いよるで。背中のな、何個分か知らんけど、入ったるう握り飯らしいもんがえらい重たいねん」

大きな声を出して権太が言った。話を振られて回りのみんなの関心もこちらに向いた。口々に、弁当談義を始めた。

「握り飯は三個分はあるで。重たいもんな」

「ちよつと大きいみたいやから二個やで」

「大きい言うんは、やっぱりな。それは高粱団子やで。あれはな。ちよつと喰えんは」

「小そうてもキビ団子、大きゆうても高粱団子、どつちも黄色おうて、あのまづい満州産高粱のキビ団子やないのんか」

わいわいがやがやと、口さがない連中のおしゃべりが続いていた。

もはや、どこにも、鳥の囀り声はなかった。

遠くの遠くで仏法僧らしい、「ぼあ、ぼあー」と啼く声が出ていたが、それも、いつか、聞こえなくなった。みんな汗ばみながら歩いてしたが、小さな滝壺のあるせせらぎの場所に出た時は、一斉に感嘆の声を上げた。

水しぶきと共に、その方角からは山の涼風がいつとき吹き寄せて来た。

やがて、先生と有志の父兄たちに引率された一行は、目的地の再度公園内にある修法ヶ原の池に着いた。池の面には光が溢れていた。

池面積は三千三百メートルあるので修法ヶ原池は広く大きかったが、今日ばかりは卒業生徒たちで占められ狭く写った。

それでも、満々と水を湛えた修法ヶ原池は、大きく見えた。六甲山系の山々から湧き入る山水は澄明そのもの、きらきらと輝いて見えた。池の周囲の松や楓の茂みなども、水面には映っていたが、三角山の形をした再度山のとっぺんあたりも一部は池に沈んで見えた。

引率した大人たちが、何か挨拶を始めていたが、みんなはもう余り耳を籍さなかった。もうとっくに昼の時間は過ぎていた。

みんな、池の見える草地や砂地に腰を下ろし、思い思いの場所で弁当の包みを開け始めた。みんながみんな、とても素早かった。

誰がどう声を上げたのかは分らなかったが、一斉に、子供たちの間から、

「銀しゃりやあ」「銀しゃりやわあ」の歓声が上がった。男の子も女の子も

なかった。池の面を揺るがすかのように、みんな一斉に声を上げた。

竹皮に包まれた梅干入りの銀しやりの握り飯は三つ、それに五切れのオココが付いていた。三切れは身を切る、そう信じた武士たちの例に倣って、晴れの門出のこと、オココは小さ目に切られていた。

「うおーつ、銀しやりやか。三個もあるンやから、初めの一個は一気食いやな。ほれ、行くでえ」

ぱくりと権太は食らい付き、たちまちの内に一個平らげた。のどを詰まらせ慌てて水筒の水を飲んだ。勇輝も同じように振る舞った。

「なあ、二個目はゆっくり味合おうて食うでえ。そや、このオココもうまいやか。鈴蘭台オココ屋いの一番地、守田がおらんのは残念やけんど、あそこのオココ屋のオココもうまかったで。な、アリガトさんや」

そう言い、権太は黄色いタクアンを一切れ手で掴むと、口に放り込み、白い歯並みをちらつかせながらぱりぱりと音を立てて嚙んだ。

「オココ屋はんのは海苔も付いてたさかいにな。なあ、権太、あそこがいの一番か、それとも、こっちが、いの一番かいな」

「質より量やて。ちよぼつとより、こっちの方が食い出があるで。まだ二個も残ったるう」

「ごもつともであった。

みんな、夢中で銀しやり握り飯に喰らい付いていた。ひよいといたずら風が吹いて、包み紙の新聞紙を何枚か宙に舞い上げたが、誰もそんなこと

を気にする者はいなかった。ふあふあと飛び、二、三枚は池にも落ちた。

そんな風も直ぐに止んだ。

「腹一杯やないけど、これで、しばらくは生きてけるな。ああ、銀しゃりめしはうまかったでえ」

権太の感想がみんなの気持ちを代弁していた。何より、辺見先生はここに顔で、卒業生一人に、「どや、うまいか。な、うまかったか」と、声を掛けて回った。

実際は、銀しゃりの握り飯用の白米は、村の有力者たちに辺見先生が働き掛けて実現したことだった。この有志者の中には、もちろん、門倉伸一郎の親も含まれていた。一時期、辺見先生が召集されて学校にいなかった時に担任になった薙刀（なぎなた）の名手、岡林先生の親戚筋にも協力者がいて、岡林先生も奔走し、この日の修学遠足旅行のプランは可能になった。みんなの善意が実ったのだった。

「一人ぐらい、先生や、父兄のみんなにな。お礼の言葉ぐらい言うた方がええで。うちはそんなん苦手やから、勇輝くん、あんた、みんなを代表し、アリガトさん言うてや」

加賀美理紗が勇輝の側にやって来て、そう告げた。その傍らには、いつの間にか、宏志が立っていて、にやりと笑った。

どうやら、宏志の差し金らしく、場を心得た仕切りの術にも、宏志は長けているようだった。それで、勇輝はみんなを代表し、引率して来た大人

たちに、通り一遍のお礼の言葉を述べることになった。

修学遠足旅行の楽しさと、貴重な食べ物銀しやり握り飯のおいしさについて触れた。誰がどう言ったのかは分らなかったが、「また、みんなここで会おうや」と言う声が掛かった。「そや、そや」の声も続いた。

この後、勇輝が卒業生のみんなに提案をした。再度山が望める再度公園、修法ヶ原の池も満々ときれいな水を湛えていた。

持ち前の機知（ウィット）精神を生かすべく、この時、勇輝は頭を巡らせた。

「今は大変な時期やけど、二十年経ったら、日本もどないか、なつて、まあ、ええ国になつてるかも知れへん。あそこに見える山の名前は再度山、ふたたびみんなで会うには、ほんまにええ名前やと思ってるんやけど、二十年後にはこの山の麓で同窓会をやるちゅんはどないやろお。ふたたび会おう再度山」みんな、この言葉を忘れんようにしたら、また、会えると思ふんやけど」

「ふたたび会おうふたたびさんや」

「それやったら、みんな、忘れえへんでえ」

口々に、そんな声が返って来たので、更に勇輝は調子に乗り、みんなを煽った。

「そややな。約束を果たすんやったら、そや、指切りゲンマン言うのんがええ。指切りゲンマン、指切ったら約束は守らなあかん。そないな気持ち

で、みんな、サヨナラしよな」

それこそ一世一代の挨拶、みんなとの約束話を、この時、勇輝は口にしてしまったのだった。それでも、勇輝の提案通りに、中には、近くの者同士で、指切りゲンマンの約束をする者もいた。

みんな、いがぐり頭とおかっぱ頭、その横顔は幼く、そして、純な目をしていた。何もかもが、夢のような話ではあったが、これが、長い長い物語、「夢の同窓会」の発端の話となった。誰しも、“ふたたび会おうふたたびさん”の呼び掛けの声を胸に、この日は、ひとまずの別れをしたのだった。

5

昭和二十一年三月の時期は、戦後の混乱期がまだ緒に就いたばかりで、これからは、どんな暮らし向きになるのかも知れず、この日本の国は、どんな国になって行くのか、何一つ、誰にも予測すら付いてはいなかった。

終戦直後に、アメリカ軍が日本には進駐し、神戸の市街地にも、米軍キャンプが張られた。

有刺鉄線で囲まれたそのキャンプ周辺地の外壁には、「この施設に近付く者は射殺する」旨の物騒な警告書も掲示されていた。

再度山の山中にあったとされる外国人抑留所だが、進駐後、米軍部隊は

迅速に行動し、終戦二週間後の九月八日には救出作戦を敢行。全員の身柄を確保した後、直ちに、乗り継ぎの飛行便などを調達して身柄を移行。本国ハワイホノルルに、九月二十四日には全員の送還を果たして、その任務を完了していた。神戸だけに限れば、捕虜を扱う抑留所は四ヶ所あり、日本でも有数の数であった。

開戦当初、日本軍が南洋諸島の島々を占領したことで、その際、連行した捕虜・民間人一七六名が、当初は各施設に分割収容された。

主に、グアム島から連行された者たちであったが、国際赤十字の監視下にもあったことで、比較的優遇されていたとあるが、それでも、その内、十名ほどの者が病い、飢えなどで、終戦時までに異国の地で命を絶つ運命下に置かれた。

分散留置されていた捕虜たちは港湾地や臨海重工業地などで、過酷な作業が負わされていたが、空襲が激しくなった時期、大方が再度山の養護施設、「竹馬学園林間学校」の敷地内に移された。

再度山の外国人抑留所は昭和十九年七月には、その数一七四名とあるが、将兵だけでなく、開戦時帰国の機会を逸した貿易商、牧師、外国語教師などの民間人も含まれていた。

昭和二十年三月十七日の神戸大空襲では市街地は火に包まれ、阿鼻叫喚の地獄の様相を呈した。一般市民にも犠牲者が多く出た。

だが、この再度山の地は天然の山の利に預かってことだったが、空襲の

難からは免れた。幸いなことに、ここでも「再度山の安全神話」は生きていて、收容者は無事だった。

墜落したB29から落下傘で降下し、日本軍に逮捕されることになった二名のアメリカ兵たちに課された運命は過酷なものであった。

身柄を拘束された後、先例として捕虜一名は、軍律会議に掛けられた。

その結果、「無差別爆撃を行って多数の市民を殺傷した罪」により、銃殺刑の宣告を受け、大阪・泉南にあった演習場で処刑されたが、実際には、斬首の刑に処されていた。

その時、二等軍曹であった通信兵は、「わたしはあなた方を恨まない。わたしが任務を実行したように、あなた方も任務で行うのだから。ただ一つ言いたいことは、このいまわしい戦いは間もなく終わり、そして、永遠の平和がもたらされるだろう」と、最後の言葉を陳述したと言う記録が残されており、また、処刑直前、二人のアメリカ兵は、「see you again」「good luck」と言いながら握手、刑に臨んだと言う。

また、再度山近くに墜落したB29の機体は大破、三つに裂けてあたりを飛散していた。

再度山、麓の地にある大龍寺住職の目撃談によると、「修法ヶ原池西側の松林に落ちた機首部分には座席に座ったままで絶命しているアメリカ兵数名の遺体があり、童顔の残る若い兵士たちばかりだったので、かなりの衝撃を受けた」と言う記録も残されている。

敵も味方もない一戦いの実相のほどが、ここでは目撃者によって、如実（によじつ）に語られていたことになる。

やがて、平和な時が訪れて、六甲の山々も、極く、当たり前のように、それぞれの季節の表情を示してくれるようになった。ここにも、人の心を癒してくれる時の移ろいがあった。

『♪一（ひい） 二（ふう） 三（みい） 四（よう） 五（いい） 六（むう）七（なあ） 八日（ようか） 九日（このか） 十日（とうか）
たち によつきり芽が出る 山の上 山の上 小さな杉の木顔出して
「はいはいお陽様さま 今日」 これを眺めた権（しい）の木は あつ
ははのあつははと大笑い 大笑い ♪』

敗戦後、ラジオ歌謡で流行した愛唱歌、「お山の杉の子」の歌詞通りに、少年、少女たちも、その後、すくすくと伸びやかに育った。

彼らを後押ししてくれているような、こんな一節もあった。

『♪こんなチビ助 何になる びっくり仰天（ぎょうてん） 杉の子は 思
わずお首をひっこめた ひっこめた ひっこめながらも考えた 「何の負
けるか今に見ろ」 大きくなって 国のため お役に立ってみせます
みせます』

『♪丸々坊主の禿山は いつでもみんなの笑いもの 「これこれ杉の子起
きなさい」…』

これらの一節は、焼け跡復興の望みも託されているような歌詞でもあったので、人々の心を明るくもしてくれ、鼓舞する効果も大だった。

「二十年後にふたたびさんでふたたびあおう」と提言した藤王勇輝の思いそのものが、実行に移されたのは、世情が落ち着きを見せ始めた昭和四十年五月のことであった。

この同窓会開催のそもそもの機縁となったのは、「女二人仲良し組」の力に預かるところ大であった。この年の春、寺山園芸とその名も変えた花苑ファームに、藤王登美子と加賀美理紗の二人が招待されることになった。丹波の地に移り住んだ後、寺山園芸は当地では有数の花栽培ファームとなり、事業の面でも、折からの好景気もあり大成功を収めていた。仲良し三人組のみんなに約束したハナちゃんの夢、あの夢が花咲きつつあるかのような、それは朗報でもあった。

加賀美理紗は亡き父の遺志を継いで神撰新聞のカメラマンの職に就いていた。新種のバラの取材も兼ねての訪問となるので、やる気充分で、おお張り切りであった。登美子も同行するよう誘いを受けた。

病院給食での調理助手役を日々になさっていて多忙の身だったが、喜んで参加した。

お陰で、勇輝は居ながらにして、花屋のハナちゃんこと花菜子の、その後の動向について情報を得た。山々の風景は鈴蘭台とは余り変わっていないかったが、山麓の地に大きく広がる寺山園芸では季節ごとの花の栽培が軌

道に乗っていて、アネモネ、ガーベラ、チューリップなどの人気のある花に加え、高級花の蘭の花の栽培も手掛けるようになっていた。

姉の登美子の話を借りれば、「蘭の花言葉はわがままな美人、その分、えらい手間暇が掛かるんやて」と言う話になるのであった。

新種のバラでは白系統の「白君影」の突然変種も生まれていて、展示会では特選賞も獲得していた。放射光を当てて変異種を生み出す新手法の成果も得ているようで、「花が応えてくれる花の心」の手応えを、寺山実朗は感じ取れる日々送っていたのであった。

もちろん、加賀美理紗が撮影した「新種のバラの花」は、後日、記事として新聞に掲載されたので勇輝も目にするようになった。

この仲良し組の交流は、その後も続いた。

女仲良し三人組に触発されて、「小部国民学校六年生」の同窓会も、昭和四十年の五月に、約束通りの再会の場所、再度山公園に集合し、のち、会場をホテルに移して開かれた。フリージャーナリストの職にあった藤王勇輝も多忙の身だったが参加した。一部の欠席者はあったが、総勢、五十余人が集まった。

尽きることのない四方山話、それだけではなく、やはり、「食べ物、物資不足」、それに、「疎開児童」たちの様々な思いなどが語られた。勇輝などは、村のカラス、町のカラス、都会のカラスたちの、今で言うところの生まれ育ちの差による「文化ギャップ」などがあったことも口にした。みんな

なの率直な感想だと、そんな分類をされて呼ばれていたことなど露知らぬと言う話にもなった。

卒業生ではなかったが、問題の、白岩ひかる子お嬢様のその後の身の上だが、こちらは、親父を継ぎ理髪店になった亀福権太情報に拠り、アメリカ人と国際結婚の事実が知れた。

亀福権太の言を借りると、「これがほんまのラッキー、カム、カム。アイラブユーやな」と言う関西弁ことばの結びと相成った。

何より、この時、ニュー・オルリンズのジャズバンドに身を置いていた羽鳥宏志が不参加組の一人となったのは残念なことであった。

羽鳥宏志の父親は日本に帰国後、戦後のジャズを広め、興した一人として、音楽の世界では評価されており、サクソフォン奏者の才は息子の宏志にも受け継がれることになった。マリお婆さんの思いのほどは、親子二代に渡って、適えられることになるのであった。

一時、マリお婆さんもニューヨークにも住んだこともあり、彼我（ひが）の国の様子などもつぶさに目にする機会も得たようだった。

母の菊江は、今で言うところの介護職、当時は、付き添い婦などと称した仕事をそれなりにこなしながら、その終生を了えていた。

鈴蘭台地区だが、もはや、今昔の観があり、開発に次ぐ開発、それに伴う地名変更などもあって、様子がすっかり変わっていた。

今、藤王勇輝が住んでいる家は、少年たちが夏になるとプール代わりに

していたあの南谷の池の近くにあったが、開発されて池そのものも無くなり、地名も田舎臭い地名だったが、今は神戸市に編入されて鈴蘭台南町と変更されていた。ちなみに「小部国民学校」も、この地区が神戸市に編入された後、「神戸市立小部小学校」となっていた。捕虜リンチ事件に関連したロシア人の池も、やはり開発のために埋められて今は無く、また、ロシア人の館なども区画整理されて、その面影すらこの地にはすでに無かった。

それでも、東西を山々に囲まれた南北に細長い地であることには変わりはなく、どこを見ても、山また山、それに、小道に分け入れれば、「急な坂また坂の地」で、その地形までもが、大きく変わっているわけではなかった。

ずっと、この街に住んでいる亀福権太の言を借りれば、「山があるから、わいなんか生きてけるんや。山だけは、人間を裏切りよらん。ここらあたり、嶮しいだけ、人間の手にも負えんと言っこのつちや。いつまで経っても、そないには変わりよらん」と言うことになる。

当の亀福権太は文字通りの山男で、「再度山・毎日登山会ふたび」のメンバー。山男たちが顔を出す山の茶屋でも、もはや、超ベテラン、生き字引のような男になっていた。傍ら、自然観察員も兼ねていて、四季折々の草花や植生について専門的な解説もするボランティア活動も行っていて、地元密着型の暮らし方を通しているところなど見上げたもので、この男の生き方は一本筋が通っていた。後は、羽鳥宏志のその後の心意気とやらを訊いてみたいものだ。藤王勇輝は思っていた。

何よりも、あの再度公園での修学旅行の日、羽鳥宏志はマリお婆ちゃんとの約束通りに、サクソフォン奏者になることを二人に誓った。

「わいな。この再度山の向こうに向けてや。思いつ切り、一曲吹いてこましたるよつてにな。その日まで待っててんか。な、口笛なんかやあらへんで、ほんまもん、ほんまものサクソフォンの奏でる曲や」

と、羽鳥宏志は、それこそ、声高らかに宣言して見せたのだ。今も、藤王勇輝はその一元一句を忘れてはいなかった。

この同窓会での約束話、羽鳥宏志だけが、約束が果たせずに、長年が過ぎることになったのだ。もはや、みんな老境、そんなに余裕はない話で、これは完結が待たれる話のはずであった。話の続きはあるのか、ないのか。

誰だって、この結末のほどとやら、知りたい話であることには違いなかった。

エピソード

「こら、ほんまに五月の季節そのもんやな。風と空気と光が一杯や。山裾野から渡つて来る風は涼しいし、胸一杯に吸う空気はうまいし、こらやつて浴びてる光は心地がええ」

時折り、藤王勇輝は深呼吸をした。

木洩れ陽と共に、眩しさが走って目を細めた。樹幹と樹幹、そのちよつとした隙間からは、不意に風が割って入って来て一陣の風ともなった。

林道の傍らに沿ってしばらくは小さな清流が続いた。

このあたりは、まだ、森の小径を分けて進むことになり、空を覆うブナなどの照葉樹も、枝々を大きく広げ、山道を覆っていた。

せせらぎ谷や、堰止めのある小さな滝壺のある場所を通り過ぎた。

躍動している瀬音が高く響き返って来た。やがて、平坦な遊歩道が行く手に続いた。草いきれのする道で、青々と道は開けていた。

小一時間も要したが、再度公園、修法ヶ原池に到着した。ゆっくりと池を一周し、南東の方角に位置する三角山の神戸富士、再度山に対した。

再度山は修法ヶ原の池の面にその影を落としていた。

濃い緑を含んだような色は水の深さをも映じてのことで、秀麗な逆さ富士が、その深さの淵には沈み込んでいた。

「ええなあ。やっぱり、再度山は変わらんな。その辺の山に比べたら、裾野がなだらかな分、姿かたちが整っててきれいやし、その分、見る者の目にやさしい山でもあるな」

再度公園の広々とした地にも風は降り立って、砂地に生え立つ松林を揺すらせた。五月の風は青嵐（せいらん）含みで、どこまでも、風までもが青く息衝（づ）いていた。山男の亀福権太は健脚向けの縦走コースを取り、間もなく、やって来るはずだった。

「サクソフォン奏者になる夢を叶えた羽鳥宏志のお出ましやの番やな。もう直ぐ約束の二時や。さよなら三角また来て四角、この我が物語、あいつの出番なしには話は完結せえへん。長らくお待たせしましたやで。その分、思いつ切りの名演奏をやってもらわんとな」

もう、再度山公園の地に羽鳥宏志は到着しているのではないかと思ひ、ひと渡り、藤王勇輝はあたりを見回した。高い松林と、白い砂地、そして、ボート乗り場とレストハウス、どこを見てもまだ人影はなかった。

その時、どこから現れたのか、山男姿の亀福権太が約束の場所であるボート乗り場裏のレストハウスの影からひよいと現れた。

その対岸の位置から、亀福権太が藤王勇輝を見付けて、元気よく手を振って寄越した。これで二人目の登場人物が揃った。

池を半周して、藤王勇輝もボート乗り場にと足を運んだ。

二人は肩を並べた。

「なあ、あいつ。まだ来よらん。大体がや。かっこ付けやからな。なんか企んでるんとちゃうか。わし、そないな気がするねん」

早速に、亀福権太は声を掛けて来た。年は取っても、団子鼻はそのまま、心なし、鼻の穴が開いた。ゴンタ大将の面影ありだった。

「その方がおもしろい。お前みたいに、手ぶらでや。ひょいと現れたんでは話にならん」

「なに言うてまんねんやな」

「はは、みんな少年時代に戻るんやから、亀福権太もその調子で頼むわ。そやそや、あいつに電話連絡した時にな。孫娘が日本に留学するんやて、

あいつ、嬉しそうに言うてた。なんや、サクソフォンも吹けるて話やでえ」

「へへえ、そないなことか。それで、その孫娘には、わいら、お目に掛かれるんかいな」

「わからん。きつとえらい別嬪(べっぴん)さんやと思うけんどな。それも、あいつみたいに足が長うてや。なんや、孫娘まで、ごつつう、かっこえのとちゃうかな。うーん、そっか、ははあ、そないな話になるんやな。ありそいな話や」

「なんや？ありそいな話て？」

「待てえ待てえ。ははあ、そないな結末になるんやなあ。その方が話はお

もろいでえ」

一人だけ、藤王勇輝は納得顔になり呟いた。

二人とも、約束したボート乗り場近くの指定の席に付き、今か今かと、羽鳥宏志が現れ出でるのを待っていたのだが、藤王勇輝にだけは、大方のストーリーイが読めて来た。

（あいつにはこれぐらいのことはやってもらわんとな。その分、三人の約束事、年月が掛かつてるでえ。そう言う演出もありなら、まあ、羽鳥宏志、許したつてもええか）

ありそうな話が、頭の中で、ぐっと現実味を帯びて来た。一人、藤王勇輝は頷いた。再度山は、彼らのやや背後、右手方向の南東の側に位置していた。修法ヶ原池の水面に、微かに風が渡り、漣（さざなみ）が立った。

「おっ、あれ、宏志やないのんか？」

と、亀福権太が対岸の丘地の上に人影を認め、そちらの方角を指差した。草地になった小高い丘陵地で、木杭の打たれた二十段ほどの階段道が、そこには続いていた。その丘の上で、人影が動いた。

（なるほど、そういうことかいな。ラストストーリー、よう、でけてるやないか。こりや、考えた通りの結末やな）

藤王勇輝が考えたありそうな話が、そのままに、実現されていた。

さらさらと、五月の陽光が撥ねて動いた。

それに連れて、金管の楽器が光った。

人影が二つ動いた。羽鳥宏志とその孫娘の二人に違いなかった。

手を振り、二人は対岸の二人に合図をして見せた。

孫娘らしい若い女の子は、特に、千切れるように懸命に手を振った。

すらりと足が長くて、かつこがよかった。

サクソフオンはこの孫娘の玲奈が別ルートの子の車の便を使い、ここまで運んだものだった。

再度山の頂上に向けて二人は対峙していた。

「玲奈、この曲は鎮魂の曲でもある。お前たちの世代だと遠い物語になるかも知れないが、太平洋戦争最中（さなか）、将兵だけでも、二百数十万人の犠牲者を出したんだよ。このことは玲奈の世代でも覚えておいて欲しいことだな。それじゃ行くぞ。わが旧友と、戦いで国の犠牲になった多くの若者たちにもだ。心を込めての一曲を吹かせてもらおうよ。ジャズを放つてやっだ。さあ、チンドン屋稼業を始めるか」

羽鳥宏志が、孫娘にそう告げた。

サクソフオンが二つ、胸元に捧げ持たれた。羽鳥宏志のパロディシャツの英文字は、「SUIT YOURSELF!」、玲奈の胸の文字は、「HAVE ON, S WAY!」。二人の気持ちのほど、意識をすれば、「勝手にしろ!」「勝手にさせてよ!」で、意気もぴったしのメッセージ文句、わが道を往く、そんな心意気も込められているようであった。

この時、どこまでも届けとばかりに、高い音色のサクソフオン演奏の曲

が青い空に響き渡った。空を裂き、空の果ての、遠くの遠くにまで、その音曲は響き渡って行った。あの『聖者の行進』の曲だった。

サクソフオンを掲げ持ち、羽鳥宏志と孫娘の二人は、この時、思いのたけの演奏に耽っていた。踊るような演奏ぶりだった。

♪ Oh When the saints

go march in i

in / Oh When the saints

go march in in...♪

懐かしいレコードの音曲が、高々と奏でられていた。勇輝も権太も羽鳥宏志のサクソフオンの生演奏の音を聴くのは初めてのことだった。ましてや、孫娘との競演、願ってもない話の結末が、ここには用意されていた。

サクソフオンの音色はどこまでも澄明で高く、どこまでも力強く、あたりの空気を震わせながら響き渡って行った。

「あいつはかつこええ。こりや、やっぱり、わいら、やられてもうたな」
これは感心しきりの権太の言であった。

「あの演奏、ちゃんと聴かんとなあ。なあ、音楽は人間の心を豊かにしてくれるて、レコードを聞かせてもろうた時、マリお婆ちゃんは言っとった。

それに、マリお婆ちゃん、『聖者の行進』は鎮魂の曲でもあると、わいらに

は説明してくれたんやった。黙って、聞きや」

そう言いながら、つい、勇輝も余計なおしやべりをしてしまったが、あとはサクソフォンの音色にひたすらに耳を傾けた。

再度山の頂を遙かに越えて、サクソフォンの音曲は、更に、海の方こうにまで届けられているかのようにだった。修法ヶ原の水面を五月の蝶が白い羽を掲げて飛んでいた。どこかで、大きな魚が跳ねた。

なおも、金管の楽器はぴかぴかと光り、あたりに眩い光芒を放った。

よく磨かれ、手入れされているらしく、サクソフォンの金管には、一点の曇りもないかのようにであった！。

〈完〉

参考資料

昭和世相史 戦中編 平凡社

昭和世相史 戦後編 平凡社

船舶砲兵 駒宮真七郎著 出版共同社

白系ロシア人の日本文化

沢田和彦著 成文社

タカラジエンヌの太平洋戦争

玉岡かおる著 新潮新書

昭和二十一年八月の絵日記

山中和子著(株) トランスビュー

※この物語はフィクションであり、団体名、個人名などには一切関係はありません。

